

観世流・金剛流 宗家本発元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291)2488-9 振替東京3-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替京都1-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

— 部 90円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

(平成5年1月)

15日(祝) 清 韻 会 大 会 (来場歓迎)

30日(土) 青 陽 会 定 式 能 (有料)

(2月)

7日(日) 宝 生 会 定 式 能 (有料)(番組③面)

11日(祝) 富 羅 会 (来場歓迎)(番組③面)

14日(日) 観 世 会 定 式 能 (有料)(番組③面)

21日(日) 九 皇 会 定 例 能 (有料)(番組④面)

27日(土) 三 菱 重 工 ・ 自 工 連 合 謡 曲 大 会

28日(日) 正 風 会 (来場歓迎)

(3月)

7日(日) 大 蔵 狂 言 会 (来場歓迎)

13日(土) 名 古 屋 能 楽 鑑 賞 会 (有料)

14日(日) 三 交 文 会 (来場歓迎)

19日(金) 四 大 学 交 流 会 (来場歓迎)

20日(祝) 萌 羅 会 大 会 (来場歓迎)

21日(日) 豊 泉 会 大 会 (来場歓迎)

28日(日) 梅 嶺 会 (有料)

(4月)

4日(日) 下 田 雄 三 師 中 部 地 区 連 合 会 (来場歓迎)

11日(日) 観 世 会 定 式 能 (有料)

17日(土) 鑑 賞 会 (来場歓迎)

18日(日) 邦 舞 会 (来場歓迎)

25日(日) 久 田 観 正 会 (来場歓迎)

29日(祝) 華 友 会 春 の 会 (来場歓迎)

(演能変更の節はご了解下さい)

6月・8月に市民能

能楽協会名古屋支部 平成5年度公演日程

能楽協会名古屋支部主催による平成5年度の演能は、恒例のように熱田祭奉納能、名古屋新聞大衆能、歳末助け合い協賛能の四公演に加え、新たに「市民能」が催される。市民能は六月と八月の二日間それぞれ二部制であわせて四回公演される。それぞれの日程、演能予定は次のとおり。

。熱田祭奉納能 六月五日(土)
(宝)能「巻箱」(戸田和)、
(副)舞臺子「唐船」(吉川周子)
(観)能「羽衣」(三村恵子)ほか狂言、仕舞
。市民能六月二十六日(土)十
一時開演、狂言「長光」(野村信
行)(観)能「天鼓」(久田徹三)
▽午後二時開演、狂言「棒縛」、
ひきつつき楽屋で熱田神宮能楽
協会 能楽師養成会事業など報告

能楽協会 名古屋支部 謡初式

能楽師養成会事業など報告

能楽協会名古屋支部(西村欽也支部長)は一月三日午前十一時から恒例の新年謡初式を熱田神宮能楽殿で催し、支部所属能楽師五十二人が参集、野村又三郎支部長が発声で「四海波」を謡い平成五年の幕明けを祝した。

それより支部臨時総会を開き、本年四月からの支部役員人事として、支部長に野村又三郎氏、副支部長に梅田邦久、福井啓次郎(新)部員に三氏を決定、西村欽也支部長は相談役に就任することが承認された。

また報告事項として、平成五年度は、新たに「市民能」を六月と八月に挙行、これとともに平成五年度の支部主催演能の日程が発表された。(関連記事別項)

さらに①一月三十一日に開催の愛知県芸術劇場落成記念能は、収容能力以上の入場申込みであったが、入場券整理の目的があったこと②養成会事業は平成四年九月からこれまで四回開催の報告と今後の方針説明③市立能楽堂の建設計画は順調に推移、座席は六百席に決定したことなどが報告された。

なお協会支部新会員として金春流シテ方、鈴木寿氏が紹介された。

ワキ方高安流宗家
高安勝久氏が継承
ワキ方高安流は、昭和五十三年、十三世宗家高安滋郎氏が逝去されて以来、西村欽也氏が宗家預りを勤めてきたが、このたび高安勝久氏が十四世宗家を継承、十二月二十一日開かれた宗家会で承認された。

年 新 賀 謹	
委員長	熱田神宮能楽殿 岡地幸雄
委員	熱田神宮能楽殿 露原通泰
委員	熱田神宮能楽殿 大山剛
委員	熱田神宮能楽殿 伴明郎
委員	熱田神宮能楽殿 杉山勇夫
委員	熱田神宮能楽殿 西村欽也
委員	熱田神宮能楽殿 井上松次郎
委員	熱田神宮能楽殿 鬼頭喜太郎
委員	熱田神宮能楽殿 福井啓次郎
委員	熱田神宮能楽殿 梅田邦久
委員	熱田神宮能楽殿 寛 敏一
委員	熱田神宮能楽殿 藤田六郎兵衛
顧問	熱田神宮能楽殿 長谷晴男

年 新 賀 謹

名古屋観世会	観世清和	昭門昭会	観世元昭	社団法人鏡仙会	観世鏡之丞	観世栄夫	観世暁夫	幽 謳 会	片山九郎右衛門	梅 嶺 会	梅 若 盛 義
名古屋観世九皇会	鳳 鳴 会	幽 花 会	片山慶次郎	財団法人研能会	梅若万紀夫	梅若万佐晴	大槻清韻会	大槻文蔵	名古屋観世喜之	加藤保彦	青木武弘
名古屋正花会	武田志房	片山慶次郎	片山慶次郎	大槻清韻会	梅若万佐晴	梅若万佐晴	大槻清韻会	大槻文蔵	観世喜之	高木美智	高橋一
山本勝一	武田志房	片山慶次郎	片山慶次郎	大槻清韻会	梅若万佐晴	梅若万佐晴	大槻清韻会	大槻文蔵	観世喜之	高木美智	高橋一

志月雅日記

(136)

咲く頃あれば

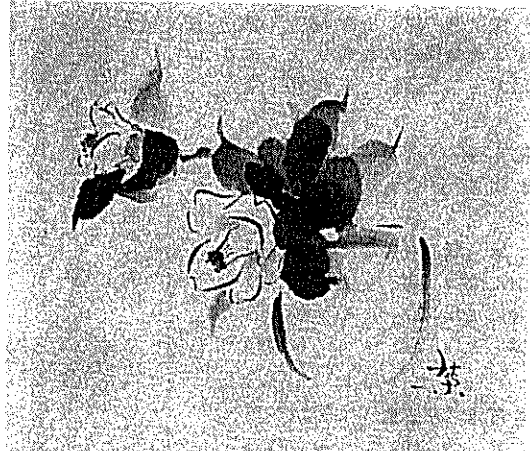
えと文 二井栄逸

いづれの花が散らで残るべき、散る故によりて咲くころあれば珍しきなり。

これは風姿花伝第七、別紙口伝に記された世阿弥の芸術論である。世阿弥は芸の奥義を「花」という言葉で表現している。

どの花でも散らないで咲き残る花はないけれど、散る花なればこそ季節が到来すれば、美しい花を咲かせ、人々に新鮮な感動（世阿弥は感動を珍しきという言葉で表

こないだ作曲家である三善晃氏の間人用達というエッセイを読んで同じことだと思つた。三善晃氏は、「大きな魚が小さな魚を食べる——天然の魚たちは、自然増えたり減ったりするでしょう。」



大きい魚も、小さい魚も人が食べ——天然の魚たちは、やがていなくなってしまうでしょう。それで養殖、そして交雑育種、ヒトは勝手なものです。網と平貝、龍宮のやんごとないお姫様まで、今や養殖、天然のものよりも派手な装いで気取ってお出ましになる故郷のないお姫様たちです。魚ばかりか、肉も野菜も、食べ物ばかりか、飼育動物までも人間が用達になつてしました。

これと同じように花の世界にも人間が用達がふえてきそうである。美しい自然が手のとどかないところまでいってしまったらとどかえしがつかない。

梅若春雄27回忌追善能

「恋重荷」「千手」「石橋」

竹尾邦太郎

維新の三名人の一、梅若春に連なる当今の梅若一門勢揃いの大能は、去る十月十七日大阪能楽会館で催された追善能であった。

梅若春の追善能は、追善能の形をとりながら立つ廻りの無念。時の移ろいに急かれ、顎をしゃくって、へ石にだに立つ矢の、と己れへの鼓舞。そして、徐々に目覚める憤怒の、のけ反らばかりに再挑戦する気魄も空しく、へ持てども持たれぬ、深い挫折感、へ恋ひ死なん、とやと立ち上るに至るまでの心の葛藤が筆措に投影し、的確な描写に技の意気込みが感じられた。中人は、一転きつと背を向けるや、へ乱れ恋になして、と羞恥、憎悪、復讐の心入り乱れて

「千手・御曲ノ舞」(歌い)は春秋時代の楚の都。歌曲のさかんなところであったという。御曲とは楚人の卑しい音楽、即ち俗曲、俗歌、はやりうたの謂で、転じて本邦では今様(白拍子や遊女が歌

抱くように持ち替ると、舞上げ、地(盛装・生香・照男)となつた。ツレの安座して琵琶を弾する型、シテも下居して琵琶を見せ合うのも、尽きぬ名残の慰め。キリで、へは後朝、と擦れ進う一瞬の時の静止に、深い感慨を秘めてゆく。遠く遠くツレを見送るシテの虚脱感、へ目もあてられぬ気色かな、と立っているのも辛いように常座まで行きかね右膝着くとシオリ留となつた。哀愁の余韻しみじみとした舞台だった。(57分)

<p>壺 泉 会 泉 嘉 夫 名古屋市昭和区山里町一〇三 電話(八三二)三三二一八五 西宮市甲陽園目山町三三二二五 電話(八〇七)九九八〇二四五八</p>	<p>観世芳宏門人会 観世芳宏 観世芳伸</p>	<p>山本真賀 山本章弘 豊中市本町六丁目一〇一六</p>	<p>大垣浦声会 種古場 大垣市竹島町善念寺 住所 京都市左京区下鴨芝本町五八 浦田保利</p>	<p>井上嘉久 (〒603)京都市北区紫野下馬田町六 大阪能楽会館 大西智久</p>	<p>山中能舞台 山中義滋 〒556 大阪府阿倍野区阪南町六一五一八 電話(〇六)六九二一三八二五</p>	<p>名古屋淡交会 橋岡慈観 瀬戸三津子 種古場 瀬戸市瀬戸町二ノ宮六 瀬戸方 電話(八〇五)八七〇三三八八番</p>	<p>邦謡会 梅田邦久 須部一 清沢美和 今田政融 本田</p>	<p>名古屋野村四郎会 野村四郎 東京都杉並区永福四一三〇一〇 電話(八三三)三三二一五二二九 名古屋種古場 名古屋千種区日和町四ノ一〇 小嶋方 電話七五一一一八八〇番</p>	<p>武田詠楽会 武田欣司 武田邦弘</p>	<p>財団法人 鎌倉能舞台 中森晶三 中森貫太</p>	<p>初陽会 武田宗和 種古場 名古屋千種区今池四丁目 1513 浅井ビル 電話(三三三)三七三六</p>	<p>松音会 泉泰孝 千188 東京都杉並区宮前四一九一四 電話(八三三)三三二一八二八〇番</p>	<p>泉雅一郎 千181 東京都三鷹市幸丸二一三一一 電話(〇四二)二一七一一二四〇四</p>	<p>春鶯会 梅若善高 千555 豊中市新千里南町三丁目1812 電話(八〇六)八三二一七八五四 千120 東京都足立区綾瀬一15131302 電話(八三三)三三〇四一七四〇九</p>	<p>竹翠会 若松宏守 千662 西宮市平松町四一九 電話(〇七九)八二二一〇六〇一</p>	<p>誠交会 奥善助 東京都世田谷区三軒茶屋二一〇一三二 電話(〇三三)四三二二二六三七番</p>	<p>名古屋橋岡会 名古屋橋岡会 名古屋昭和区丸屋町五ノ三五 山田紀子方</p>	<p>名古屋修誠会 梅若修一</p>	<p>下田雄三 豊中市曾根東町四一三二二</p>	<p>雄誠会中部地区連合会 名古屋和石会 一宮竹石会 岐阜花石会 下呂雄会 萩原雄会 高山雄会 倭山之屋社中</p>
---	----------------------------------	---------------------------------------	--	--	---	---	--	--	--------------------------------	-------------------------------------	---	--	---	--	--	---	--	------------------------	------------------------------	--

名古屋宝生会定式能 (第137期)

二月七日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

能 春日龍神

玉井博祐

飯留雅介 鬼頭英二
杉江元 後藤孝一郎 大野誠

仕舞 網ノ段

佐藤耕司

三橋茂三 稲川一
大森尚人 辰巳正孝
佐々木輝雄 佐藤耕司

能 景 清

西村欽也

筑紫敏一 藤田大郎
福井啓次郎 石黒孝
玉井道夫 辰巳正孝

狂言 大江山

辰巳孝

飯留雅介 河村其之介
高安勝久 柳原富司
杉江元 辻本正樹

附祝言

石黒耕司

地謡 加賀山純造
松尾純造 馬場富四夫
加賀山福美 竹内正宜

富耀会大会

二月十一日(祝)午前十時半始
熱田神宮能楽殿

舞臺子「小袖曾我」

泉嘉夫

福井啓次郎

能 卷 絹

飯留雅介

河村其之介 助川龍夫
柳原富司 藤取希世

〔御来場歓迎〕

主催 柳原富司

後見 中川雅章 地謡 松山幸親
泉嘉夫 高橋一 須部嘉男
高橋一 古橋正邦

名古屋観世会定式能 (初回)

二月十四日(日)正午開演
熱田神宮能楽殿

能 翁

能 組

能 組 元昭 三番 野村三郎
千才 観世 曉夫

高 砂

久田徹二

山本清 河村三郎
中村三郎 福井啓次郎
塩田重喜 後藤嘉津幸

福の神

井上祐一

須部一 中川雅章
清沢一 井上祐一
古橋正邦 武田邦久

狂言 野東田

後見 野村信行

地謡 井上上 友彦
井上礼之助 清治

附祝言

佐藤友彦

大倉源次郎 藤取希世

小袖曾我

母 小島一英
團十郎 祖父江修一
鬼王清水一政
五郎 観世 芳伸
十郎 観世 芳宏

能 野東田

仕舞 村キリ

藤井徳三 本川雅章
北ヶセ 井上嘉久 中川雅章
片山九郎右衛門 古橋正邦

附祝言

主催 名古屋観世会

後見 武田邦弘 地謡 松山幸親
観世 清和 高橋一 藤取希世
久田徹二

〔要員券〕

◆初回に限り当日券の発売は致しません。
◆翁開演中の出入りは御遠慮下さい。



上田観正会能楽堂
社団法人観正会
上田観正会
上田田田 公拓貴
上田田田 威司弘
神戸市長田区大塚町三丁目一ノ二四

久田観正会

久田 徹二
大倉流小波 久田舜一郎
松月会 前野郁子
松野会 松山幸親
松野会 馬場信至
玉木孝男

笙月会 中川雅章
長浜市地福寺町八ノ二九
電話(059)2770630番

洗心会 奥村富久子
〒606 京都市左京区永観堂西町二〇
電話(075)7770767番

賀水会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
加賀敏彦
〒603 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九
電話(052)7771894番

観修会 祖父江修一
多治見市日ノ出町二丁目
電話(057)572036番

芳韻会 稻生芳雄
半田市船入町三十一
電話(056)908115番

幸福会 近藤幸江
岡崎市鶴田本町十一番地ノ三
電話(056)402529番

中日文化センター
謡曲・仕舞教室 名古屋(栄)
岐阜・四日市
翠謡会
生駒里翠
名古屋市名東区社ガ丘3ノ1503
電話(052)703157番

重陽会 菊池重郷
大山市大山宇相生五九一六
電話(056)84501番

清風会 今村嘉勇
岩倉市東新町下塚52-01
電話(056)7338

三村 恵子
〒445 西尾市住吉町三十一
電話(054)2594番

所梅酒会 熊沢光俱
〒485 小牧市篠岡3-2-11
電話(052)791958番

名古屋宝生会

宝生 英雄

宝生 英照

名古屋観世会

近藤 乾之助

宝生 嘉宝会
〒466 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一

佐野 由於
〒188 東京都杉並区和泉2-45-33
〒931 金沢市泉野町四丁目12-14

正風会
衣斐正宜
〒466 名古屋市昭和区御器所3-23-19
御器所パークマンション802号
電話(052)882156番

衣斐正宜後援会
〒460 名古屋市中村区名取三ノ二六二六
電話(052)5861120番

倉本 雅
〒466 名古屋市東区中田町一ノ13-26
本山アパルトメント四〇二号
電話(078)441546番

竹腰 勝一

司宝会
〒466 名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅三三〇電話(052)73721

金剛 永謹

金剛 永謹

廣田後援会

廣田 陸一

廣田 幸稔

菊扇会
後援会
廣田 泰三

名古屋観世九皇会定例能（初回）

二月二十一日（日）十一時始
熱田神宮能楽殿

素舞神 歌 青木 武弘 高橋 肇一

能采

親世 喜之
女 飯富 雅介 河村繪一郎 鹿取 希世
美奈保之伝 野村又三郎 福井啓次郎

後見 觀世 喜正 古川 充 佐久間 二郎 中野 宜夫
駒瀬 直也 地謡 高木美智子 五木田 武計
高橋 肇一 小林 喜久

尾張能楽の名人・上手ごぼれ話（五）

小島 廣次

〔平成4年10月号（310号）のつづき〕
『尾張能楽』や『松海抄』のあける三世西村庄兵衛敬元のエピソードをあげてみよう。
宝曆の頃（一七五二—一七六三）の六月末に、尾張藩の重臣成瀬内蔵頭の名古屋屋敷で能が演じられた。内蔵頭がシテとなって「紅葉狩」を舞った。その時、にわかにならなちが鳴り出した。キリのところの「驚く比に雷火乱れ」という謡になつたとき、電光がきらめきわたつて、庭前へ落雷したようであつたので、見物はもちろんのこと、ハヤシ方もしばらくの間、打伏してしまつた。後シテの鬼神である内蔵頭はいよいよ飛躍して舞すまし、ワキである平維茂の庄兵衛敬元も平然として太刀を抜いてシテと斬合をする。能は誠に其にせまつて「ゆるしげ」（すばらしい）とあはれ、勇ましいであつた。と伝えている。能がすんでから、内蔵頭は「誠に平維茂なり」と大褒に称賛して、銀五枚を与えたといふ。

「紅葉狩」を演じていて、しかも「驚く比に雷光乱れ」の謡のとき、丁度、雷鳴なんて、話ができすぎてゐる気がしないでもない。偶然といふは偶然であらうが、まるで作り話そのものといわれそうである。名人と称された西村庄兵衛敬元であるが故に、形成された物語であらう。

〔要員券〕 当日券四千円

大変に驚いて「先生は修験の道も得給へりや」と尋ねたので、敬元は笑つて「我れ何ぞ法力あるべき。ただただ我が芸の精進を試さんために折りたり」と答えたといふ。このエピソードに対して、藩儒であつた深田香実は別の伝聞を載してゐる。近所の人々の質問に対して、敬元は「われ、平生、舞臺にて折りをする時、真の鬼神、其の尊厳ぞと思ひて、面（おも）さし人と思ひたる事なし。されば明王も其に力を添え給ふと心得て余念なし。其の心も折りしは、狐も退きたり」といつたと聞き伝へてゐるというのが、深田香実の別聞である。

附 祝 言

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。

別聞である。

『尾張能楽』の著者も「松海抄」の奥村得儀も、深田香実の別聞談を比較して「精進を試さんためといへるは、畢竟（ひつき）ょう（ごうり）ん、同じ意ながら、塔（ごうり）ん、わずかと考へて、敬元の二種の返答を記載している。意味の違いはわずかとどころではなく、大いに違つてゐる。香実の伝聞の方が、敬元の芸道に対する真剣な取組み態度がみえ、しかも神仏に対して謙虚な信仰心を底に秘めてゐる。逆に前者の記述には、わが芸の到達に驕りやたかぶりの気持がうかがわれる。やはり香実の伝える別聞が真伝である」とみて

おこらう。

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。

別聞である。

『尾張能楽』の著者も「松海抄」の奥村得儀も、深田香実の別聞談を比較して「精進を試さんためといへるは、畢竟（ひつき）ょう（ごうり）ん、同じ意ながら、塔（ごうり）ん、わずかと考へて、敬元の二種の返答を記載している。意味の違いはわずかとどころではなく、大いに違つてゐる。香実の伝聞の方が、敬元の芸道に対する真剣な取組み態度がみえ、しかも神仏に対して謙虚な信仰心を底に秘めてゐる。逆に前者の記述には、わが芸の到達に驕りやたかぶりの気持がうかがわれる。やはり香実の伝える別聞が真伝である」とみて

おこらう。

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。

別聞である。

『尾張能楽』の著者も「松海抄」の奥村得儀も、深田香実の別聞談を比較して「精進を試さんためといへるは、畢竟（ひつき）ょう（ごうり）ん、同じ意ながら、塔（ごうり）ん、わずかと考へて、敬元の二種の返答を記載している。意味の違いはわずかとどころではなく、大いに違つてゐる。香実の伝聞の方が、敬元の芸道に対する真剣な取組み態度がみえ、しかも神仏に対して謙虚な信仰心を底に秘めてゐる。逆に前者の記述には、わが芸の到達に驕りやたかぶりの気持がうかがわれる。やはり香実の伝える別聞が真伝である」とみて

おこらう。

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。

別聞である。

『尾張能楽』の著者も「松海抄」の奥村得儀も、深田香実の別聞談を比較して「精進を試さんためといへるは、畢竟（ひつき）ょう（ごうり）ん、同じ意ながら、塔（ごうり）ん、わずかと考へて、敬元の二種の返答を記載している。意味の違いはわずかとどころではなく、大いに違つてゐる。香実の伝聞の方が、敬元の芸道に対する真剣な取組み態度がみえ、しかも神仏に対して謙虚な信仰心を底に秘めてゐる。逆に前者の記述には、わが芸の到達に驕りやたかぶりの気持がうかがわれる。やはり香実の伝える別聞が真伝である」とみて

おこらう。

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。

別聞である。

『尾張能楽』の著者も「松海抄」の奥村得儀も、深田香実の別聞談を比較して「精進を試さんためといへるは、畢竟（ひつき）ょう（ごうり）ん、同じ意ながら、塔（ごうり）ん、わずかと考へて、敬元の二種の返答を記載している。意味の違いはわずかとどころではなく、大いに違つてゐる。香実の伝聞の方が、敬元の芸道に対する真剣な取組み態度がみえ、しかも神仏に対して謙虚な信仰心を底に秘めてゐる。逆に前者の記述には、わが芸の到達に驕りやたかぶりの気持がうかがわれる。やはり香実の伝える別聞が真伝である」とみて

おこらう。

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。

別聞である。

『尾張能楽』の著者も「松海抄」の奥村得儀も、深田香実の別聞談を比較して「精進を試さんためといへるは、畢竟（ひつき）ょう（ごうり）ん、同じ意ながら、塔（ごうり）ん、わずかと考へて、敬元の二種の返答を記載している。意味の違いはわずかとどころではなく、大いに違つてゐる。香実の伝聞の方が、敬元の芸道に対する真剣な取組み態度がみえ、しかも神仏に対して謙虚な信仰心を底に秘めてゐる。逆に前者の記述には、わが芸の到達に驕りやたかぶりの気持がうかがわれる。やはり香実の伝える別聞が真伝である」とみて

おこらう。

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。

別聞である。

『尾張能楽』の著者も「松海抄」の奥村得儀も、深田香実の別聞談を比較して「精進を試さんためといへるは、畢竟（ひつき）ょう（ごうり）ん、同じ意ながら、塔（ごうり）ん、わずかと考へて、敬元の二種の返答を記載している。意味の違いはわずかとどころではなく、大いに違つてゐる。香実の伝聞の方が、敬元の芸道に対する真剣な取組み態度がみえ、しかも神仏に対して謙虚な信仰心を底に秘めてゐる。逆に前者の記述には、わが芸の到達に驕りやたかぶりの気持がうかがわれる。やはり香実の伝える別聞が真伝である」とみて

おこらう。

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。

別聞である。

『尾張能楽』の著者も「松海抄」の奥村得儀も、深田香実の別聞談を比較して「精進を試さんためといへるは、畢竟（ひつき）ょう（ごうり）ん、同じ意ながら、塔（ごうり）ん、わずかと考へて、敬元の二種の返答を記載している。意味の違いはわずかとどころではなく、大いに違つてゐる。香実の伝聞の方が、敬元の芸道に対する真剣な取組み態度がみえ、しかも神仏に対して謙虚な信仰心を底に秘めてゐる。逆に前者の記述には、わが芸の到達に驕りやたかぶりの気持がうかがわれる。やはり香実の伝える別聞が真伝である」とみて

おこらう。

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。

別聞である。

『尾張能楽』の著者も「松海抄」の奥村得儀も、深田香実の別聞談を比較して「精進を試さんためといへるは、畢竟（ひつき）ょう（ごうり）ん、同じ意ながら、塔（ごうり）ん、わずかと考へて、敬元の二種の返答を記載している。意味の違いはわずかとどころではなく、大いに違つてゐる。香実の伝聞の方が、敬元の芸道に対する真剣な取組み態度がみえ、しかも神仏に対して謙虚な信仰心を底に秘めてゐる。逆に前者の記述には、わが芸の到達に驕りやたかぶりの気持がうかがわれる。やはり香実の伝える別聞が真伝である」とみて

おこらう。

敬元は尾張家のワキ方を勤めること六十三年の長きに及んだ。その間、明和八年（一七七二）四月二十八日、後醍醐天皇の即位があつて、その祝賀能の臨詔の最初にワキ役が祝賀の文句を簡単な節で謡う「開口」の役を仰せつけられた。「それ天津日嗣の幾千年、幾万世のまかりなく、五風十雨の時至り、四海の民に恵ありて、仰ぎうやまひ奉る。いと高き高御座（たかみくら）、久しく長き夏木立、しげりさかゆく御舞目出度かりける御代とかや」と新作を謡つてゐる。別聞に「張良」を勤めた。従来、尾張から上京し、朝廷の能楽出動のことは全く皆無であつたので、極めて名譽のことと本人も世人もした。

西村家では父祖二代が記録した

流儀の留書類が多くなり、かえつて煩雜すぎて後世を誤らせることもあると敬元は憂慮して、それらを折衷して定本を作成した。その上、もとの多くの留書を焼き、その灰を練り固めて、父祖とわが身三代の形を一体にして三神と称して祭るようにと書つていた。寛政七年（一七九五）二月六日、「小原御幸」を詔しながら、忽然と息をひきとつた。時に享年七十三である。



豊嶋能の会
豊嶋 鳴三 千春

金剛流
松野 恭 憲
松野 洋 樹

金剛流
景雲 会
国際能楽研究会 (I・N・I)
インターナショナル能楽インスティテュート
(日本・カナダ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・フランス・台湾)

宇高通成後援会
宇高 通 成
〒606 京都市左京区高野東町四〇
TEL(075)701-0793
名古屋事務所 前田英安方
TEL(052)852-2324

金剛流
名古屋周屋会
岐阜周屋会
吉川 周 子
名古屋市中区西橋町三二六
電話(052)761-2257

金 春 信 高
金 春 安 明
〒167 東京都杉並区南荻窪3-17-16
電話(03)333-2571番

金 春 欣 三
東京都杉並区成田東四丁目35-20
電話(03)333-7382番

本 田 光 洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話(03)336-2641番

春 敲 会
金 春 晃 実
金 春 穂 高
廣 瀬 瑞 弘

長田 驍 後援会
〒514-21 津市高野尾町三三五一-146
電話(059)906-977番

喜多流
和 谷 衡 市
〒516 伊勢市中島二丁目26-12
電話(059)901-599番

名古屋金春会
林 鉄 郎
近 藤 修 彦
渡 部 道 三

伊勢金春会
村 富 次
伊勢市宮町一丁目一四一-17
電話(059)901-456番

喜多流十六世宗家
喜多 六 平 太

宝 生 欣 閑
〒116 東京都練馬区小竹町一五〇-15
電話(03)397-7230
電話(03)397-7230
電話(03)397-7230

大阪 喜多 会
和 島 富 太 郎
〒605 宝塚市武庫川町5-45-203
電話(079)788-808

二 井 栄 逸
松阪市殿町1412の3
電話(059)812-3102番

森 常 好
東京都世田谷区世田谷一丁目47-12
電話(03)342-4853

高 安 会
西 村 欽 也
高 安 勝 久
飯 富 雅 介
杉 江 元

福 王 茂 十 郎
〒662 西宮市名次町六番十二号
電話(079)807-772

和 谷 衡 市
伊勢市中島二丁目26-12
電話(059)901-599番

喜多流
和 谷 衡 市
〒516 伊勢市中島二丁目26-12
電話(059)901-599番

長田 驍 後援会
津市高野尾町三三五一-146
電話(059)906-977番

喜多流
和 谷 衡 市
伊勢市中島二丁目26-12
電話(059)901-599番

森 常 好
東京都世田谷区世田谷一丁目47-12
電話(03)342-4853

正 賀
演能写真
ウシマド写真工房
〒602 京都市上京区北野上七軒
電話(075)241-1341番



岡次郎右衛門

向日市上植野町地田一ノ五四
電話(052)九三四一四〇六

豊嶋十郎

千羽 松戸市下矢切五五十五
電話(0473)一九八二

宝生哲

千羽 松戸市牧ノ原2の1
市営住宅一の316号
電話(057)八五一八一〇番

谷田宗二朗

〒603 京都市北区衣笠街道町31-7
電話(075)八七五(三)八六三

高安流岡同門会

清水坂利宜
高坂康弘
森野晴蔵
北田野三郎
塩田耕三
中川山
伊藤久湖
谷口雅信

龍吟会

藤田六郎兵衛

名古屋市中区堀下三丁目一〇番九号
電話(052)五七一五七六三

幸清会

幸義太郎
正義昭

〒165 東京都中野区丸山二丁目二四一
電話(03)三三三七五五六七二番

亀井俊一

保忠雄
保雄

大倉源次郎

〒592 大阪府淀川区宮原五丁目八
ローズコーポニュー大阪七〇五
電話(06)三九九七二二三三

幸友会

幸友能

福井啓次郎

福井良久

福井治

柳原富司忠

桂 後藤孝一
嘉津幸

富耀会

柳原富司忠

小鼓教室
名古屋市中区栄 朝日神社内
(丸善前)

瀬尾乃武

〒171 東京都豊島区西池袋一丁目30-10
105

谷口正喜

京都市上京区中立売通室町西入
室町スカイハイツ610号

呉竹会

寛三男

寛一

叶石会 河村真之介

〒466 名古屋市中区前山町二丁目三
電話(052)七六一四八八二

河村大

吉田定男

前川光隆

前川光長

名古屋種古場 京都市右京区御室芝橋町一の六
名古屋市中区東区二丁目13-3
ツインクルガーデン前野舞台
電話九三二一八八〇六番

飯島佐之六

〒920 金沢市香林坊2-8-17

長生会

鬼頭喜太郎

好信

大鼓方 鬼頭英二

愛知県中島郡平和町城西
電話(0567)一九六〇番

助川龍夫

助川治

〒453 名古屋市中村区下米野町3-27
電話(052)四五一九六一

青春流太鼓

青耀会

上田悟

大蔵狂言会

大蔵彌右衛門

大蔵吉次郎

大蔵彌太郎

名古屋和泉会

大垣狂言の会

和泉元秀

茂山千五郎

茂山正義

茂山真吾

茂山千三郎

京都市上京区中筋通り石薬師上ル

茂山忠三郎

名古屋和泉会

狂言共同社

狂言やるまい会

野村又三郎

野村信行

〒460 名古屋市中区正木三丁目16-25
電話(052)三三三三三三

能楽講座

能と狂言に親しむ会

朝日カルチャーセンター

雑子教室

小鼓後藤孝一郎

丸栄スカイル10階

ビデオ撮影

西川企画

熊沢恵美子

能楽の友社

栄能楽舞台

名古屋市中区栄五丁目一四
電話(052)二二二二二二

葵心庵舞台

尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
電話(056)五六一五〇三三四六番

彰 諷 閣

名古屋市天白区植田西二丁目八〇二二
電話(052)八〇五三三〇一

楽 調 庵 舞 台

名古屋市和区流川町四七七八三
電話(052)七〇〇一

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

年賀欠礼致します

平成5年1月・2月放送予定

〔1月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
1月17日(日)宝生流「忠 度」渡辺 三郎
1月24日(日)観世流「東 北」井上 嘉久
1月31日(日)金春流「葵 上」瀬尾 菊次
〔2月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
2月7日(日)観世流「巴」橋岡 慈観
2月14日(日)宝生流「弱法師」三川 泉
2月21日(日)喜多流「海 人」友枝 昭世
2月28日(日)観世流「忠 度」山崎英太郎
●祝日能・NHK教育テレビ
1月15日(成人の日)午前9時より
観世流能「葵上・古式」梅若六郎・森 常好ほか
—NHK能楽鑑賞会から—
2月11日(祝)午前9時より
①一調「夜討討我」金井 章・鶴沢 寿
②仕舞「頼 政」梅若 恭行
③宝生流能「隅田川」シテ 三川 泉
フキ 森 茂好
—NHK能楽鑑賞会から—
●日本の伝統芸能再放送(土)午後7時~7時30分
2月6日 清 経 2月13日 松 風
2月20日 天 鼓 2月27日 棒 縛
(翌日午後11時30分より再々放送あり)

師走の舞台から

第24回歳末助け合い運動協賛能」と
第6回久田徹二・能りサイタル

竹尾 邦太郎

「舞丸」ツレ丸・正邦、浅黄直衣に紫指貫大口で氣品がある。ツレ丸は勝久は進行を省く。拾法被の武張った装いがそれを言わせるが、皇子舞丸を何処に捨てるかを独白に言う。問答で、真の親の慈悲を言う醒めたツレに恐怖するワキが、ツレを泣き去るところは、へ上り下りの旅衣、と袖をあしらって左右を眺め、へ袖をしりて村雨の、と涙を堪えろかに高く目付柱を見るのが利く。アイは礼之助。ツレの介添や笠と杖の処理も手際よく、立シヤベリも慎重だったが、洞島帽子に髪髷もどきどき、上半身上衣無しに着付たけの姿」というのは、博雅三位を名のる人にはどうだろう。

紅梅記

平成四年回

願、余聞

(坂本繁次郎氏)のアトリエで見た完成間近の十二号の能面図を所望して今手許に置いている(中略)。画面全体は名人の能の舞合を思ひ出させるようなしんしんとした空気を深く深くたたえて、見るものの心を静かに落ちつかせる。それはよくある絵のように心を静ませくつろがせもしないで、却って心を引き締める(中略)。強さは内にもつめてそのままだよとなつているのである。そこにこの高い品格が生れている(「坂本繁次郎」・谷川徹三著「芸術の運命」のうち)。

来ない。演能は、昨年も観世鎮之丞氏の来名が目立つ。教番の能が名古屋の演能を豊かにした。快い。この東の第一人者(西は金剛殿氏)は清経(二回)・三輪・鉢木の舞合で堪能させる。清経は昔ノ型(観世左近進善)と恋ノ音取(先代藤田六郎兵衛進善)・三輪は助川竜夫舞台四十周年記念に白式神楽で。この清経は四回あって一回は喜多流であった(後述)。今年も観世を期待したい。なお三輪は右の助川氏が太鼓を勤め、一昨年の鬼頭喜太郎氏(太)の儀法(せんほう)に続く明報であった。

「なごや文化情報」二月号に掲載される「一年回顧」と重複する処があります。ご了承を。付一。これはもともと早く紹介しておくべきであったが、遅れて一年回顧に。実は狂言・井上松次郎

姉が包み込まれるような趣。ただ、クセからロンギ前までを省いたため、互の運命を懸懸する時間が不足で、各残りなきない。という平仄に合わない気がした。キリは、へ別れ路止めよ、で二ノ松に止まると見せてそのまま振り向きもせず、へ行みて、で止ると遠くツレを見込むのが一入哀切だった。(一時間24分)

「舞丸」ツレ丸、虫が知らせ方と上落する楽人富士の妻。へさればこそ思ひ合はせし夢の占、が当り、形見の舞衣・鳥兜を下げ渡されてのリアルなクドキは、狂殺したような声調にアクセントの付け方も巧妙で、へ傷はしや、と舞衣・鳥兜両手に受け、面を少しテラシて宙を見詰め、へ推して参れば、とよと恩をのむあたりは嗚咽が今にも洩れるかであり。へ真の主は亡き跡の、と再び目を形見に落とす、地(踏躰)忠(弘ら)の、へ神ならぬ身を、できくつとした様に居立て、へ歎くぞ哀れなる、とくつと腰を落し、亡父舞丸の嗚咽をみた。(26分)

「鉄輪」シテ博祐・横浅黄・紺無地舞斗目・萌黄袷段無紅唐織着流・面深井。嫉妬に逆上して丑の刻詣をする程の深淵病性な女は、きりりと引き裂った凄絶な姿でありたいのだが、シテはいつになく着飾れし中入前の鬼気というか凄味も乏しかった。後は面生成。角を出す程の元気がみられず、へ男の枕に、と台に上るところ、キリの枕に、と台に上るところ、キリに担いで左手掛けるところ、など流れに乗れず、また、ワキも台上方を庇う臨機の処置か。ワキもアイ祐一、舞子は希世・富司忠。飯一、後見を白牛口二・中二。(一時間12分)

「車僧」ニクネームは、椅子車を通力自在に操るところから車僧、のワキ奇僧・雅介。羽介味が捨て難い。一方、車僧を腕道に引き込もうと果敢に挑みかかるシテ山伏(実は天狗の化身)幸親は、嗚咽を切るような威勢のよい御問答の掛合が歯切れよく、中入で退くところもいっせと深い。アイ高藤

は車僧の権威失墜とばかりに笑わせにかかると過激な天狗。多様な笑いの溢れる現代、「覗めっこ」程度の手段で人を笑わせるのは難しきが、かといつてワキが笑えばぶち壊しの大役を無事に勤める。後シテは大徳見・赤頭・大兜市、拾狩衣と半切は共に飛雲文様で、空中を飛行する天狗に相応しい。車僧との行状は大徳物の態然とした重味には欠けるが、はきはきとした小気味よきに天狗の側面を見せた。(48分・12月6日・助け合い協賛能)

観世文庫設立記念展
観世宗家一幽玄の華
観世宗家とその一門により平成三年二月に設立された「財団法人観世文庫」の記念展として、展覧会「観世宗家一幽玄の華」が一月三日から十八日まで東京銀座・松屋デパートで開催。主催観世宗家・財団法人観世文庫・朝日新聞社。展示は観世文庫所蔵の名品から百四十余点を公開、能面・延命冠者、小夜姫(いづれも重要美術品)など三十七点、銀欄菊狩衣(家康公拝領)など装束四十点。室町後期筆「風姿花伝」秀吉朱印状「観世支配之事」など古文書三十数点の出版。

「野守・黒頭・天地ノ声、急ノ留」シテ徹二。春日野三笠山の長閑な春景に浸る間も無く一セイからずぐワキ山伏・勝久との問答になり、ずばり野守の鏡の核心に迫るところがこの小書の上。な

鶴舞図書館
に能面展示
旧より十九日から一月三十一日まで名古屋市中区和区の名古屋市鶴舞中央図書館一階展示場に新作能面展が催されている。提供は能面研究会「能面社」(愛知県海部郡大治町花常東三九、保田紹雲方)で、期間中三期にわけて展示替で出展される。

料理 本 本店 熱田区神戶町五〇三 電話(052) 868618
中 店 熱田区神宮一、一 電話(052) 559809
店 松坂屋本店10階 電話(052) 33825
店 松坂屋本店地下1階 電話(052) 37661

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

一部 90円

能 楽 の 友

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
(駐車場完備)
名古屋市中区栄3丁目35-30 電話(241)0810

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- 平成5年2月
21日(日)九皇会定例会 (有料)
27日(土)三菱重工・自工連合同曲大会
28日(日)恵美寿会大会(来場歓迎)(番組①面)
3月
7日(日)大蔵狂言会 (来場歓迎)(番組①面)
13日(土)名古屋能楽鑑賞会 (有料)(番組②面)
14日(日)三友文会 (来場歓迎)(番組②面)
19日(金)四大学文流会 (来場歓迎)
20日(祝)萌泉会大会 (来場歓迎)(番組②面)
21日(日)壺泉会大会 (来場歓迎)(番組②面)
28日(日)梅鑑会 (有料)(番組④面)
4月
4日(日)下田雄三師中部地区連合会 (来場歓迎)
11日(日)観世会定例会 (有料)
17日(土)鏡獅子会 (来場歓迎)
18日(日)邦風会 (来場歓迎)
25日(日)久田銀正会 (来場歓迎)
29日(祝)幸友会春の会 (来場歓迎)
5月
5日(祝)興会大 (来場歓迎)
8日(土)会陽会 (来場歓迎)
9日(日)会春会 (同門会来場歓迎)(金春会能有料)
15日(土)九皇会 (有料)
16日(日)狂言やま (有料)
22日(土)たむけ (来場歓迎)
23日(日)観舞会大 (来場歓迎)
(演能変更の節はご了解下さい)



授賞式
西尾名古屋市長より芸術祭賞を
受ける藤田六郎兵衛氏
平成四年度名古屋市民芸術祭実行委員会
の主催により、一月二十八日午後
四時三十分から名古屋市中区・東
急ホテル「錦の間」で挙行政祭賞を
決定、伝統芸術部門で、能楽部方
藤田流十世家元・藤田六郎兵衛の
追善能における「松風」が受賞し
た。
この名古屋市民芸術祭授賞式

4平成 名古屋市民芸術祭賞
藤田追善能「松風」
伝統芸術部門で受賞
は、名古屋市民芸術祭実行委員会
の主催により、一月二十八日午後
四時三十分から名古屋市中区・東
急ホテル「錦の間」で挙行政祭賞を
決定、伝統芸術部門のあいさつの
原野実行委員長のあいさつ、音
楽部門・菅沼綾子さん、演劇部門
・劇団名芸、舞踊部門・三代真史
ジャズ舞踊団、伝統芸術部門・藤
田六郎兵衛氏にそれぞれ市長賞
(賞状と楯)及び副賞目録(賞金
三十万円)が贈られた。

青少年のための
芸術劇場
3月27日 狂言会
平成四年度名古屋市民青少年のた
めの芸術劇場として「青少年のた
めの狂言会」が三月二十七日(土)
名古屋市中区の名古屋市民芸術創
造センターで開催される。
主催、名古屋市長、名古屋市民
文化振興事業団、狂言共同社。
「狂言のはなし」佐藤友彦氏。
狂言「救大名」(井上松次郎、
井上祐一、井上礼之助)「宵寒草」
(井上祐治、佐藤友彦)「草」(
さびら) (佐藤友彦、大野弘之、
野見政行ほか)、第一部十二時三
十分、第二部午後三時三十分。

さらには西尾名古屋市長、藤田和
三名古屋市長を議長から祝辞がの
べられ授賞式を終了した。
十世藤田六郎兵衛追善能「松風」
は、十月十八日熱田神宮能楽殿で
上演された。(シテ片山九郎右衛
門、ツレ片山清司、ワキ宝生欣哉、
笛藤田六郎兵衛、小鼓藤井啓次郎、
大鼓河村純一郎、間佐藤友彦、後
見武田欣司、味方玄、地謡観世鎮
之丞、片山慶次郎、橋本雅夫、中
川雅章ほか)。

大坪十喜雄氏
宝生流シテ方・大坪十喜雄氏は
一月九日午前零時六分、急性心不
全のため熱海の所記念病院で逝去
享年八十四。一月二十七日芝増上
寺で本葬が営まれた。
大坪十喜雄氏は明治四十一年三
月生れ。永年にわたり宝生流の重
鎮として演能活動をつづけ、東
京芸大講師、能楽協会東京支部
理事長、宝生会常務理事を歴任さ
れた。

正風会改め
恵美寿会大会
二月二十八日(日)午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿
藤田六郎兵衛追善能「松風」

Table listing names and roles for the 'Ebi' (恵美) section of the festival, including names like 須磨源氏, 天鼓, 胡蝶, etc.

大蔵狂言会 なごや会 (第23回)
三月七日(日)午後一時開演
熱田神宮能楽殿
主催 大蔵狂言会
代表 大蔵弥右衛門

Table listing names and roles for the 'Koyasu' (狂言) section of the festival, including names like 藤田六郎兵衛, 菅沼綾子, etc.

Table listing names and roles for the 'Koyasu' (狂言) section of the festival, including names like 藤田六郎兵衛, 菅沼綾子, etc.

志月雅日記

(137)

梅薫る

えと文 二井栄逸

人の心に珍らしきと見る所、即ち面白き心なり。花と面白きと珍らしきと、これ三つは同じ心なり。——世阿弥——

花の探究者であった世阿弥は、舞歌中心の夢幻能を大成して、能の芸術性を高めた優秀な能役者であった。

自作の能をみずから演じて、幽玄美を舞台上に実現し、体験に基づき素晴らしい不滅の芸術を残したのである。

特に評価の高いのは、同時代の西歌の水準をも抜く演劇論、芸術論の展開であった。

世阿弥を中心に、数々の美しい能が誕生し、数々の名演技者にかかれ、悠久の美を保ちつつ、時代を越え、伝承されてきたことは素晴らしいことだと思ふ。

私も、名演技に接しては、その感動を描き溜め、私なりのイメージ

ネーションを加えたり、イメージアップを考えながら、制作に専念するこの頃である。

白の長袖。月下に芳香を放つ梅の花の清純さがたゞようような能。そのような能にあこがれる。

二月。梅の薫る頃となった。

梅の咲くのを見ると、和泉式部を思い出す。梅の精と、和泉式部をたぶらせながら、私は、東北の幻想をかく。

和泉式部は、平安時代の優れた歌人として、また、和泉式部日記に伝えられる情事は、奔放な愛欲生活を送ったものとされる。

世阿弥は、その熱烈な愛情の歌人の式部をえがかずには、ひたすら歌道の徳をたたえて、宗教的な境地をえがき、静寂な天地、法悦の春に遊ぶ情趣を現出しようとした。

(平成五年二月十日記)



名古屋能楽鑑賞会公演(第七回)

三月十三日(土)午後二時始
熱田 神宮 能楽殿

狂言 八句連歌 何泉山本東次郎 後見山本 則直

能道成寺 宝生 関 魚井 忠雄 観世 元信
殿田 謙吉 山本東次郎 山本 則直

〔要員券〕
臨時会員券一円(自由席)
取扱いチケットぴあ(052-233-0199)
市内各プレイガイド、事務局、熱田神宮能楽殿
電話(052)722-1400

主催 名古屋能楽鑑賞会
事務局 名古屋市中区大幸4-19-26 岩田 方

三交會大会

三月十四日(日)午前十時始
熱田 神宮 能楽殿

番外舞臺子 熊 野 海 羽 竹 生 島 早川 功一
後藤孝一郎 大野 誠

舞臺子 賀 茂 竹中さち子 河村真之介 鬼頭 好信
後藤孝一郎 大野 誠

舞臺子 天 五 砂 立松美貴子 正ヶセ 渡辺 幹子
中村 立子 放 下 傳小歌 関 明子

舞臺子 海 五 段 秋田恵美子 河村真之介 鬼頭 好信
後藤孝一郎 大野 誠

能遊行

柳 高安 勝久 河村総一郎 鬼頭喜太郎
青柳之舞 杉江 雅介 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

連調枕 之 段 瀬戸三津子 村瀬登美子 八木 栄子
後見 寺井 榮 地謡 高橋 幸親 上野 朝雄

舞臺子 班 女 戸松 花枝 寛 敏一 鹿取 希世
加納 博田 村ヶセ 小谷 隆之

舞臺子 卷 絹 仲尾 和子 寛 敏一 鹿取 希世
富士太鼓 原田千恵子 寛 敏一 鹿取 希世

舞臺子 田 占 竹井 喜信 法 節 後藤弘次郎
村 森 清子 寛 敏一 鹿取 希世

舞臺子 花 杜 若 伊藤 好子 寛 敏一 鹿取 希世
菅 原 小夜 寛 敏一 鹿取 希世

舞臺子 半 之 段 伊藤さち子 雀 山 大前 数枝
藤 院ヶセ 橋岡 慈観 日比野清栄

〔御來場歓迎〕
主 瀬戸三津子 会
附 祝言 瀬戸三津子 会

〔三交會(十三回)〕
三月二十日(祝)午前十時始
熱田 神宮 能楽殿

舞臺子 運 吟 千 手 今村 玲子 小林富美子
高野千穂子 今沢 美和 半田 智子

舞臺子 半 節 堀場おきん 小島 幸子 (誠懇会)
クセ・スキ

舞臺子 通 小 町 大竹 初美 尾関喜久子 (千福会)
水野 次子 尾関喜久子

舞臺子 竹 生 島 高橋 昭吾 高野千穂子
衣 衣 小川はつ子 地謡 須部 一政 (電誦会)

能遊東

北 太田 敦子 白石 テル
神谷 多美子 岩井 慶子
福山 智恵子 都築 トヨ子
成瀬 千恵子 水野 尚子

仕舞 紅 野 沢村ひさ子 地謡 須部 邦久 (鈴誦会)
船 井 慶子 山崎 上子 須部 邦久

仕舞 三 山 高木 治子 今村 玲子 (鈴誦会)
加藤 美音 栗本 茂子

仕舞 卷 平 神谷 直市 井上 苑枝 (清誦会)
緒ヶセ 金原 典子 清江 邦久

仕舞 天 鼓 高橋 千晴 関 邦久 (清誦会)
天 山口 排造 清江 邦久

仕舞 竹 生 島 成瀬千恵子 岩井 慶子 (鈴誦会)
洗小町 太田 敦子 今沢 美和

仕舞 浮 舟 矢野 多美子 岩井 慶子 (鈴誦会)
浦 舟 矢野 多美子 岩井 慶子

仕舞 松 若 五十嵐 春吉 地謡 高野千穂子
虫ヶセ 細川 定美 本田 邦久

連吟 鶴 之 段 ワシテ 堀口 ちよ 堀原 邦久 (清誦会)
堀原 邦久

仕舞 小 袖 曾 我 梅原 国男 地謡 堀原 邦久 (清誦会)
衣ヶセ 深谷 和子 堀原 邦久

仕舞 雀 山 後藤 早波 可児 嘉子 (美誦会)
長谷川 清子 前水野 悦子

仕舞 通 村 大久保 早苗 地謡 今村 玲子 (清誦会)
後成 忠 度 手島 三枝子 今村 玲子

仕舞 花 籠 狂 高橋 武子 関 邦久 (清誦会)
古田 三子 関 邦久

仕舞 貴 口 高橋 仁美 地謡 今沢 美和 (和誦会)
川端 とみ 関 邦久

仕舞 女 川端 とみ 日置 登子 (鈴誦会)
クリ・サン・クセ・スキ

勸進能は、六日間渡って演じられる大がかりな興行であるから、観客の動員、演能の評価が、成功・不成功の鍵を握ることになる。できるだけ、魅力のある演能曲目を選ばなければならぬ。

脇能の曲目としては、まず第一日目は、「弓八幡」が選ばれている。作者である世阿弥自身「申楽談儀」で「先、祝言の、か、り直成道より書き習ふべし。直成体、弓八幡也。曲もなく、真直成能也。当御代の初めのために書きたる能なれば、秘事もなし。」と言っている。脇能物の典型となる作品である。

二日目は、「加茂」である。この脇能は、前シテが、水汲みの女で、後シテが別雷の神である。普通の脇能とは相違する趣向に富んだ曲である。豪快な舞踊を舞う。

三日目は、「白鬚」である。後シテ白鬚の明神に、天女・龍神と言う後ツレをもない、華やかな舞台となる。白鬚の明神は、楽を舞う。「クセ」は、廻阿弥作曲として有名である。

四日目は、「皇帝」である。この曲は、元来は、切能物として演じられることが多いが、脇能としても演じられている。後シテ鍾馗の鬚が病鬼を退治する舞踊になる。優麗な風情と豪快な風情とがある。登場人物が多く、作り物も出され、華やかな曲である。

五日目は、「和布刈」である。現行曲の脇能としては、幾分異色である。ワキの登場の段で「次郎」を欠く場合は、半開口として、「名ノリ」に重い位を持たせる。ワキの早瀬の神主の服装が、風折鳥籠子、拾得衣姿で、大臣鳥籠子でないことが特殊である。急の段で、ワキ役が和布刈の仕草をすることも特異である。このようにワキ役の活躍する脇能を演じたのは勸進能の願を出した黒川又三郎がワキ方であったことからである。後シテの脇能は、豪快な所作の舞踊を演ずる。

六日目は、「春日竜神」である。この曲は、元来切能物として分類されているが、脇能としても演じられている。竜神の豪快で威厳のある舞踊が見どころである。

以上、六日間の脇能を概観する

と、典雅な脇能は、「弓八幡」のみで、どちらかというと、豪快な舞踊をする脇能が、好まれていたと思われる。それゆえ、登場人物も多く、作り物を舞台に出し、華やかで、豪快な脇能になる能神物や選ばれたのであろう。

二日目 「八島」は、「勝修羅」の二番目に演じられた曲としては「八島」「頼政」「飯」「井筒」「松山鏡」「卒塔婆小町」の六曲である。

初日の「八島」は、「勝修羅」の三番と、「田村」「飯」の二曲を加えて言われている。「八島」は、戦勝の能であるから、初日の二番目に置かれたのであろう。世阿弥自身も、「申楽談儀」に、「道盛・忠政・よし常(八島)、三番、修羅がかりにはよき能也。」と評している。

尾張藩の能の歴史(三)

辻 宏

と評している。前場では、シテ義経の勇姿をたたえ、鏡引きが語られ、後場では、弓流が、名譽を重んずる義経を語る。勇壯で爽快な趣きの能である。

二日目は、「頼政」である。「美盛」「朝長」と共に、三修羅と言われ、重いとされてきた。老翁の頼政が拳兵し、宇治川を挟んで機合せし、破れ、芝の上で扇を敷き、評世の歌を残して自害するとされた「平家物語」の世界を、能の作品に作り上げたものである。後シテの面は「頼政」という類のない老体の頭に、アヤカシ系統の金の入った目を持っていて、頭巾も「頼政頭巾」と言われ、本曲専用の頭巾である。

「頼政」の能は、江戸時代には好まれた修羅物である。武人であると共に歌人としての才能も持った頼政が、老翁であるにもかかわらず、おごる平家と戦いをいどみ討ち死にした武將の哀れと、その志の高さが、好まれたのであろう。「八島」が勝修羅なら、「頼政」は負け修羅ということになる。

三日目は、「飯」である。「飯」も勝修羅三番のうちの一番である。

五日目の脇能は「和布刈」で、これもワキ役の活躍が見られる。二番目が「松山鏡」である。ワキ役の活躍する能が、二番続けて演じられている。「松山鏡」のワキ花は「忠臣」の和歌、「経政」の琵琶、「清経」の笛のように、修羅物に、風雅さを添える役割を果たす。

四日目は、「井筒」である。「井筒」は、元来は、三番目に分類されているが、二番目の修羅物と同じ位置に配されている。二番目物が、修羅物でなくとも良いという興味深い例である。

「井筒」は、紀有常の娘が、在原業平の形見の衣裳を身につけて恋慕の舞を舞う、優麗な情趣の能である。「申楽談儀」に、「井筒・道盛など、直成能也。……井筒、上花也。」と記されている。世阿弥の自信作の能である。

五日目は、「松山鏡」である。「松山鏡」は、五番目、切能物として演じられるが、二番目にも配置されているようである。

三年前に、母を亡くした娘が、母親の形見の鏡に、わが姿を映し、母親を恋慕し、父親の教訓により、鏡の功徳を知り、孝養を尽くすことにより、母は成仏する。ワキ役の父親が語る言葉が、曲の大半を占め、子方の短も重用されている。シテは、急の段で登場するのみである。

五日目の脇能は「和布刈」で、これもワキ役の活躍が見られる。二番目が「松山鏡」である。ワキ役の活躍する能が、二番続けて演じられている。「松山鏡」のワキ花は「忠臣」の和歌、「経政」の琵琶、「清経」の笛のように、修羅物に、風雅さを添える役割を果たす。

四日目は、「井筒」である。「井筒」は、元来は、三番目に分類されているが、二番目の修羅物と同じ位置に配されている。二番目物が、修羅物でなくとも良いという興味深い例である。

「井筒」は、紀有常の娘が、在原業平の形見の衣裳を身につけて恋慕の舞を舞う、優麗な情趣の能である。「申楽談儀」に、「井筒・道盛など、直成能也。……井筒、上花也。」と記されている。世阿弥の自信作の能である。

五日目は、「松山鏡」である。「松山鏡」は、五番目、切能物として演じられるが、二番目にも配置されているようである。

三年前に、母を亡くした娘が、母親の形見の鏡に、わが姿を映し、母親を恋慕し、父親の教訓により、鏡の功徳を知り、孝養を尽くすことにより、母は成仏する。ワキ役の父親が語る言葉が、曲の大半を占め、子方の短も重用されている。シテは、急の段で登場するのみである。

一色神社例祭 奉納能

3月14日 一色神社
伊勢市無形民俗文化財に指定されている「一色能」の一色能楽保存会は、三月十四日(一色神社例祭)「奉納能」を一色町公民館舞台で開催する。

後援伊勢市、伊勢市教育委員会、協力和楽会、和谷社中、十一時開始。演能は「翁」「杜若」「松出」「狸々」「狂言」「附子」「文山殿」など八番、舞籠子、仕舞十数番、午前九時半始。

一宮邦謡会

3月21日 発表会
邦謡会(梅田邦久師主宰)は三月二十一日(日)一宮市本町の迎陽館で一宮邦謡発表会を開催する。

演能「卒塔婆小町」(シテ鈴木志子)、「姑」(シテ野口孝晴)など八番、舞籠子、仕舞十数番、午前九時半始。

(面より順回会番つづき)

連吟	船	舟	慶	方	櫻井	文子	堀場おきん
仕舞	吉野	天人	井	萬	日江	井俊子	中島おきん
連吟	桜	川	城	林	愛子	高橋	高橋おきん
独吟	葛	上	柿	仁美	高橋	久子	高橋おきん
業舞	葵	上	柿	仁美	高橋	久子	高橋おきん
仕舞	理	胡	蝶	々	加藤	サタ子	宮川
連吟	弓	之	段	山	盛	水	清
仕舞	風	教	班	山	盛	水	清
連吟	三	輪	中	谷	典	子	清
仕舞	難	波	林	和	子	堀	吉
業舞	経	正	山	貞	宇	野	雅

連吟	船	舟	慶	方	櫻井	文子	堀場おきん
仕舞	吉野	天人	井	萬	日江	井俊子	中島おきん
連吟	桜	川	城	林	愛子	高橋	高橋おきん
独吟	葛	上	柿	仁美	高橋	久子	高橋おきん
業舞	葵	上	柿	仁美	高橋	久子	高橋おきん
仕舞	理	胡	蝶	々	加藤	サタ子	宮川
連吟	弓	之	段	山	盛	水	清
仕舞	風	教	班	山	盛	水	清
連吟	三	輪	中	谷	典	子	清
仕舞	難	波	林	和	子	堀	吉
業舞	経	正	山	貞	宇	野	雅

壺泉会大会

三月二十一日(日)午前九時半始

熱田 神宮 能楽殿

老 泉 嘉夫 黒田 博

中入前ヨリ

仕舞 安宅 加藤 春枝

鉄 輪 八神 孝充

舞籠子	三	輪	大	矢	洋	美	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	松	風	西	尾	静	枝	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	玄	象	大	坪	由	紀	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	羽	衣	内	藤	悦	子	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	龍	田	鳩	田	都	弥	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	正	尊	前	川	修	福	島	雄	一	郎			
舞籠子	部	高	安	勝	久	福	井	啓	次	郎			
舞籠子	成	寺	官	部	悟	泉	嘉	夫					
舞籠子	鉢	木	シ	レ	中	川	眞	澄					
舞籠子	松	虫	山	本	和	子	福	井	啓	次	郎		
舞籠子	女	花	小	森	辰	雄	福	井	啓	次	郎		
舞籠子	海	士	前	川	和	子	福	井	啓	次	郎		
舞籠子	木	賊	八	神	由	季	地	盤	泉	嘉	夫	は	
舞籠子	采	女	柴	田	う	た	子	福	井	啓	次	郎	
舞籠子	乱	倉	地	幸	子	福	井	啓	次	郎			
舞籠子	高	砂	石	川	晴	子	福	井	啓	次	郎		
舞籠子	卒	都	婆	小	町	南	方	幹	子	ワ	キ	泉	雅
舞籠子	鍛	飯	富	雅	介	福	井	啓	次	郎			
舞籠子	冶	飯	富	雅	介	福	井	啓	次	郎			
舞籠子	師	野	村	信	行	野	村	又	三	郎			
舞籠子	師	野	村	信	行	野	村	又	三	郎			
舞籠子	師	野	村	信	行	野 </tr							

舞籠子	三	輪	大	矢	洋	美	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	松	風	西	尾	静	枝	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	玄	象	大	坪	由	紀	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	羽	衣	内	藤	悦	子	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	龍	田	鳩	田	都	弥	吉田	定	男	大	野	誠	
舞籠子	正	尊	前	川	修	福	島	雄	一	郎			
舞籠子	部	高	安	勝	久	福	井	啓	次	郎			
舞籠子	成	寺	官	部	悟	泉	嘉	夫					
舞籠子	鉢	木	シ	レ	中	川	眞	澄					
舞籠子	松	虫	山	本	和	子	福	井	啓	次	郎		
舞籠子	女	花	小	森	辰	雄	福	井	啓	次	郎		
舞籠子	海	士	前	川	和	子	福	井	啓	次	郎		
舞籠子	木	賊	八	神	由	季	地	盤	泉	嘉	夫	は	
舞籠子	采	女	柴	田	う	た	子	福	井	啓	次	郎	
舞籠子	乱	倉	地	幸	子	福	井	啓	次	郎			
舞籠子	高	砂	石	川	晴	子	福	井	啓	次	郎		
舞籠子	卒	都	婆	小	町	南	方	幹	子	ワ	キ	泉	雅
舞籠子	鍛	飯	富	雅	介	福	井	啓	次	郎			
舞籠子	冶	飯	富	雅	介	福	井	啓	次	郎			
舞籠子	師	野	村	信	行	野	村	又	三	郎			
舞籠子	師	野	村	信	行	野	村	又	三	郎			
舞籠子	師	野	村	信	行	野	村	又	三	郎			

壺泉会大会

三月二十一日(日)午前九時半始

熱田 神宮 能楽殿

老 泉 嘉夫 黒田 博

中入前ヨリ

仕舞 安宅 加藤 春枝

鉄 輪 八神 孝充

名古屋梅猶会定期能

三月二十八日(日)十二時半始

熱田神宮能楽殿

高

梅若 龍
熊沢恵美子
飯富 雅介
高安 勝久
杉江 元
佐藤 友彦
吉田 定男
後藤孝一郎
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛

鶯

梅若 龍
熊沢恵美子
飯富 雅介
高安 勝久
杉江 元
佐藤 友彦
吉田 定男
後藤孝一郎
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛

千

梅若 龍
熊沢恵美子
飯富 雅介
高安 勝久
杉江 元
佐藤 友彦
吉田 定男
後藤孝一郎
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛

狸

梅若 龍
熊沢恵美子
飯富 雅介
高安 勝久
杉江 元
佐藤 友彦
吉田 定男
後藤孝一郎
鬼頭喜太郎
藤田六郎兵衛

附祝言

主権 名古屋梅猶会
熊澤恵美子(〇五二一七八二六九七三)

平成5年2月・3月放送予定

〔2月〕NHK・FM龍楽鑑賞(午前8時~9時)
2月21日(日)喜多流「海人」友枝 昭世
2月28日(日)観世流「忠度」山崎英太郎
〔3月〕NHK・FM龍楽鑑賞(午前8時~9時)
3月7日(日)観世流「隅田川」観世元昭
3月14日(日)宝生流「熊野」松本恵雄
3月21日(日)金春流「龍祭」(TVより)金春 信高
3月28日(日) 休止
NHK教育テレビ
2月20日 天鼓 2月27日 棒 擲
(翌日午後11時30分より再々放送あり)
慶祝日能
3月20日(祝)午前9時より
新作狂言「死神」作・帆足正規 演出・茂山千之丞
出演 茂山正義、茂山あきら、茂山真吾ほか
3月21日(日)午後9時より
狂言「葉袍落」~大鼓流~
出演 茂山千五郎、茂山忠三郎、茂山正義
~NHK古典芸能鑑賞会より~

正月の舞台から

竹尾 邦太郎

本邦一を誇示する芸術劇場の開館記念事業は、「あいちの芸術家たち」シリーズの一として文字通り県勢を鼓舞するに相応しい「能」の公演を取り上げた。能楽協会名古屋支部が主催する祝賀能は大盛況で、当県の文化水準の高さを改めて認識させたと云えるだろう。当今はあまり使用されないが、「殿堂」という言葉を使い出さざる程の、眩いばかりの大ホールは客席二千五百、五階の高みから両翼に張り出す三層のバルコニー席を持ち、オペラ劇場の偉容を遺憾なく現わして独得の雰囲気である。

「鶯」シテ邦久、三番鬼・祐一、千歳・正邦、面箱・友彦。開演を告げる予鈴などは当然無く、定刻一時に二分前掲幕が上ると、面箱を先立てて一同橋懸を運ぶ。組立の能舞台は文化講堂時代のものを引き継ぎ、鏡板の装飾性の強い松

う。卓見のようで意味は大。建てからでは「してきてよきにつくべし」(世阿弥)だったか隅田川子方の有無は通らぬ。東京の代表的な新築の能楽堂、と云って少しは年月はたつたが、その舞台は三間四方より狭く出来上っていること(寸法のとり違いか)。運歩が作法通り出来ぬらしい。演者の心得にもよるが、これと大同小異である。橋掛りが余り長いと、シテ正面後方から三ノ松後方のワキ正の席が幅広く目に入ってくる。橋掛りが舞台とつく角度もまた注意したい。金剛流・土蜘蛛の小若千筋八寸すじVノ伝で勾欄越しができるようにしたい。

前後したが、鏡板の松のこと。私がみた松は、古風な松でゆつたりしている(熱田・宝生・金剛舞合)。たぶたとしては(国立能楽堂)、遠近法が用いられている(東京観世会館)、やや抽象的に描かれているなどすぐ目につく。信屈(きつこ)とつけた松もある。私は八熱田Vの松が好きであるが同型が二つあるのは異見もある

びやか。大鼓(鉦一)に牽かれて勇躍舞い出す三番鬼の採ノ段は、溜めに溜めた力が迸り、鳥獣は高々と、鈴ノ段も躍動感に溢れる。清々しく爽快な一番だった。

(1時間5分)

「鶯」脇狂言は舞物で祝言。シテ舞・信行、アド男・又三郎、太郎冠者・高橋、何某・礼之助。土鳥帽子に赤い襟、紅白段段目、に萌黄の茶袍袴は折鶴文様もめでたい舞の出立だが舞入の行儀作法に疎く、何某に教えを乞う。

再々の舞入で知識は豊富、などと勘違いされてしまった何某は、仕返しに鶏の真似が作法に適合と鶏冠様の洞鳥帽子を着せる。この辺り、初々しい信行と老練礼之助の対比に味がある。

さて、開の声を上げ素袍の広袖を著くのを合図に四辺の空気が動き出すと、一管(六郎兵衛)の音が流れて息詰まるような沈黙が解ける。軽やかな小鼓(孝一郎・富司忠・嘉津等)の連踏。鋭角的で硬質な千歳ノ舞に続く翁ノ舞は対照的に袖あしらも柔らかく伸

メ、「クレーククレーククケッ」の暗れやかさがよかった。

(22分)

「吉野天人・天人揃」シテ嘉夫(ワキ勝久・雅介・元)が連れ立って深吉野に分け入ると、シテ里女が呼び掛ける。花は美しくも妖しく、妖しい、とは人を迷わすようになまめかしい、の謂。されば天人も花に惹かれて里女と化現し、花の友の好道に天人ノ舞を見せよう、と消える。後シテは常は一人、その風情は深山に独り咲く山桜の可憐に重なるが、天人揃の小書で俄然花の雲纏引くように賑々しく華やかく様相も面白い。昭和五十六年の義経能以来の上演で、ホール能にはうってつけである。

シテ嘉夫は面増・鳳凰・白摺箱・赤地縫箔(青海波文様)腰巻に白舞衣(霞・雪輪文様)・龍折の端麗。ソレ(一政・修一・幸江・郁子)は連面・黒垂・天冠・赤地縫箔腰巻・紫長絹の美々しさである。前二者が橋懸、後二者はシテと共に舞台上でノ舞を相舞する。

男女のツレの背文を考えたバランスもよく、就中、舞の中で一斉に袖を被くのも仕度で、粒揃いのツレ陣の活躍が大いに楽しませる。キリは、ハ飛び上がり、で沈み、ハ飛び下り、と起ってアクセントをつけ、トメは夫々の位置で揃ってトメた。ドラマの起伏のない小品ながら観能初心者にも「能」の雰囲気を感じて佳舞合だった。

(47分)

半能「石橋・大獅子」能の、幽言を「露ノ拍子」の囃子に、梅燭を「獅子」の囃子に包括して遺憾がない。深い静寂の中を、滴り落ちる露が清冽な流れとなる情景を彷彿とさせる小鼓(富司忠)と太鼓(好信)の妙は、ホール独自の音響設計の効果が更に幽かな雰囲気思わぬ効果も上げる(が、常には残響は邪魔)。白は一英、赤を徹二。手練(たれ)の余裕の、思いきりのよさが随処に見られてスケールの大きな獅子となった。ワキ照源法師は飲世代動雅介。囃子の残りドメ。(19分・1月31日於県芸術劇場大ホール)

紅梅記

一年末年始

今年の梅(盆栽)は早くも一月八日に紅梅が開く。続いて白も。中旬には白い梅(銘袖隠し)が一輪咲く。赤い方(天が下)は遅れて二月始めに。寒いと言っても時を知る。

× × ×

昨年は新築能楽堂建設の第一年。広く英知を集めての計画であろう。もちろん能楽師・狂言師の衆知も募めて。その有り余る端に私も少し小見を。ごくやさしい事を。

一、新築は古風な観能がよいが、モダンな姿か、まずこれがむつかしいが、周辺とマッチするのが一つの条件。

二、能楽堂内。舞台・見所・廊下、休憩室ほかの大きさと便利さと釣合い。これまた重々考察を要するが、中でも舞台と見所のこと大車。舞台は少し広げらる。鏡板と橋掛りの関係はどうである

× × ×

う。卓見のようで意味は大。建てからでは「してきてよきにつくべし」(世阿弥)だったか隅田川子方の有無は通らぬ。東京の代表的な新築の能楽堂、と云って少しは年月はたつたが、その舞台は三間四方より狭く出来上っていること(寸法のとり違いか)。運歩が作法通り出来ぬらしい。演者の心得にもよるが、これと大同小異である。橋掛りが余り長いと、シテ正面後方から三ノ松後方のワキ正の席が幅広く目に入ってくる。橋掛りが舞台とつく角度もまた注意したい。金剛流・土蜘蛛の小若千筋八寸すじVノ伝で勾欄越しができるようにしたい。

前後したが、鏡板の松のこと。私がみた松は、古風な松でゆつたりしている(熱田・宝生・金剛舞合)。たぶたとしては(国立能楽堂)、遠近法が用いられている(東京観世会館)、やや抽象的に描かれているなどすぐ目につく。信屈(きつこ)とつけた松もある。私は八熱田Vの松が好きであるが同型が二つあるのは異見もある

× × ×

きな区会とのときであるが、これはついて廻るのでは。善処を。

七、喫茶店の経営。これもむづかしい。

このほか交通の便、冬の演能は暗くなってからになるので、この対策も考えねばなるまい。

一番最後にしたが、堂内の諸係の方々に「能・狂言をみせてやる」と言った心持が些さかもある。はならない。これも東京の大きな能楽堂でそんな目にあい、それから一度も訪ねてはいない。

長々と述べたが、古典芸能を愛したずねる市民は多勢の人々で心美しくなごやかで楽しくなる能楽堂をつくらねば。

付、付設の資料館などのことは別記したい。なお関係者の方達は開演中の二・三の能楽堂を見学されるように。京都金剛能楽堂は今も盛衰の見所。一見に値しよう。

× × ×

付二、開館後実際の運営について成算があるのか。八熱田Vや楽師の往来。能楽人口が余り多くない名古屋で果して経営が成り立つのか、私には不安が大。コンビニ

二月二日京都生寺の御分會の狂言(生狂言・曳掛)をNHKテレビで紹介。参集者は雪の舞う中熱心にみる。

(立春の日 野村広二)

能楽大会のビデオ撮影は西川企画へ!
舞姿の勉強と記念に是非どうぞ!

当社のビデオ撮影はNHKのテレビ放送番組を20年間制作してきた専門技術により、きつとご満足いただける自信があります。

テレビ放送番組企画制作
テレビCM企画制作
ビデオプロダクション 西川企画

名古屋営業所(〒451)名古屋市中区西区2-20-3輪の内荘 小原方 ☎(052) 571-5816
(〒500)岐阜市北野町20-2 TEL (0582) 63-9869

観世流・金剛流
宗家本元行

檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入

電話 (3291) 2488-9
振替東京 3-3 552
電話 (231) 1990
振替 京都 1-113

三番目物
初日の能の三番目は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

「三番目物」は、「江口」である。「五音」に、「江口遊女亡父曲」とあり、観阿弥作曲、世阿弥改作と考へる説もある。

尾張藩の能の歴史(三)

辻 宏

物の思いを描いたものである。三日目は「定家」である。「定家」は、室町期の作者付けなどから、金春権竹作と考へられている。「定家」は、藤原定家が、式子内親王を恋するあまり、死後も恋となつて、恋する式子内親王の墓石にまわりつくつくと云々、式子内親王をシテとして描く。

物の思いを描いたものである。三日目は「定家」である。「定家」は、室町期の作者付けなどから、金春権竹作と考へられている。「定家」は、藤原定家が、式子内親王を恋するあまり、死後も恋となつて、恋する式子内親王の墓石にまわりつくつくと云々、式子内親王をシテとして描く。

物の思いを描いたものである。三日目は「定家」である。「定家」は、室町期の作者付けなどから、金春権竹作と考へられている。「定家」は、藤原定家が、式子内親王を恋するあまり、死後も恋となつて、恋する式子内親王の墓石にまわりつくつくと云々、式子内親王をシテとして描く。

物の思いを描いたものである。三日目は「定家」である。「定家」は、室町期の作者付けなどから、金春権竹作と考へられている。「定家」は、藤原定家が、式子内親王を恋するあまり、死後も恋となつて、恋する式子内親王の墓石にまわりつくつくと云々、式子内親王をシテとして描く。

物の思いを描いたものである。三日目は「定家」である。「定家」は、室町期の作者付けなどから、金春権竹作と考へられている。「定家」は、藤原定家が、式子内親王を恋するあまり、死後も恋となつて、恋する式子内親王の墓石にまわりつくつくと云々、式子内親王をシテとして描く。

物の思いを描いたものである。三日目は「定家」である。「定家」は、室町期の作者付けなどから、金春権竹作と考へられている。「定家」は、藤原定家が、式子内親王を恋するあまり、死後も恋となつて、恋する式子内親王の墓石にまわりつくつくと云々、式子内親王をシテとして描く。

物の思いを描いたものである。三日目は「定家」である。「定家」は、室町期の作者付けなどから、金春権竹作と考へられている。「定家」は、藤原定家が、式子内親王を恋するあまり、死後も恋となつて、恋する式子内親王の墓石にまわりつくつくと云々、式子内親王をシテとして描く。

物の思いを描いたものである。三日目は「定家」である。「定家」は、室町期の作者付けなどから、金春権竹作と考へられている。「定家」は、藤原定家が、式子内親王を恋するあまり、死後も恋となつて、恋する式子内親王の墓石にまわりつくつくと云々、式子内親王をシテとして描く。

もなつて遠い旅路を、はるばる筑紫までやってきた女が、大宰府の神主である男の妻の嫉妬によつて、冷たく突き放される。女は絶望のあまり、藍染川に身を投げる。そこへ、外出先から戻ってきた神主(ワキ)が、女の遺書をみて都で愛した女であることを知り、自分の子であることを知らされる。神主はわが子に父と名のり、女の蘇生を神に祈る。

もなつて遠い旅路を、はるばる筑紫までやってきた女が、大宰府の神主である男の妻の嫉妬によつて、冷たく突き放される。女は絶望のあまり、藍染川に身を投げる。そこへ、外出先から戻ってきた神主(ワキ)が、女の遺書をみて都で愛した女であることを知り、自分の子であることを知らされる。神主はわが子に父と名のり、女の蘇生を神に祈る。

もなつて遠い旅路を、はるばる筑紫までやってきた女が、大宰府の神主である男の妻の嫉妬によつて、冷たく突き放される。女は絶望のあまり、藍染川に身を投げる。そこへ、外出先から戻ってきた神主(ワキ)が、女の遺書をみて都で愛した女であることを知り、自分の子であることを知らされる。神主はわが子に父と名のり、女の蘇生を神に祈る。

もなつて遠い旅路を、はるばる筑紫までやってきた女が、大宰府の神主である男の妻の嫉妬によつて、冷たく突き放される。女は絶望のあまり、藍染川に身を投げる。そこへ、外出先から戻ってきた神主(ワキ)が、女の遺書をみて都で愛した女であることを知り、自分の子であることを知らされる。神主はわが子に父と名のり、女の蘇生を神に祈る。

もなつて遠い旅路を、はるばる筑紫までやってきた女が、大宰府の神主である男の妻の嫉妬によつて、冷たく突き放される。女は絶望のあまり、藍染川に身を投げる。そこへ、外出先から戻ってきた神主(ワキ)が、女の遺書をみて都で愛した女であることを知り、自分の子であることを知らされる。神主はわが子に父と名のり、女の蘇生を神に祈る。

もなつて遠い旅路を、はるばる筑紫までやってきた女が、大宰府の神主である男の妻の嫉妬によつて、冷たく突き放される。女は絶望のあまり、藍染川に身を投げる。そこへ、外出先から戻ってきた神主(ワキ)が、女の遺書をみて都で愛した女であることを知り、自分の子であることを知らされる。神主はわが子に父と名のり、女の蘇生を神に祈る。

もなつて遠い旅路を、はるばる筑紫までやってきた女が、大宰府の神主である男の妻の嫉妬によつて、冷たく突き放される。女は絶望のあまり、藍染川に身を投げる。そこへ、外出先から戻ってきた神主(ワキ)が、女の遺書をみて都で愛した女であることを知り、自分の子であることを知らされる。神主はわが子に父と名のり、女の蘇生を神に祈る。

もなつて遠い旅路を、はるばる筑紫までやってきた女が、大宰府の神主である男の妻の嫉妬によつて、冷たく突き放される。女は絶望のあまり、藍染川に身を投げる。そこへ、外出先から戻ってきた神主(ワキ)が、女の遺書をみて都で愛した女であることを知り、自分の子であることを知らされる。神主はわが子に父と名のり、女の蘇生を神に祈る。

内藤泰二氏著

「観る」愛面居士の能面探究辨

能面関係著述集出版

宝生流シテ方として能楽の普及指導に貢献した元能楽協会名古屋支部長・内藤泰二氏は平成三年二月逝去されたが、能の演者としての修練とともに、能面研究の幅の広さと造詣の深さはつとに知られ、昭和四十二年から宝生流能楽月刊誌「宝生」に九年間延べ六十二回にわたって「能面同名異相異名同相辨」として連載、その力作はきわめて注目された。

宝生流シテ方として能楽の普及指導に貢献した元能楽協会名古屋支部長・内藤泰二氏は平成三年二月逝去されたが、能の演者としての修練とともに、能面研究の幅の広さと造詣の深さはつとに知られ、昭和四十二年から宝生流能楽月刊誌「宝生」に九年間延べ六十二回にわたって「能面同名異相異名同相辨」として連載、その力作はきわめて注目された。

宝生流シテ方として能楽の普及指導に貢献した元能楽協会名古屋支部長・内藤泰二氏は平成三年二月逝去されたが、能の演者としての修練とともに、能面研究の幅の広さと造詣の深さはつとに知られ、昭和四十二年から宝生流能楽月刊誌「宝生」に九年間延べ六十二回にわたって「能面同名異相異名同相辨」として連載、その力作はきわめて注目された。

素謡と仕舞の会

四月十八日(日) 九時半始

熱田 神宮 能楽 殿

素謡 盛 有園 元善 都築 健三 高橋 和成

仕舞 楊貴妃 西川喜代子 長谷川田鶴

遊行 柳 二木 卯子 丹羽 久子

三 山 加藤井知子 坂野 喜子

姑 波 西川喜代子 高沢 美子

姨 捨 岡田 春江 田中 純一

求 塚 高沢 美子 木村 ひで

木 賊 牧野 あい子 竹内 英雄 西矢 義雄 山本 泉

藤 戸 佐藤 英生 若麻 瑞穂 山口 謙介

御来場歓迎 (素謡一部省略させていただきます)

青陽会定式能(第237回)

五月八日(土) 十二時半始

熱田 神宮 能楽 殿

素謡 巻 三村 恵子 加藤 保彦 馬場 信至

養 老 坂富 雅介 吉田 定男 鬼頭 好信

竹生 島 古橋 正邦 玉木 孝男 加藤 保彦

法師 杉江 元 後藤 孝一 大野 誠

賀 賀 茂 瀬戸 三津子 三村 恵子 加賀 敏彦

善 知 鳥 前野 郁子 地謡 今沢 幸江 里 幸和 美和

小島 一英 飯富 雅介 鬼頭 英二 池田 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

飯富 雅介 柳原 富司 大野 誠

紅梅記

春の翁、本

翁のこと。二月十四日観世世初
回。「翁」ではじまる。観世元昭
氏が翁を勤める。ゆたかでないが
か、天下泰平を祈るすがすがしき
十分。芸能性も、それは能舞台で
も熱田さんの社頭でもピッタリの
翁さんであった。二度正先で平伏
拜をする様、後半左袖を抜き右肩
オモテに当てた立姿は実に見事。
ありがたかった。一月の東京観世
会で舞った脇能龍也もよかった由
（山崎有一郎氏、能楽タイムズ一
月号）。なお翁は観世清和氏。統
いて高砂を清和氏が。老翁のカタ
チ暗々とし、前半終りから後半に
かけ神々しく佳。しかも細微。
「四海波」上々。切りの中央立姿
これもまたきれい。そして狂言福

如月の舞台から

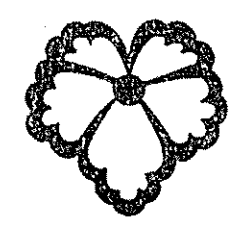
「宝生会」「観世会」「九臈会」

竹尾 邦太郎

「藤」予定番組は「景清」シ
テ十喜雄。しかし一月九日享年八
十四で長逝された。師近年の好舞
台は数年前の「藤戸」、能が好き
でたまらない、といったお人柄は
最晩年まで気力で舞台を勤めら
れた姿勢に窺われる。当地宝生
会、師の出勤は舞台を引き締め
た。御冥福を祈るばかりである。
急転番組は「藤」、シテは「景清」
のソレとトモに予定されていた澄
子を前シテ、克業を後シテとす
る少々安易な連曲（ローティンシ
ンがあるのか）。というのも一昨
年初回も澄子の「藤」だった。松
立木を出すか、へ松に交へる藤
に藤の花をつけたいのなら、む
しろ出さない方がよいのではない
か。澄子には慣れた舞台、へかへ
さの雁のいる雲の、とワキ正で右
ウケ、薄く上を見る風情も慎まし
く、地（富田夫・満次郎ら）との
掛合もしんみりして、ゆげな感じ
は中々よい。前後にシテを分けた
ためアイ狂言を抜き、直ぐワキ助

ノ神（松次郎）。はじまる前にし
おらく休憩。しかしことは休まず
に続けてはしかなかった。見所にもそ
れだけの心得はあるはず。
次は「小袖替我」（観世芳宏、同
芳伸）。この能は今年屈指の目玉
であるのだが、思ひおこせば八熱
田Vが出来て間もなく元正・元昭
兄弟で舞われた（仕舞だったか）
ことがあった。三十年以上も前の
ことである。楽屋で清和氏からと
ても明るい近況をきく。その中味
は後日の楽しみに。
玄閑を出してしようしやな元昭さ
んにあう。心中多幸を祈りつつ別
れる。堂前の桜はまだ固い。
付、三月七日NHKFMで元昭氏
の「開田川」が放送される。「子
方なしでやります」と静かに語り
れた。
本。 X X X
今は亡き長友内藤泰二氏（宝生

久の侍。後シテ克業もそつ無
く、舞グセの、へ袖触れし句ひま
で、聞けば昔を忍ぶ草、と左右か
ら拍子二つ踏む辺りの情調の幽さ
が上々。唯子は希世・啓次郎・敏
一・喜太郎。（1時間9分）
「鶴」藤の切地、へ鶴の
啼りの声の句ひも深みどり、に呼
応する暗合。シテ鳥刺・松次郎、騎
射笠・段坂斗目・下袴・陣羽織・
太刀の大仰は、野に出たアド弘之
の、鶴の鶴の啼りを聞きつけ、「ワ
アアア、鶴の声がする」と一
ノ松句欄に寄るのも大仰。その仰
天した声が頑迷なまでにしつこ
く鶴を無心する気持を強引に納
めさせる。迷惑、困惑、果てはそ
の無体に呆気にとられ、やつと賭
に及ぶ弘之の表情の変化が面白
い。（28分）
「大江山」シテ孝。前は、婦
然と面テラシ、一疊台に安座し
てワキ頼光・勝久以下を接見する
ところに貫録をみせるが、挙措全
般にいつもの元気がみられず寂し



御料理

蓬軒

あつた

三月の名古屋は久方振りに金春
流の道成寺がある。（能楽鑑賞会）
下郷の鐘の出は「えいとう、え
いとう」「えいやえいや」とにぎ
やかである。シテ・本田光洋。み
ものであろう。
梅の清香に代り桃の花のうらら
かさとなる。
一月号で坂本繁三郎氏を繁次郎
と、「受知芸術文化Cの英語名の
方は文化のことばがない」の文中
文化を芸術と書く。又二月号で冬
の終演を演能と。お詫びして訂正
します。
（三月三日 野村広二）

「能」（京都観世会館発行）の
こと、このパンフは同会館の備し
て中心に京都の演能と一、二の能
楽研究を月刊で載せるが、大層重
宝。実は昨年八月から本年一月ま
で六ヶ月座談会形式の「能の変遷
をたどる」装束と面を中心に」が
切畑健・堀安右衛門氏・福集部
司会で行われている。貴重。一筆

の前姿があつてヒシギから其ノ次
第。ワキが風を起して勇躍出る
ところは正に「高砂」の爽快で、跡
三郎（先年大観で見た眉宇凛々し
い「羅生門」は忘れられない）の
資質に負うところ大。シテ清和、
名は体を現すところ、清和とは、春
の時候の長閑に穏やかなこと、の
義。ツレは、微二の連吟のふく
らみに共白髪を平穏があり、ク
セ後へ掻くも落葉の、とがっし
りと竹柵（さらえ）を置くところ
には力強さをみせる。後シテ、神
舞も深朗、亡父左近元正の衣鉢を
立派に継いでいるのを目の当りに
して嬉しかった。なおアイ祐一は
士鳥帽子・括袴・掛素袴・小刀の
出立。（1時間18分）
「福ノ神」「福は内」「福は
内」の高らかな豆撒きの声の中
に、それを聞きつけてシテ福天、
松次郎が何々大笑しながら現れ
る。それを更に見て騒々しくも賑
やかに囃すアド礼之助と弘之もの
りになる。（16分）
「小袖替我」シテ十郎・芳宏、
ツレ五郎・芳伸。それぞれ萌黄と
紺の大口を穿く。掛直垂は淡黄色
の地に紺の切金文様で同装。色大
口は狩野の保護色と思えぬでもな
い。シテとツレとの問答がリズム
カルで切切れよく心地よい。いわ

割烹・小料理

城

●熱田神宮 能楽殿 喫茶部
●住吉小路（中区栄3-10）
電話 241-0248

面打教室

於名古屋・榮朝日神社
毎週木曜日及び土曜日（それぞれ月4回）
（教室の見学・能面お求めになりたい方お気軽におこし下さい）

日本能面巧芸会

会長 林 龍 雲
事務局 名古屋市中区錦1丁目3-31 丸満ビル3F 晃栄化学内 電話(052)211-4451

観世流謡曲本

ちくさ正文館

ちくさ駅前
電話 1137

御料理

蓬軒

あつた

観世流・金剛流 宗家本発行 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291) 2488-9 振替東京3-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231) 1990 振替京都1-113

能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 0-36393
購読料 1年 1000円
郵送の場合 1年 1500円
— 部 90円

能 納 奉 祭 田 熱

6月5日 熱田能楽殿

能楽協会名
古屋支部主催
による熱田能
宮大祭の協賛
「熱田まつり
奉納能」は六
月五日(土)
午後一時から
熱田神宮能楽
殿で開催され
演能は宝生流
能「巻相」
(シテ田和利)
観世流能「羽
衣」(シテ三
村恵子)
狂言「因幡
堂」(シテ井
上祐一)ほか
など、入場無料。

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

〔4月〕	25日(日)	久田 観正 会	(来場歓迎)
	29日(祝)	幸円次郎師をしのぶ会	(来場歓迎)(番組①面)
〔5月〕	5日(祝)	興青 会 大 会	(来場歓迎)(番組②面)
	8日(土)	興青 会 大 会	(来場歓迎)(番組②面)
	9日(日)	興青 会 大 会	(来場歓迎)(番組②面)
	15日(土)	観世 九郎 卓 会	(来場歓迎)(番組③面)
	16日(日)	観世 九郎 卓 会	(来場歓迎)(番組③面)
	22日(土)	観世 九郎 卓 会	(来場歓迎)(番組③面)
	23日(日)	観世 九郎 卓 会	(来場歓迎)(番組③面)
	23日(土)	観世 九郎 卓 会	(来場歓迎)(番組③面)
	30日(日)	観世 九郎 卓 会	(来場歓迎)
〔6月〕	5日(土)	熱田まつり奉納能	(来場歓迎)
	6日(日)	熱田まつり奉納能	(来場歓迎)
	13日(日)	熱田まつり奉納能	(来場歓迎)
	19日(上)	熱田まつり奉納能	(来場歓迎)
	20日(日)	熱田まつり奉納能	(来場歓迎)
	26日(土)	熱田まつり奉納能	(来場歓迎)
	27日(日)	熱田まつり奉納能	(来場歓迎)

高安流 西村欽也氏逝去

3月31日告別式執行



熱田神宮能楽殿運営委員を歴任
平成元年から能楽協会名古屋支部
長をつとめ、名古屋市立能楽堂建
設の気運の高まりとともに名古屋
支部長として各面に尽力された功
績は大きなものがあった。

西村欽也先生を悼む
二十年あまり昔である。中部金
剛会の一「城通」のワキを欽也先生
が勤められた。シテは野嶋弥左衛
門師である。神楽びた雰囲気の後
々まで印象に残るよい舞台だっ
た。「品のよいお話し」の舞台だ
た。と、師匠の老婦人から独り言
のような口調で話しかけられた。

近年の先生は、病を押して気魄
の舞台を勤められたよう。昨秋
の「三輪」喜之、「清経・恋ノ音
取」一缺之丞、そして最後の舞台と
なった平成四年十一月八日の観世
会での「碁・梓ノ出」九郎右衛門
などは見事な完成度を見せ、後世
に残る好演だった。それにしても
尽力された市立能楽堂建設が決定
して設計段階に入るといふ今、支
部長の職を文字通り任期一勤め
られて黄泉に旅立たれた律儀さを
思うと、ただただ哀しく、謹んで
御冥福をお祈り申し上げるばかり
である。

能楽協会の名古屋支部長、能楽協
会理事、ワキ高安流、西村欽也
氏は昨年未入院加療中、ところ三
月二十八日午後六時四十分肺がん
のため逝去された。享年六十九歳。
本名杉山欽也。

幸圓次郎師をしのぶ会

四月二十九日(みどりの日)午前九時始

翁	藤井 完治	田中 章文	幸 正昭	野 正和	藤田 六郎兵衛
宝海	林 佳代子	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
宝安	林 治代	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
西東	鬼頭 英二	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
西王	鬼頭 英二	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
芦 桜	水谷 栄一	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
船 弁	水谷 栄一	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
運 羽	衣ヶセ	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
宝 經	政ヶセ	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
宝 羽	衣ヶセ	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
笹 之	段	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
運 鞍	馬 天狗	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
船 弁	慶ヶセ	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
羽 衣	衣ヶセ	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
宝 雲	山 竹	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
運 弓	八 幡	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
善 知	鳥 手	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
西 行	桜 篋	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
一 頭	花 篋	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
運 宝	田 村	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
運 喜	羽 衣	野 正和	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛

遊 行	柳 丸	山崎 留尾	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
野 宮	合 留	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
連 東	北 丸	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
松 風	深 見	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
葛 城	大 和	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
喜 船	大 和	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
喜 駒	之 段	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
藤 戸	大 和	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
能 葉	上 間	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
草 子	洗 小	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
半 宮	殿 殿	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
喜 野	宮 殿	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
船 弁	慶 慶	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
能 通	小 町	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
狂 宵	小 舞	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
半 融	泉 夫	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛
(御来聴歓迎)	賢助 幸	河村 総一郎	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛	藤田 六郎兵衛

四番目の初目の能は、「羅生門」である。「羅生門」は、五番目物と...

四日目の四番目の能は、「放下僧」である。「放下僧」は、親を討たれた兄弟が、敵の目を欺いた...

三日目の四番目の能は、「葵上」である。「葵上」は、四番目物として、今日も人気曲の一つである...

二日目の四番目の能は、「張良」である。「張良」は、五番目物、又は、略略能物とも言われる...

唯一の女性物と言えらる。その他の五日間は、鬼番か、武士かが、シテとして登場する...

尾張藩の能の歴史 (三三三)

辻 宏

「羅生門」の作者は不明である。シテ成生は、人生の意義に迷い、正しい道を求めて、高僧のいる...

「大仏供養」は、悪七兵衛景清(前シテ)が、平家一門の弔いに、東大寺の大仏供養にやってきました...

「羅生門」などは、その典型である。三日目の四番目の能は、「葵上」である...

「羅生門」の作者は不明である。シテ成生は、人生の意義に迷い、正しい道を求めて、高僧のいる...

衣を賜りたいと請う。不審に思った僧は、衣を与え、住みかを尋ねると、三輪の里の杉の木の下...

「羅生門」の作者は不明である。シテ成生は、人生の意義に迷い、正しい道を求めて、高僧のいる...

「羅生門」の作者は不明である。シテ成生は、人生の意義に迷い、正しい道を求めて、高僧のいる...

「羅生門」の作者は不明である。シテ成生は、人生の意義に迷い、正しい道を求めて、高僧のいる...

「羅生門」の作者は不明である。シテ成生は、人生の意義に迷い、正しい道を求めて、高僧のいる...

名古屋金春流能の会 五月九日(日)午後二時始 御来場歓迎 名古屋金春会 中部金春会 日本電装謡曲部

名古屋金春流能の会 五月九日(日)午後二時始 御来場歓迎 名古屋金春会 中部金春会 日本電装謡曲部

名古屋金春流能の会 五月九日(日)午後二時始 御来場歓迎 名古屋金春会 中部金春会 日本電装謡曲部

名古屋金春流能の会 五月九日(日)午後二時始 御来場歓迎 名古屋金春会 中部金春会 日本電装謡曲部

名古屋金春流能の会 五月九日(日)午後二時始 御来場歓迎 名古屋金春会 中部金春会 日本電装謡曲部

名古屋観世九鼻会定期能 (三回目) 五月十五日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

名古屋観世九鼻会定期能 (三回目) 五月十五日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

名古屋観世九鼻会定期能 (三回目) 五月十五日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

名古屋観世九鼻会定期能 (三回目) 五月十五日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

名古屋観世九鼻会定期能 (三回目) 五月十五日(土)午後一時始 熱田神宮能楽殿

弥生の舞台から (その1) 第七回名古屋能楽鑑賞会

竹尾邦太郎

「八句連歌」 懐紙四枚を各半折して初折・二折・三折・名残ノ折と名付けて表裏八面。初折ノ表と名残ノ裏に各八句、残り六面に各十四句を連ねて計百句を連歌では「百韻」と言う。初折ノ表八句だけで構成する一巻を最小単位とし、「いざ表八句なりと致せうか」の「八句連歌」である。因に歌仙形式は、懐紙二枚半折の四面に六・十二・十二・六と句を連ね三十六句とする。さて連歌は、付合(つけあい)・前句に付句をする(事)の機構、折合や序破急を助案して約束事を守り、首尾を整える高度な知的ゲームの一種。その面白さは当今のパソコンゲームの比ではなく、付合(つけあい)次第では盗人が生む表情からしか見所の反応が

伊勢神宮奉納五周年記念番組

五月十六日(日) 正午始め 伊勢市宇治町一番地 伊勢神宮 舞台

Table listing performers for the Ise Shrine dedication program, including roles like 舞臺子, 高砂, 三輪, 舞臺子, 高砂, 三輪, etc., and names like 後藤孝一郎, 須藤孝一郎, etc.

無いは、連歌を嗜んだ当地の庶民教養をみせつけられた思いで、暗然とせざるを得なかった。(29分) 「道成寺」 シテ光洋、一九八〇年の欣三以来当地久々の金春お家芸の「道成寺」。賑やかに運び入れられた鐘を、アイ取次郎・剛直が手際鮮やかに吊り上げて気持がよい。フレの後、ススッと解放された見えたシテは、脊を背に暫時佇む。面は曲見、唐織は亀甲の女の、ややくモリがちの姿には、シテの心状の基調となるその昂り、物着で増幅され、一ノ松からは鐘を見込む所胸心の目的のざらざらした感じも一入なら、乱拍子の床に粘りつくような足踏むと、格別、小刻みに低く拍子三ツ踏むと、「道成の脚」となり、急ノ舞は拳指人形振のように見えたのは鮮やか。鐘入(後見・菊次郎)は、鐘に寄って縁に手を掛けるや拍子踏みまぎまぎ身体を振って飛び込んだと見たが、身体の一部が触れて鐘は其下に落ちずひやりとした。かしそれとも起、鐘が上ると打杖に左手を添えた赤頭のシテが凝然と安座する。立つと、蛇の衣を脱ぎ捨ててゆくのが観世などとの違って面白。イノリからキリへと、ワキ関との闘争の型どころの表情の豊かさは、へ(折り折られ)かっぱと転ぶが、と小刻みに首を震わせてスミから鐘を見込むところまことに鐘首拾って眺みかかるところに、一旦退って疾走すると、へ深淵に、と飛び上りまきまきに入った。急ノ舞までの、満を持していた前シテと、矢が放たれた後シテとの対照が見事だった。地は汎・安明ら、後見に信高・晃美・尚久。唯子を六郎兵衛・連雄・忠雄・元信。(1時間58分・3月13日・名古屋能楽鑑賞会)

Table listing performers for the Ise Shrine program, including roles like 舞臺子, 高砂, 三輪, 舞臺子, 高砂, 三輪, etc., and names like 後藤孝一郎, 須藤孝一郎, etc.

たまも会(第五回)

五月二十二日(土)午前十時始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers for Tamamo-kai, including roles like 高砂, 大江山, 女郎花, 船弁慶, 春日龍神, 仕舞, etc., and names like 後藤孝一郎, 須藤孝一郎, etc.

名古屋観衛会大会

五月二十三日(日)午前十時始 熱田神宮能楽殿

Table listing performers for Nagoya Kan-ei-kai Taikai, including roles like 仕舞, 舞臺子, 高砂, 三輪, etc., and names like 後藤孝一郎, 須藤孝一郎, etc.

謡曲本専門店 創業75年 株式会社 東文堂書店

名古屋市中区栄三丁目28番16号 (〒460) (松坂屋南一丁) 電話 (052) 241-1059番

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年 1000円

郵送の場合 1年 1500円

一 部 90円

「能と狂言の世界」公演

能楽協会 名古屋支部の企画

能楽の普及と公演・市民能として、能楽協会名古屋支部(野村又三郎支部長)が新しく企画した「能と狂言の世界」公演は、平成八年度に完成が予定される名古屋市民能楽堂に向けての試行的な試みとして、強いつながりよせられているが、いよいよよきたる六月二十六日(七月十一時と二時からの二回にわたって催される。(番組③面)

大槻秀夫師三回忌 追善能名古屋公演

六月六日 熱田神宮能楽殿

大槻秀夫師をしのぶ三回忌追善能名古屋公演が六月六日(日)熱田神宮能楽殿で催される。師は、大阪文化祭賞(昭和四十四年、四十八年)文部省芸術祭優秀賞団体賞(昭和五十一年)能楽文化使節団副団長としてニース、モナコ、ベルリンなど公演(昭和五十一年)、昭和六十年に勲五等双光旭日章を受章、大槻清韻会を主宰され、能楽の育成発展に貢献された。

七世野村万蔵

野村万蔵の丞氏が襲名

和泉流狂言方野村万蔵の丞氏は、このたび五月六日父万蔵氏の祥月命日を期して、七世野村万蔵を襲名した。「これを機に初心に立ち帰り、父祖の名を尊めぬよう一層精進を重ねる所存」とあいさつしている。

名古屋公演は大槻清韻会主催、能「朝長」(シテ泉嘉夫)能「卒都婆小町」(シテ大槻文蔵)半能「融」(シテ親世喜之)はじめ狂言「宗論」舞獅子、仕舞など。(番組②面)

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

(5月)

23日(日) 観 衛 会 大 会 (来場歓迎)

29日(土) 和 泉 元 秀 の 世 界 (有料) (番組①面)

30日(日) 吉 田 俊 彦 師 追 善 会 (来場歓迎) (番組①面)

(6月)

5日(土) 熱 田 ま つ り 奉 納 能 (来場歓迎) (番組①面)

6日(日) 大 槻 清 韻 会 (有料) (番組②面)

13日(日) 大 槻 清 韻 会 (有料) (番組②面)

19日(土) 能 楽 会 定 式 能 (有料) (番組③面)

20日(日) 能 楽 会 定 式 能 (有料) (番組③面)

26日(土) 能 狂 言 の 世 界 (有料) (番組④面)

27日(日) 能 狂 言 の 世 界 (来場歓迎) (番組④面)

(7月)

4日(日) 名 古 屋 観 世 九 阜 会 能 (有料)

9日(金) 社 会 教 育 合 同 け だ 会 (来場歓迎)

10日(土) 奉 納 舞 狂 言 会 (有料)

11日(日) 朝 日 狂 言 会 (有料)

18日(日) 観 世 舞 狂 言 会 (有料)

20日(火) 狂 言 小 舞 の 会 (有料)

25日(日) 七 彩 会 (来場歓迎)

(8月)

7日(土) 名 古 屋 新 能 (熱田神宮能楽殿前) (有料)

8日(日) 青 島 陽 会 (有料)

21日(土) 野 村 四 郎 名 古 屋 公 演 会 (有料)

28日(土) 衣 斐 正 宜 後 援 会 (有料)

29日(日) 能 狂 言 の 世 界 (有料)

(演能変更の節はご了承下さい)

梅若盛義ころみの会

6月19日 東京・観世能楽堂

第七回梅若盛義ところみの会は六月十九日、東京・渋谷区松涛の観世能楽堂で催される。能「羽衣」(シテ梅若盛義、ワキ村瀬純、笛藤田次郎、小鼓鶴沢洋太郎、大鼓安福光雄、太鼓親世元則、後見岡田朗、地謡池内幸三郎ほか) 仕舞「藤戸」(梅若若行)、「大江山」(野村四郎) 狂言「伊文字」(シテ山本東次郎、太郎冠者山本則俊、主人山本泰太郎) 能「葵上」様之出、空之折、長懸(シテ梅若盛義、ソレ岡田晃一、ワキ宝生閑、間山本則俊、笛藤田大五郎、小鼓北村治、大鼓安福雄、太鼓金春忍右衛門、後見野村四郎、地謡梅若若行ほか。開演午後一時。

鶴舞座創立十周年記念 和泉元秀を観る会

第九回鶴舞座狂言発表会

五月二十九日(土)午後一時開演 熱田神宮能楽殿

宗 論 和泉元秀ほか

福の神 和泉元秀ほか

吉田俊彦師追善 謡と舞の会

五月三十日(日)午前九時半始

熱田神宮能楽殿

草紙洗 柴田 勲 河村真之介 鹿取 希世

天 鼓 足立 知子 河村真之介 鹿取 希世

船 弁 慶 長崎 邦子 河村真之介 鹿取 希世

安 宅 別所 和子 河村真之介 鹿取 希世

胡 蝶 杉浦八洲恵 河村真之介 鹿取 希世

舟 弁 慶 武田 隆二 河村真之介 鹿取 希世

西 王 母 岩田 幸子 河村真之介 鹿取 希世

小袖曾我 加賀山遊治 河村真之介 鹿取 希世

他に連吟、「豊願寺」「源氏供養」など十八番、仕舞十数番

〔御来聴歓迎〕 東海宝生流同好者有志 鬼頭嘉男

熱田まつり協賛 奉納能

六月五日(土)午後一時開演 熱田神宮能楽殿

巻 稲川 寿一 (宝生流) 高安 勝久 吉田 定男 後藤 嘉津幸 大野 龍夫

絹 戸田 和 松田 高義 三橋 茂三 中島 静男 鬼頭 嘉男 辰巳 正宜 藤 正司

後見 竹内 澄子 地謡 平子 通夫 稲美 夫 佐藤 正宜 藤 正司

仕 盛 和谷 衡市 地謡 長田 村 中村 正

仕 舞(観世流) 舞(喜多流) 舞(観世流) 今村 恵子 三村 美和 生駒 里子 瀬戸 三津子

東 北 広瀬 雅弘 鬼頭 英二 後藤 孝一郎 竹市 学

因幡 狂言(和泉流) 後見 井上松次郎

舞 舞子(金剛流) 吉田 定男 後藤 孝一郎 竹市 学

唐 船 吉川 周子 吉田 定男 後藤 孝一郎 竹市 学

羽 三村 恵子 (観世流) 地謡 小川 林 小川 忠三 小川 三

衣 杉江 元 鬼頭 英二 福井 啓次郎 池田 希世

後見 梅田 邦久 地謡 須賀 敏彦 高橋 一 高橋 一 高橋 一

〔御来聴歓迎〕 主催 能楽協会名古屋支部

五月雅日記

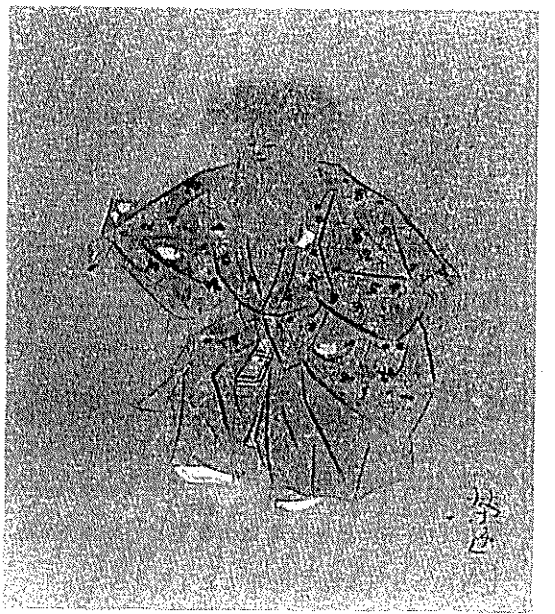
(140)

乱

えと文 二井栄逸

唐織重折り、赤頭、緋大口をつけ
て春を切る狸々はみかきぬかれた
橋がかりを静々と舞台にむかう。
降るような月光にけむる薄陽の
江のほとりを想像しながら私は能
の世界にひたる。
図は或る舞台で演ぜられた狸々
をかいてみたのであるが、其の時
の能は特殊の演技である乱の演出
であったので嬉しかった。

狸々は、長閑な海浜の幻想と詩
情がたどらうような能で、かいて
いても楽しい。
今年の秋は広島で個展をひらか
なければならぬことになった。
作品というものは、説明で納得
されるものではなく、見る人に語
りかけるような絵でなければなら
ない。
洗練され過ぎたり、時代感覚だ
くくことが素晴らしい。



ある年齢になって、それでしば
んでしまうことは悲しい。
「あらゆることに任せぬ理なり」と
風姿花信に残した世阿弥の言葉
に命あるかぎり。
(平成五、五、九記)

紅梅記

新万蔵生まる、
観世海外能と
道成寺、本一

四月末庭のつづしの紅が燃える
よう、やがてさつきの赤に移る。
野村万之丞氏が七世万蔵名をつ
ぐ(五・六)。家のため、和泉流、
広く狂言のため一層の充実を、め
でたし。なお六月は父上萬蔵氏の
祥月命日。

それはともかく日本では社寺で催
されてきたし、奈良春日社頭の翁
(春)はその代表であろう。狂言
の成果の内容が知りたい。
外国では数々の賞美、「死ぬほ
どつらい」(これは逸話がある)
狂言に心酔する芸術家もいる。し
かも能は古典の美上々、宗教性も
強い。現在ではその受容、感得探
究の道は永く続く。大道無門、入
り易く納みにくい。しかし種々
の鑑賞と理解の層が広がる。あわ
せて半世紀になろうとする海外演
能の充実と努力する方々の希望が
いよいよ膨むよう折りたい。

春の能メモ。
三月十三日道成寺をみる。シテ
金春流・本田光洋。名・能楽鑑賞
会。この会もようやく道成寺を上
演することになる。金春流の同曲
は終戦後八熱田Vで三回目。八熱
田V完成記念(名鑑賞能、能主
田鍋太郎八小鼓V、シテ松岡金
太郎八当時馬馬V)と昭和四十年
ごろの金春流三氏。後者ときは
金剛殿氏・泉嘉夫氏も前後して舞
う。因みに戦後金剛流は二回(か)
喜多流は一回。
全体大きく、この曲は終るまで
落ちつかぬが、今日は安心してみ

られる安定感がある。執心も激
闘(後)も十分。カタチもきれい。
執心も表にむくつけにあらわさず
それでいて迫力あふれ、古拙のよ
さを汲みとる。道成寺役者の殿氏
とはちがった道成寺の味で私に近
寄る。佳。小鼓は鶴沢運雄氏。
鐘吊りの山本東次郎氏は綱の環
を釣にかけたとき、エイトと気合
い(カケ声)をかけたようだ。
光洋氏は、今夏津島の薪能でも
今一度演ずるとき、野外の鐘の
設置・鐘吊り(共同社)は注意が
いるはず。かつて東京・日枝(山
王)神社のときは大きなクレイ
ンを用いたと語り(光洋・喜之)
また五月の大坂では四回(観世)
六月一回演進される。付、(熱田)
が完成し間もなく名・支部長の田
鍋氏に完成を記念して道成寺の連
演を進行した。それが先述のカタ
チとなった。当時(昭三十四)の
諸事情からであろう。戦後からそ
れまでは建て直った御座で金剛
流(名・大塚一二氏八故人V)の
同曲が舞われていた。昔語りを。
四月の観世会は知性派渡次郎氏
の気品の高い小唄と、近年若風に
しぶさびみ出される演能振りの梅
若六郎氏・隅田川(手方なし)。
これは演目によるか(善知鳥・隅

大槻秀夫三回忌追善能

名古屋公演

六月六日(日)正午始
熱田 神宮 能楽殿

仕舞	胡蝶	加藤 春枝
清	若キリ	黒田 博
大	若キリ	稲生 芳雄
江	今村 嘉男	地謡
山	今村 嘉男	地謡
鶴	今村 嘉男	地謡
童	今村 嘉男	地謡
近藤 幸江	吉田 定男	助川 竜夫
柳原富司忠	柳原富司忠	助川 竜夫
久保誠一郎	久保誠一郎	助川 竜夫
桑野 剛年	桑野 剛年	助川 竜夫
赤松 禎友	赤松 禎友	助川 竜夫
泉 雅一郎	泉 雅一郎	助川 竜夫
泉 信隆	泉 信隆	助川 竜夫
泉 嘉夫	泉 嘉夫	助川 竜夫

能朝

長 工藤 和哉 寛 敏一
殿田 謙吉 久田 舜一郎
鬼頭喜太郎 鹿取 希世

能卒都婆小町

大槻 文蔵 宝生 関
河村 総一郎 福井 啓次郎
藤田 六郎兵衛

能融

熊坂 家盛 吉井 順一
片山 慶次郎 地謡
梅若 万紀夫 地謡
多島 邦久 地謡

名古屋観世会定式能(三回)

六月十三日(日)十二時半開演

熱田 神宮 能楽殿

仕舞	楊貴妃	谷口 宗義
鞍馬天狗	今井 清隆	今井 清隆
宇高 寛成	宇高 寛成	今井 清隆
宇高 通成	宇高 通成	今井 清隆
宇高 通成	宇高 通成	今井 清隆
宇高 通成	宇高 通成	今井 清隆
宇高 通成	宇高 通成	今井 清隆
宇高 通成	宇高 通成	今井 清隆
宇高 通成	宇高 通成	今井 清隆
宇高 通成	宇高 通成	今井 清隆

舟渡

井上 松次郎 井上 靖浩
後見 佐藤 友彦

放

僧小歌 中川 雅章
浦田 保利 地謡
松山 幸親 久田 舜一郎

雨

大槻 文蔵 地謡
松山 幸親 久田 舜一郎

天

大槻 文蔵 地謡
松山 幸親 久田 舜一郎

萬

高安 勝久 柳原富司忠
鬼頭喜太郎 藤田 六郎兵衛

附祝言

主催名 古屋 観世 会
要員券 当日券 八千円(自由席)

第九回能を楽しむ会

六月十九日(土)午後二時始曲
熱田 神宮 能楽殿

狂言伯母ヶ酒

野村 信行 松田 高義
後見 井上 礼之助

能郡

後見 金剛 永謙 地謡
今井 清隆 今井 清隆

入場料

正面指定席 一万円、自由席 七千円
学生席 三千五百円
お問い合わせ 熱田神宮能楽殿
(電話)〇五二一六八二一七五二

四日目の五番目の能は「角田川」である。本来は、四番目物として演じられる「隅田川」を、五番目に持ってきたのは、六番目として「鶴岡」を配置しているからである。「鶴岡」は、切能物として、間置が後ジテとして登場するので、ふさわしい配置とは言えるが、それにしても、四日目の能組は、初番目、切能物とも書かれる「皇帝」、修羅能がなくて、二番目には、皇物の「井筒」、三番目には、切能物の「横風」、四番目は「放下僧」、五番目は、四番目物の「角田川」、六番目は、切能物の「鶴岡」と、切能物三番、四番目物二番、皇物一番の構成になっている。いかに、四番目物、五番目物が好まれていたのが、この番組からも推測される。

「角田川」は、ワキ役の渡守が重要な役割を演ずる能でもある。五日目の五番目の能は、「泉清」である。「泉清」は、四番目の能、人情物として分類されている。五番目に置かれていたのは、五日目の能組が、初番目、脇能「和布刈」、二番目には、修羅能がなくて、切能物の「松山鏡」が来ていて、ワキ役が重要な役割を演ずるので、特に選ばれたものと思われるが、四日目の修羅能がなく、六日目の修羅能が、二番目に配置されていない。六日目の能組で、修羅能があるのは、一日・二日・三日の三日間のみである。このことは、修羅能が、享保初年頃には、余り好かれなかったという風潮があったからであろうか。平和な江戸中期の享楽の雰囲気、背景にあるのかも知れない。

三番目は、四番目物の狂乱物「梅枝」、四番目は、切能物の「土蜘蛛」、五番目は、四番目物の「泉清」となっており、六番目が、切能物の「乱」である。六番目の能組のうち、初番目物脇能一番、切能物三番、四番目物二番の構成になっている。四日目の能組と、五日目も切能物、四番目物の多い能組になっている。六日目の五番目の能は、「融」である。

「融」は、切能物の早舞物として、五番目に位置するのは、妥当な配置であるが、六番目の祝言能が、どのような能であったか、不明である。

六日目の初番の能は、切能物の動物と言われる「春日龍神」、二番目が、四番目物の狂乱物「卒都婆小町」、三番目が、切能物に分類される「藤原朝臣」、四番目が、現在物「大仏供養」、五番目が、切能物「融」、六番目が「祝言能」となっている。切能物三番、四番目物二番の構成になっている。修羅能が、ここでも省かれていない。初日から三日まで修羅能が演じられ、四日目の六日目は、演じられていないということである。この点については、すでに指摘しているが、その代わりに、四番目物・切能物が増えている。こうした傾向が、修羅能が入っている初日から三日目まで見える。その日、初日の能組は、翁舞と、祝言

尾張藩の能の歴史(二三四)

辻 宏

能を入れると八番、最終日の六日目は通常の能五番と、祝言能一番の六番によって構成されている。次に、狂言の曲名についてふれることにする。

最初の初日の日には、「三本柱」「粟田口」「棒しばり」「どん太郎」「米市」の五番が演じられている。

「三本柱」は、登場人物の多い三人の冠者が演ずる、果報物の脇狂言である。「粟田口」は、大名物と称される、脇狂言または二番目狂言である。「棒しばり」は、太郎冠者物として、二番目狂言として用いられることが、普通のようにあるが、「三本柱」に用いる例も多い。

「どん太郎」は、女物と称している分類の中に入るもので、番組順では、二・三番目に位置する。狂言が五番演じられているので、四番目に組み入れられたのであろう。「米市」は、雑狂言に分類され、止狂言に配されている。

内容的に見ると、「三本柱」は昔話という趣向であることから、舞台披露の際に演じられることが多いと言われる。(「岩波講座能・狂言」狂言鑑賞案内)

勸進能の最初の狂言としては最もふさわしい狂言の一つである。次に、二日目の狂言について、見ることにする。

二日目は、「短子屋沙門」「花子」「千鳥」「ぶあく」「千切木」の順で、五番である。

「短子屋沙門」は、脇狂言で神物として分類されている。「花子」は、女物として分類され、二番目に演じられる。「釣狐」を演じた後に、修業の最終課題の曲として披露し、極めて重い習いの曲とされている。和泉流宗家山陽和泉が、勸進元となっているので、和泉が演じている。山陽元宜和泉流宗家七世が、寛永八年(一六三一)「花子」を演じて、和泉守を受領号として受け、以後和泉を通称するようになった。名譽の曲でもあ

天王宗、天王川船祭とも言われているようである。船に数百の提灯を飾った、提灯舟の美しさで有名である。狂言鑑賞(百六十五頁)に記されている。尾張の國との関係で、選ばれた狂言でもあろう。

「ぶあく」は、雑狂言物に分類され、二・三番目に、演じられるのが、普通である。しかし、この勸進能では、四番目に置かれている。冠者の「いたすまじきは官仕八」と嘆くセリフは、今日のサラリーマンの気持とも通じるところがある。妙に人生の哀感をさそうところである。

最後の五番目に演じられるのが「千切木」である。「千切木」は女物に分類され、止狂言として演じられている。

三日目は、「才宝」「入間川」「悪坊」「朝比奈」「三人不仁」の順で、五番である。

「才宝」は、雑狂言物で、二番目に演じられる曲となっているが、この勸進能興行の三日目には、初番目、脇狂言として演じられている。この曲は、長寿の祖父に、孫たちが名を付けてもらうというめでたい内容であることから、大蔵流では、脇狂言に分類されている。現行の和泉流とは違うようである。しかし、享保二年の和泉流で、この勸進能の例から推測すると、脇狂言としても演じられているように思われる。(続く)

主なる参考文獻「狂言鑑賞」(「岩波講座能・狂言」狂言鑑賞案内)「筆者は岐阜市立女子短大教授」

平成5年5月・6月放送予定

【5月】NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

23日(日) 観世流「景清」浦田保利

30日(日) 和泉流「狂言」「悪太郎」野村万之丞
大蔵流「米市」善竹孝夫

【6月】NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

6日(日) 観世流「郡」生田敦盛 坂井音重

13日(日) 宝生流「氷室」夜討替我 佐野 萌

20日(日) 金春流「善知鳥」桜馬 辰之

27日(日) 観世流「鶴」山本勝一 松浦信一郎
「小袖替我」十郎・山本勝一
五郎・山本眞賀
母・山本博通

第卅七期・第二回 名古屋宝生会定式能

六月二十日(日) 午後一時始

熱田 神宮 能楽殿

玉井 博祐
佐藤 耕司

能 青 刈 杉江 元 河村真之介 大野 誠
間 佐藤 友彦 後藤嘉津幸

仕舞 是 界 廣島 克栄 石塚 智幸 福川 寿一
杜 若 衣 正 伊藤 温通 馬場 富夫
駒ノ 段 馬場 正宜 地謡 衣 正 竹内 正一
倉本 雅 鬼頭 嘉男

能 楊 貴 妃 飯富 雅介 吉田 定男 柳原 富司志 鹿取 希世

観能随想

梅若六郎の「隅田川」

名古屋観世会(四月十一日、熱田神宮能楽殿)での梅若六郎の「隅田川」は、シテ梅若丸の母を象徴性の高いものに造型していた。それだからだろうか、子方なしの「隅田川」であった。

シテは「松」で「げにや人の親の心は間にあらねども……」の登場歌をうたい、舞台にはいつて翔を舞い、かどわかされた一人子を求めて都から隅田川畔まで来た。主なる参考文獻「狂言鑑賞」(「岩波講座能・狂言」狂言鑑賞案内)「筆者は岐阜市立女子短大教授」

直面してはおるのである。シテの動作は、取り除けるものはすべて取り除いたすえでの密度の濃い動きである。

子方が出ないので夜念仏の場の子方の語はなくなる。シテの「今一宵こそ聞かまほしけれ、南無阿弥陀仏」のあの語は、子方との掛合なので省かれ、「互に手に手を取り交はせば」の語で、子方の幻影をみたシテは、立ってその姿を追いかけようとして右手を前にあげ、つと脇座の方へ出てきた。

幻影が消えたのであろう、茫然としたようにしばし静止し、この間で母親の心のうちを現して「いよいよ思ひは真澄」と、重く時間をかけて向きを変え、常座へ向かいシテ柱のあたりでうずくまるように膝をつく。再びみえた幻影も消えた絶望の極みである。

シテは重い心を重い足取りで現して、ゆっくりとした歩みで橋掛りを登る。シテは、終曲になったが、能では、シテはその能のテーマをからだ全体で表現していくのだと、しみじみ思う。ワキについて、このシテに抵抗するためには更に精進が望まれると思うし、地謡についても象徴性の高い能であっただけに、力の十分でない声のままに全体として弱かったのは残念である。観能後、しばらく充実感にひたることができたのは、ひとえにシテの見事さのためである。(鶴田都弥子)

井上松次郎

後見 宝生 英照 地謡 安江 良郎 辰巳満次郎
衣 正 正宜 福田 正代 馬場 富夫
山内 崇生 寺部 一威 鬼頭 嘉男

松浦 一徳 井上礼之助 佐藤 友彦

白頭 杉江 元 後藤 耕一 鬼頭 嘉男
辻本 正樹 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛

高安 勝久 筑 鉦一
井上 祐一 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛

大野 弘之 竹内 淳一 辰巳満次郎
竹内 良伯 辰巳 孝
平子 稻美 佐藤 耕司

主権名 古 屋 宝 生 会
臨時委員券 五千円 事務所 名古屋市中区川本町二ノ五一
学生会員券 二千円 鬼頭嘉男方電話七六一・四九三五

能と狂言の世界

六月二十六日(土) 午前十一時開演

熱田 神宮 能楽殿

解説「天鼓」について 観世流能楽師 久田 徹二

和泉流狂言長 光 スッパ 野村 信行 田舎者 松田 高義
後見 野村 又三郎

観世流天鼓 久田 徹二 鬼頭 英二 助川 竜夫
間 弄鼓 野村 又三郎 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛

後見 前野 郁子 地謡 今村 嘉男 祖父 江 修一
小島 一英 加賀 敏 梅田 雅章
清沢 一政 古橋 正邦

解説「清経」について 宝生流能楽師 衣 斐 正 宣

和泉流 縛 太郎冠者 松田 高義 主 井上礼之助
狂言 次郎冠者 野村 信行
後見 野村 又三郎

竹内 澄子 河村 総一郎 竹市 学
衣 正 雅介 柳原 富司志 竹内 学
後見 戸田 博和 地謡 久野 勝三 辰巳 孝
玉井 博祐 稲川 耕司 馬場 富夫
稲川 寿一 鬼頭 嘉男

主催 能楽協会名古屋支部
後援 愛知県・愛知県教育委員会
名古屋市・名古屋教育委員会
前売一回券二千円、四枚綴七千円、当日券二千五百円、学生券千円
取扱い 市内各ブレイク・チケットぴあ
熱田神宮能楽殿(六八二一七五) 出演者名

彌生・卯月の舞台から

「梅猶会」第15回邦謡会能

竹尾邦太郎

現はまさに奥床しきの対極。舞台に戻り沈むこと二度、摘み摘み舞えて右邊手に持ち替るとスミで扇開いて持ち直し、クリ・サシ・クセ全部を抜いて、一樹の蔭や一河の水、となつた。ツレはただ儼然と床几に掛かり、それが群鳥なにか果敢なのか、遂に相舞することなく、だからこそ、その時重舞興に乗じ、と床几を下り、かきこらんとシテの好意に報いる気分がよよく出て味な演出だった。ハ、峯の松風、と両者共に薄く上を見返す訳にもゆかず、初間でシテは舞台に入る。面若女・横白二・白拍子・赤地唐織は几帳に秋草文様のシテは、やや外輪の運に東女ぶりを、クモリがの面にしおらしさをみせる。出家の願ひ叶わず、南都焼打の報いを受けるツレの述懐もシテとの掛合に瀾りに瀾り、地(朗詠・光之助)の強調が更に輪をかけていった按配である。酒宴のさつかけを待って、たかにワキがタイミングよく割って入り、酒肴にシテは地の、ハ朗詠してそ奏でける、とイロエ舞の舞(舞曲ノ舞)を舞う。舞曲とは漢族から蛮夷(はんに・未開人)の國と見なされた楚國の都、郢の卑しい音楽。とすれば、当時鎌倉は京から見て東の夷(えびす・田舎人)の都。その音楽は洗練されてはいない卑俗なもの、しかし情熱的なものであったらう。舞の途中、シテは一ノ松に抜けると句欄に寄り、ツレを見込んで摘み摘み扇を、シオリつつ背を向けて下居する。感嘆のその濃厚な情愛の表現、兩者めでたくびたりとトノ

た。ワキ元、地は善萬、和男ら。唯子と希世・富司忠・繪一郎・龍夫、主後見は盛盛。(40分・3月28日・梅猶会)

「拍子・思出ノ舞」悲報を賣さねばならぬ心痛のワキ和哉と対面し、その様子に胸騒ぎしつつ夫の死と子の遺世という現実に直面するシテ邦久の悲嘆は、ただの愁嘆場になるどころ、氣を張った離りした問答で踏み留まり、内面の哀しみを一入深める。更に、面上上げ得ないワキを促し、詳細をハせては聞いて慰まん、語調も深長。ハ書いたる文の怒めしや、と面を眼をやり、再びその眼を文に落すと静かに畳み、中入地(九郎右衛門・殊夫・清司)ハなどや生きている、と休めらしワキを見込み、ハ母に姿を見えんと、で床几を立って下居、ハ思ふ心の無かるらん、と一時(いつとき)激憤に駆られて文で床を打つと心で、後の狂を暗示する。ハ折るぞ、の合掌に込み上げる悲しみは、返しシオリながら背を向ける中入の情も上々。

後、幕放して直ぐ、すたすたといった感じに一ノ松に出るの童、童を追い掛ける、ハ何を笑ふぞ、と興奮する伏線となり、更に童と童子の面影が重なって狂乱のカゲリとなることも旨い。また、如來堂で拾ったワキツレ侍僧・松男を指して「よし人々は何も言へ、ハ一途に弥陀を待たせとぞ、教拍子踏むのは不退転の意志を鼓舞するものである。

物着に烏帽子・長相を着ると、亡夫の想い出ふつと湧き上る腹は、ハ胸おつき取り鳴るは流の水と所謂思出ノ舞となる。舞の終りには、一ノ松に抜けてシオリ流るなさは、ワキを省き、ハつらつら世間の幻相を覗き、となるのが利く。クセは、ハ三界に流転して、と舞台に入り、スミから大きく廻って正中、ハ罪障の山高く、と二三歩出ると、ハ生死の海深しと右手を下を指して見たのが象徴的。母子再会は、マネキ扇で子方(清水運太郎)に進み、肩に手をやり、更に廻り込んで抱き締めると、ハ愛情表現が濃厚だった。子方は表に端正で立派、舞台効果を大いに上げた。唯子は六郎兵衛・博明・崇志、後見を欣司・和重。(1時間44分)

「佐渡狐」奏者・万之丞、佐渡ノ百姓、耕介、越後ノ百姓、良介。余所見の振りが全神を軸の下に集中している万之丞の操ったその相好が秀逸なら、狐は居るまい、と客を付けられ、愛郷心から非常手段に出る耕介も惜めない。とすれば、良介は損な役回り、と考えさせるところに親子醜演の爽大い上がった。(30分)

「發生石・白頭」シテ鉄之丞。能が外連(けれん)を排するとすれば、これはそのぎりぎりの線か、奔放と思わされて面白く見せる演出も計算済みといった一番は、先ず作物を出す。鬼女唄に面汚顔の妖気が初阿(邦久・雅夫)ハ一ノ松の面道に早くも現われ、舞台に入つて、ハ狐蘭菊の花に裾れ横む、と薄く面道すれば寂寥感も一入。屈膝から、ハ昼は浅間、と居立ち、中入地、ハ立ち捕り、と立って返し背を見せ、ハ傲悔の姿、とワキ閑に向くと、ハ夕陽の夜の空なれど、と目付柱の方を面道し、ハこの夜は、と袖口つまみワキに指し、ハ我が影、と半身に透むかかの様子を見せ小廻り二度、作物に入るのが氣を惹く。アイは史高、ワキに「小賢しくも語らぬの哉」と言わせる明快ノットにワキの、ハ急々に去れ去れ、ハ叫ぶ程の強さ、ハ二つに割れば、と姿を現わしたシテは面メテラ(一九七五年「冥の会」初演のセネカ作「メテラ」のため、寿夫が谷口明子に打たせた創作面と思われ)。白頭・丸尾に模した銀付短袴・鱗・萌黄半切の赤舞衣(火焰大鼓三隣文様)並折の異様は金剛流の「女性」を意織するか。橋懸を効果的に用い、ハ両介は狩裝束にて、の地の後にカケリ様のももの入れ、三ノ松で左右袖を返し下居すると顔を振り、一ノ松に戻ると左足勾欄に掛けて両袖を張る獅子の型、舞台に入れば、ハ射伏せられて、と組落ス、など目も鮮やかな存分の働キ。キリは三ノ松、きりきりきりとし廻りして下居すると左袖で面を隠し、立つと幕に入ると地と唯子でトメた。目まぐるしくも技の牙えを堪能した舞台だった。(1時間8分・4月3日・第15回邦謡会・園立能楽堂)

「小塩」シテ慶次郎。折から春爛漫、旬の興に桜立木も華やぐ。大ぶりの面刺身を肩に集茶無地製斗目・靑色水衣の配色も映く、桜の一枝担いで飄然と往くとこ、風舞自ずから身に添ひ、慶次郎の資性である。されば、花見の群衆に目立つシテの魅力は、ワキ宗二朗を惹きつけ、花と歌を介しての應對に互いの心を許してゆく廻り説得力をもつ。中入地(九郎右衛門・邦久)ハ、よるはひきぞらひ、桜立木に寄り、ハ廻る盃、と退ると、酔眼に天を見上げ、大小前ワキに背を見せて眉懸しに桜の枝を捨て、橋懸に消える余情えも言われない。

後シテは一ノ松斜めに据えた花付物見軍に入る。白指貫に赤軍狩衣姿も麗しく、初冠には桜花挿頭の粹である。「何事ぞ花見人の長刀」は去来の句。時代を遡っても花に刀は野暮、太刀を佩かない見識が後場の優美な雰囲気や、増し、ハ今はさながら花も雪も、と通か桜立木を見込み、ハみな白雲の上人の桜、と後向きに花見軍を出ると、するすると舞台に入ってくるのは絵を見るようである。クセ舞に続く序ノ舞の淡麗な味わいは、瀟洒な貴公子のもの、そのもどった。(1時間48分)

「呂運」妻・友恋に無断で情志願の宿主・弘之、シテ旅僧・礼之助に別髪をせがむ。礼之助は探め事を危惧するが、「この女という者は殊の外悪烈な者でござる」の言葉に意を強くし、捨鉢な気分になる廻りは実感。挙句はわわしい妻に留服する弘之の、責任転嫁の無節操。髪を元に戻せと言われども、生える迄は手の打ちようもない、と馬鹿なことに拘わつたことを一蹴する礼之助の破顔一笑が痛快。僧名を付けるところが曲名の由来だが、その前後が面白い。「隅田川」シテ六郎。珍しい方方無し。「為てみて善に就くべし」とは言い、一時間以上塚で幸抱出来る子方が居ればのこと途中で切戸から出す位ならむしう子方無しの方がベターか。シテは一ノ松に出ると、唯子に頼ませずサシを謳う。何か切迫したような

「梅猶会」第15回邦謡会能

「高砂」シテ惠美子、ワキの因か釋放しから緊張気味。ツレは久との連吟を少々窮屈に聞いたがワキ雅介との問答、地(生香・修一)との掛合には調子が異なり伸びやか。しかし、屈膝の後、ハ眺かけて、と立ち上り、落葉を掻くところには勢ぞした調子が見えなかつた。アイ補人は友恋、半出立に小サ刀。屈膝りに相生の松の縁起を語って爽やか。追風が吹出て乗船を勧めるアイに「心得得る」と応ずるワキの間(ま)がよい。後シテは走り出て一ノ松、サシに力強さが欲しいが、神舞は些事に拘泥しない勢いがあり大きい。(1時間16分)

「驚」シテ松次郎、出立は二月の宝生会間断、アトは祐一で親子齣演、前回に比べシテは頑迷さよりも愚直一途の印象だった。それだけに、「初春の太刀も刀も驚も、取らでぞ捕る元の撲家」のキリの一首にベロソの色が濃いの。(27分)

「一手・野曲ノ舞」ツレ重衛・昇一。燃炭黄・白練・紫指貫込大口・掛糸。左手に水晶の数珠を持ち床几に掛かると、ワキ宗茂・勝久も登場場なく出て常座で各宜る。「今日は雨中に候座に」と

「巻箱」キリ(山口謙造)「小鏡治」クセ(金原典子)

「松風」キリ

「通小町」(岩田加代)「玉之段」(不破隆子)

「不破隆子」

「水越越生」(船弁慶)「前」(鬼頭みゆき)「班女」(服部玲子)

「三井寺」(舞唯子)「善老」(舞唯子)「一巴」

「経正」クセ(深谷和子)

「雲林院」キリ(橋原昌男)「蟬丸」(道行)伊藤綾子)

「芦刈」(笠ノ段)

「兼平」キリ(神谷直市)

「春」(小林美和子)「融子」(放下僧)「小林美和子」

「巻箱」キリ(山口謙造)「小鏡治」クセ(金原典子)

「通小町」(岩田加代)「玉之段」(不破隆子)

「不破隆子」

「水越越生」(船弁慶)「前」(鬼頭みゆき)「班女」(服部玲子)

「三井寺」(舞唯子)「善老」(舞唯子)「一巴」

「経正」クセ(深谷和子)

「雲林院」キリ(橋原昌男)「蟬丸」(道行)伊藤綾子)

「芦刈」(笠ノ段)

「兼平」キリ(神谷直市)

「巻箱」キリ(山口謙造)「小鏡治」クセ(金原典子)

「通小町」(岩田加代)「玉之段」(不破隆子)

「不破隆子」

「水越越生」(船弁慶)「前」(鬼頭みゆき)「班女」(服部玲子)

「三井寺」(舞唯子)「善老」(舞唯子)「一巴」

「経正」クセ(深谷和子)

「雲林院」キリ(橋原昌男)「蟬丸」(道行)伊藤綾子)

「芦刈」(笠ノ段)

「兼平」キリ(神谷直市)

「巻箱」キリ(山口謙造)「小鏡治」クセ(金原典子)

「通小町」(岩田加代)「玉之段」(不破隆子)

「不破隆子」

「水越越生」(船弁慶)「前」(鬼頭みゆき)「班女」(服部玲子)

「三井寺」(舞唯子)「善老」(舞唯子)「一巴」

「経正」クセ(深谷和子)

「雲林院」キリ(橋原昌男)「蟬丸」(道行)伊藤綾子)

「芦刈」(笠ノ段)

「兼平」キリ(神谷直市)

「巻箱」キリ(山口謙造)「小鏡治」クセ(金原典子)

「通小町」(岩田加代)「玉之段」(不破隆子)

「不破隆子」

「水越越生」(船弁慶)「前」(鬼頭みゆき)「班女」(服部玲子)

「三井寺」(舞唯子)「善老」(舞唯子)「一巴」

「経正」クセ(深谷和子)

「雲林院」キリ(橋原昌男)「蟬丸」(道行)伊藤綾子)

「芦刈」(笠ノ段)

「兼平」キリ(神谷直市)

也留舞会 合同大会

六月二十七日(日) 正午始

熱田 神宮 能楽殿

番 組

栗田口 大 名徳田 文三 太郎冠者 奥津健太郎 スッパ松田 高義

不見不聞 太郎冠者 櫻井 晴子 市野村 信行

美胡 蝶半クセ シア 平山みよ子 ワキ 柴田 鏡子

案阿 弥 楽阿弥 三宅 千生 所の者 山田 良子

末広がり 果報者 庄司 武 太郎冠者 野口 隆行

清 水 太郎冠者 加藤志津子 主 奥津健太郎

田 村 林 柚加子

富士太鼓 三宅 千生

網之段 田中 芳子

飛 越 新筑意 山田 良子 何 某松田 高義

素融 シテ 田中 芳子 ワキ 林 柚加子

舟 船 太郎冠者 村井 せき 主 野村 信行

千 鳥 太郎冠者 宮田由布子 主 櫻井 晴子

(午後四時半頃終演予定)

主 権 也 留 舞 会

指 導 野 野 村 又 信 三 郎 広

の狂女たる所以か...。ハ思へば限りなく、の一ノ松勾欄から遠くを眺める心細さが、ワキ勝久に乘船を許して笹を強く打ち、捨てるところによく表わされる。

船中は、「故郷を尋ねて候へば」の廻り、動悸が右手に伝わり出しで微かに震え、「事終つて候」と初めてシオリと、そのままだ硬直してしまうかの冷たい冷とした情緒に沈んでゆく所、六郎力量をみせ、家の前は、子方無しで切地前、ハあれは我が子か、ハ母にてましますかと、と呼び交わす場面を抜くので、哀愁感欠ける。切

戸の中から子方の声を聞かせる便法は考えられないだろうか。キリは幻を見て、ハ見えつ隠れつ、とシテ往へ行き、下居して捕まえる型があり、(東雲の空も、と茫然と常座で左上を見ると、ハ跡絶えて、と一足退き、ハ我が子と見えしは、で体を廻して姿を凝視する、と、ただ標ばかりの塚に寄り、両手に抱きしめると少しずつ沈み、ハ哀れなりけれ、と右手は塚に置き、左手でシオリと、シオリながら返しに立つと退つてトメた。ただただ沈痛としか言えない。た。4月11日・觀世会)

観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291) 2488-9 振替東京3-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231) 1990 振替京都1-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

一 部 90円

各地で新能

水上舞台で「道成寺」

8月1日 津島新能第10回記念

津島で行われる「天王新能」は、ことし第十回記念として大曲「道成寺」(シテ本田光洋師)が上演される。
日時は八月一日(日) 天王川公園水上特設舞台。
新能で「道成寺」の上演はきわめて珍しく、とくに今回の天王新能は水上に舞台が設けられる特別演出、金春流による異例の公演。
当日は午後四時半から地元同好会による連吟、独吟、独調、独鼓

狂言一流異色の共演

7月20日 袴狂言と小舞の会

狂言協賛会では、大藏流、和泉流の両流狂言師の共演による初めての試みとして、七月二十日(火)熱田神宮能楽殿で「袴狂言」と小舞の会」を開催する。
狂言は「末広」は、井上松次郎、山本東次郎、茂山千五郎、「千切木」は茂山忠三郎、野村又三郎、野村万蔵、野村万作、茂山千之丞、はじめ「大黒」大藏流右衛門、狂言小唄「狐塚」茂山正義、茂山真吾はじめ小舞十数番の上演。
入場料一階自由席四千元、二階自由席二千元。(番組②面)

岩倉新能

7月24日 お祭り広場で
岩倉新能は七月二十四日(土)午後六時半から岩倉市お祭り広場で上演。
能「葵上」梓之出(梅田邦久)入場料(入場券は岩倉市公民館で先着順配付)問い合わせ岩倉市教育委員会(電05871661-2444)

長良川新能

7月30日 長良川河川敷舞台
長良川新能は七月三十日(金)午後六時半から長良川河川敷特設会場上演。昨年は一万二千人の観客動員で大きな話題をよぶ岐阜市主催の新能。要整理券。
演能は、舞囃子「頼政」(梅田邦久)仕舞「班女」(小島一英)ほか。狂言「末広がり」(和泉淳子)能「一角仙人」(シテ観世栄夫、ツレ岡田清久、片山清司、奥善助、フキ高安勝久、笛藤田六郎兵衛、小鼓後藤孝一郎、大鼓河村総一郎、太鼓鬼頭喜太郎、地謡梅田邦久、小野明、橋本瑞道、山川雅章ほか)問い合わせ岐阜青年会議所(電05821641809)

岡崎城新能

8月3日 二の丸能楽堂
岡崎では、例年たつき新能が行われてきているが、ことしは、盛泉会主催で、八月三日(火)岡崎城二の丸能楽堂で「岡崎城新能」が開催される。午後六時半開演。
演能は、舞囃子「安宅」狂言「袴」能「葵上」(シテ泉嘉次)入場料三千五百円。(番組②面)

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

[6月]	20日(日) 室生会定式能 (有料)	26日(土) 能と狂言の世界 (有料)	27日(日) 狂言世留舞会 (来場歓迎)					
[7月]	4日(日) 名古屋観世九皇会能 (有料)(番組①面)	9日(金) 社会教育合同ゆかた会 (来場歓迎)	10日(土) 幸 踊 狂言会 (有料)(番組①面)	11日(日) 朝日狂言会 (有料)(番組①面)	18日(日) 観世楽謡会 (有料)(番組②面)	20日(火) 狂言と小舞の会 (有料)(番組②面)	25日(日) 七 彩 会 (来場歓迎)(番組②面)	
[8月]	7日(土) 名古屋新能(熱田神宮能楽殿前) (有料)	8日(日) 青 陽 会 (有料)	21日(土) 野村四郎名古屋公演 (有料)	28日(土) 衣斐正宜会 (有料)	29日(日) 能と狂言の世界 (有料)			
[9月]	5日(日) 大 衆 能 (有料)	12日(日) 観世会定式能 (有料)	15日(祝) 長生会 (来場歓迎)	18日(土) 九皇会定例能 (有料)	19日(日) 皇生会定式能 (有料)	23日(祝) 鳳 鳴 会 大 会 (来場歓迎)	25日(土) 中日文化センター発表会 (来場歓迎)	26日(日) 和 泉 会 (来場歓迎)
[10月]	3日(日) 皇 樂 会 大 会 (来場歓迎)	9日(土) 久田徹二能リサイタル (有料)	10日(日) 武 田 謡 楽 会 (来場歓迎)					

(演能変更の節はご了承下さい)

名古屋観世九皇会定期能(三回目)

七月四日(日) 午前十一時始
熱田神宮能楽殿

後ツレ 鈴木 啓吾	前ツレ 奥川 恒治	シテ 観世 喜正
能 賀 茂	飯富 雅介	杉江 元
後見 佐々木 助郎	地謡 高木 美智子	古川 充
後見 観世 喜之	加藤 保彦	中山 宜夫
越 野村 信行	河村 真之介	後藤 嘉津幸
女 郎 花	五木 田三郎	青木 武弘
芭 蕉	観世 喜之	小林 武久
雨ノ段	駒 直也	五木 田三郎
子方 秋山 直仁	高橋 啓一	五木 田三郎

三井寺

飯富 雅介
辻本 正樹
井上 礼之助
松田 高敏

後見 観世 喜正	地謡 高木 美智子	古川 充
後見 五木 田三郎	加藤 保彦	中山 宜夫
附 祝 言	後藤 嘉津幸	藤田 六郎兵衛

幸 謡 会

七月十日(土) 午後一時始
熱田神宮能楽殿

高 砂	加藤 春枝	三 村 恵子
松 屋 鳥	熊沢 恵美子	近 今 沢 美和
風 高木 美智子	地謡 高木 美智子	高木 美智子
自然居士 大槻 文蔵	後藤 孝一郎	吉田 定男
鹿 取 希世	武 松 康友	赤 野 剛徳

放 下 僧小歌 今沢 美和	班 女アト 生駒 里翠	春日 龍神 三村 恵子
天 鼓 泉 嘉夫	後藤 孝一郎	吉田 定男
後見 泉 嘉夫	地謡 高木 美智子	高木 美智子
後見 泉 嘉夫	地謡 高木 美智子	高木 美智子

後見 泉 嘉夫	地謡 高木 美智子	古川 充
後見 泉 嘉夫	加藤 保彦	中山 宜夫
附 祝 言	後藤 嘉津幸	藤田 六郎兵衛

第35回朝日狂言会

七月十一日(日) 午後二時始
熱田神宮能楽殿

狂言 組	井上 靖浩	井上 祐一
舟 渡 舞	井上 靖浩	井上 祐一
昆 布 売	大 名 和 泉 元 秀	昆 布 売 和 泉 元 弥
悪 坊	坊 善 竹 幸 四 郎	出 家 安 東 伸 元
主 催 幸 四 郎	主 善 竹 忠 重	後見 山口 耕 道

主 催 幸 四 郎	主 善 竹 忠 重	後見 山口 耕 道
主 催 幸 四 郎	主 善 竹 忠 重	後見 山口 耕 道
主 催 幸 四 郎	主 善 竹 忠 重	後見 山口 耕 道

入場料 指定席四千元、自由席三千元、附席二千元
取扱所 出演楽師宅、熱田神宮能楽殿、朝日新聞企画部
松坂屋、三越、各鉄各ブレイガイド
事務所 名古屋市中区橋下町一丁目七十五 井上 方
TEL 052(321)1430

五月雅日記

(14)

夏めく五月

えと文 二井栄逸

初夏、一年中で一番爽やかな季節です。忙しい日々を送っていても、窓の外に季節の顔は、走馬燈のようにすばやく通り過ぎてゆくようです。

夏めく五月。奈良興福寺の新能は、興福寺般若の芝で行われます。京都では葵祭が王朝の絵巻きをひろげます。

「賀茂の祭の車争い、主は誰とも白濁の、所狭(せ)くまで立て並ぶる物見車の様々に……」

新能つづき

8月7日 岐阜市・大和町で岐阜県上郡大和町の明建神社の「七日祭」にちなむ新能。八月七日(土)午後五時半始。能「くす桜」は昭和六十三年復曲された。

観世宗家—幽玄の華

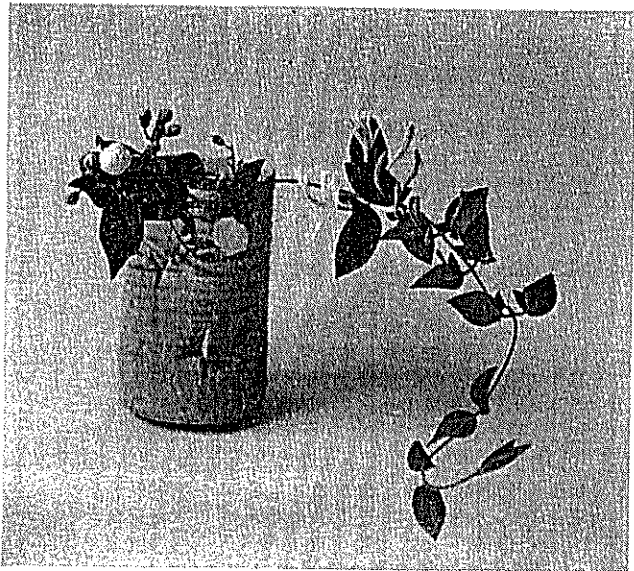
岐阜歴史博物館で開催

親世文庫設立記念「観世宗家—幽玄の華」特別展が六月四日から七月四日まで岐阜市歴史博物館(岐阜市大宮町三丁目・岐阜公園内)で開催されている。

出展は「重要文化財・重要美術品の能面」「將軍家拝領の能装束」「世阿弥自筆の能楽論書」など名品約百四十点で充実したコレクションを鑑賞できると大きな話題をよんでいる。観覧料七百円。小・中学生三百円。

主催・観世宗家、親世文庫、岐阜市歴史博物館、朝日新聞社。

大垣で能狂言鑑賞会
大垣スイトピアセンター
大垣では、昨年から古典芸能鑑賞会(松井永二会長)主催で「能狂言鑑賞会」が催されているが、今回は六月十九日、大垣市スイトピアセンター・文化ホールで開催。能「班女」、(シテ観世清和)狂言「源徳落」(炭山千之丞)舞踊「須磨源氏」(中川雅章)仕舞「道明寺」(浦田保利)「鉄輪」(武田志保)を上演。



五月から初夏(ちゆうか)にかけて、野山や沢辺には、美しい花々が人々を魅了します。大山連華、つせん、すいかずら、梅花うつき、あじさい等、日

邦楽指導研究会

東京芸大同声会
社団法人東京芸術大学音楽学部同声会(酒井弘会長)は、音楽振興のため毎年春期に芸大より推薦された新卒生演奏会、夏期に邦楽指導研究会を行っているが、このうち夏期の邦楽指導研究会は、小・中・高校で邦楽を指導されている先生をはじめ一般の方を対象に実施している。

「催花賞」受賞

前西芳雄氏を祝う会

京都能楽養成会専務理事、前西芳雄氏は、既報のように服部記念法政大学能楽振興基金事業として能楽関係者を顕彰する「催花賞」を受賞されたが、この受賞を祝う会が五月十七日午後五時半から京都駅前・新都ホテルで催され、二百人を越える各界の出席者で氏の業績と功労をたたえ、受賞を祝賀した。

夏の素謡会

七月十八日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

皇太子殿下御成婚
奉祝「青葉寿」 名古屋観世会会員一同

屋島
正キリ 瀬戸三津子
高木美智子
近藤 幸江
龍沢恵美子

三井寺
梅田 邦久
祖父江修一
中川 雅章
野村 清和

山姥
高橋 政一
中川 雅章
清沢 一政
梅若 六郎

狂言末
大蔵弥右衛門
後見 井上祐一

狂言協議会特別公演

七月二十日(火)午後二時始
熱田神宮能楽殿
狂言末 大蔵弥右衛門
後見 井上祐一

平成5年6月・7月放送予定

〔6月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
20日(日)金春流「善知鳥」桜馬 辰之
27日(日)観世流「鶴」山本勝一 松浦信一郎
「小袖曾我」十郎・山本眞賀
母・山本博通
〔7月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
4日(日)観世流「通盛」角 寛次朗
11日(日)宝生流「富士太鼓」石橋 宝生
18日(日)観世流「賀茂」山本 順之雄
25日(日)金剛流「唐船」玉 葛 穂田
〔教育テレビ〕「芸能花舞台」7月24日(金)
午後9時より
奈良興福寺の新能「千手」観世鎖之丞
日本の伝統芸能・能狂言鑑賞入門(四)
教育テレビ午後10時 解説 増田 正造
7月2日(金)金春流「高砂」金 春 信高
7月9日(金)喜多流「八島」栗谷 清和
7月16日(金)観世流「熊野」観世 三郎
7月23日(金)宝生流「大江」山 渡 三郎
7月30日(金)大蔵流狂言「千切木」茂山 千五郎

附祝言
入場料 一階自由席四千円、二階自由席二千円
チケットが(〇五二一三二〇一九九九)
市内各プレイガイド、熱田神宮能楽殿
TEL(〇五二一六八二一七五)

狂言千切木

太郎 茂山忠三郎
立 野村 信行
立 野村 信行
当 野村 信行
大蔵 弥右衛門
大蔵 吉次郎
大蔵 吉次郎

小舞 土車
雪 山
貝 尽
蛸 日下部礼蔵
海道下り 佐藤 友彦
宇治の晒 井上 祐一
海 井上 祐一
字治の晒 井上 祐一
狐 塚 茂山 正義
道明寺 善竹 忠重
京童 茂山 千之丞
鮎川 善竹 十郎
名取川 三宅 右近
海人 野村 万作
放下僧 善竹 幸四郎
七ツに成子 善竹 幸五郎
景清 山本 則直

大鼓の筑師一師から名古屋と金春についての原稿の依頼があり、安請け合したとたん辻宏一先生の詳細な研究が連載されることばかりで、さて書こうと思つた、実は何も知らなかつたということに気がついて困つていて、その史料の中から、二目三目を紹介させていただきます。

辻宏一先生の連載にもありますように、尾州の能は金春八左衛門家をたてまゝとしていました。江戸時代、金春家には大夫家の他に八左衛門家、大藏庄左衛門家、竹田権兵衛家等の分家別家親戚があったのですが、幕末に大夫家に嗣子がなく、八左衛門家から広成を大夫家に戻す形にされたので、江戸時代の士族は血筋を守るために、次男、三男がいると分家を立てるか、他家に養子を出さかして置いて、本家に子がない時、さきに出してあった者の子孫を本家に養子の形に戻す。このようにして血筋を守るのは当時の士族の常套手段でした。

ですから明治以後の金春宗家として私に至るまで、名古屋から縁をいただいていた者の子孫だと思つて、多少の感慨なしとも言えませぬ。

宗家の書庫内には、江戸時代各時期の大夫家の書き物にまじつて、八左衛門家の人々の署名のある伝書が多数収められています。その中でひときわ目につくのは、文化文政期に活躍した八左衛門安住の名です。

安住八左衛門金春と名古屋

金春安明

○同族河勝氏之尾第二子授家
技○○○○○安住安明が自家願
英文政子亥夏安○○○○○但見又
母竹童子年六十七矣八左衛門安
○家 尾張侯之恩賜致仕而居賜十
五口糧可謂特恩也後成 召住名古
屋再度時服黃金恩惠甚多也技芸者
其家事勤力行老而不休緒絶○○
其功頗為不少也文政十○○○○五
月七日病卒年○○○○○ 嗣
子 金春安明

（右は流儀職分、高橋汎影の
写真により解説しました。一行二
十字で八行。楷書で刻されています。
○は欠損で読めない部分。空
白は元々から一字アキの部分で、
「尾張侯」「召」の字の上のアキ
は、尾張徳川家に対する敬意をあ
らわすものです。この墓碑は以前

に伊藤正義先生らが調査されてお
り、伊藤先生が、法政の表章先生
に尋ねたら、欠損部も、もう少し
埋まるかもしれない。）

右墓碑銘に「尾張侯」「名古屋」
の字が見える他、宗家書庫内の安
住署名の伝書の奥書にも、名古屋
関係の文字が見えます。

○「初雪」謄本奥書「天明五巳仲
秋雪之安住 尾陽にて記之」
○「千歳、開口、立合謄本 奥書」右
尾陽村方所持之謄本之内書故
者也 尤見合之ため也 干時
天明六丙午五月吉日安住写：

○「珍歌曲」謄本 奥書「天明三
癸卯四月日写金春半次郎安住
（花押）朱書松村本写」右附録

の奥書「干時天明五巳卯月上旬
安（花押）」
右三点は、偶々宗家書庫の手近
な所であったものから選んだもの
で、その他におびただしい数の安
住自筆の書物があります。金春
流現行謄本第三十四巻「松虫」の
解説ページにも書かれています如
く、安住という人はとてもかく筆ま
めな人で、細筆の右肩上がりの草
書でカリカリと何でもメモを取
ります。現代でも世間には「メモ魔」
「書き魔」とあだ名される人が時
々いますが、安住などは、まさにそ
の典型で、さきあげた三点にそ
うも、自家の謄本を残すためと言
うよりは、他家の謄本を写し取つて
自家の物と比較対照するためのよ
うです。

内容も金春家に直接関係のない
ワキ開口、千歳と三番三の鈴の遣
り取りの問答、鶴屋生生の担当で
ある「船立合」とか及び、珍歌
曲と書うのも蘭曲集ですが、玉取
とか上宮太子とか東園下のような
まともな蘭曲は一つもなく、番外
蘭曲とそれに関連する参考文献が
収められており、実際に詠われた
かどうかの实用的価値とは関係な
しにメモされたようです。

少々話が横道にそれますが、八
左衛門家の伝書に関する事柄は、
でついでに書きますと、湖山文庫
「鏡次郎安通所持流外物謄本」と
いうのがあり（整理番号二の五）
法政大学能楽研究所に現蔵されて
います。

この謄本と同じ形式の奥書を持
つ関連伝書が宗家に多数あり、表
章先生にお願いして見せていただ
いたところ、表紙も本文の紙も、
宗家蔵の関連伝書と同系の紙でし
た。

この謄本には「吉野」「橋」等
の珍しい番外曲も収められ、それ
らは古本に拠ったものでしょうが、
その外の曲目で、「数盛」「雲林
院」について比較的くわしく調べ
た範囲内の印象では、「数盛」の
本文は谷口伊勢屋本系に似ていて
六徳本や江戸時代初期の大夫系の
本文には似ていません。明治時代
に数盛が復曲された時、手許に
この「鏡次郎謄本」がなかったか
らかもしれませんが、六徳本系の
謄本を基に改訂復曲したよう

す。
「雲林院」は大鼓序ノ舞の第三
番目物なので、異文があまり生じ
ない能ですが、それでも仔細に調
べると「鏡次郎謄本」の雲林院は
本文、仮名遣い、漢字遣いが六徳
本より直風坊本（谷口伊勢屋系）
に似ていて、その点から推測する
と、「鏡次郎謄本」三十三番の内
ある物は、書式が整い一見権威
がありそうですが、実は伝承によ
るよりはむしろ当流流布していた
版行謄本（谷口系）の節付を玄人
の立場でくわしく増補したに過ぎ
ないのではないかと疑いも生
じて来ます。

八左衛門家の伝書は分量が多
く、中には右のように内容を検討
せねばならぬものもあり、昭和三
十九年に宗家の館蔵から発見され
た話になった竹自筆の「明徳集」
も安住が全文抄写したものがあり
ており、安住が大夫家の伝書にも
目を通していたということが知ら
れます。

宗家に伝わる安住の書き物につ
いてはこの辺にしておきますが、
すでに出版されていて比較的手軽
に利用できる資料として、三冊
房刊「日本庶民文化資料集成」を御
紹介します。

この本の第三巻は能に関する巻
で、その中に伊藤正義先生の翻刻
と、般若窟文庫の「安住行状大略」
という自伝が全文掲載されています。
これは安住が宝暦十一年八月
十三日に生まれ、文政十年五月
月三十日に隨居通達を済ませるま
でのご自身の日記の形式でカ
リカリーとことごとく書かれてい
ます。三十二字詰二十八行二段組
百十一ページに翻刻されています

から全部で約十九万九千字。文庫
本の一頁は七百七十四字です。か
ら、文庫本の二百八十八ページ分
ということになります。これをカリ
カリと書いた安住も傑物ですが、
あのクセの多い細字の草書を十九
万九千字翻刻した伊藤先生にも頭
が下がります。おかげで表紙仮名
に弱現代人にも江戸末期、江戸
・名古屋・奈良を往復した安住の
様子を手にとるようにわかるよう
になりました。
この日記風の自伝の中には来客

等の名前もこまかく記され、松間
仙三郎（熊本）、中村平蔵（三）、
鶴屋吉兵衛（水戸）等各地の金春流
弟子家の名も、金春流を後援し
た長岡藩主牧野侯、狂言方では大
藏右衛門家の名があるのは当然
として、名古屋関係で山脇和泉の
名が随所に散見されます。また、
名古屋関係で松村重蔵という名が
見えるのは、さきに御紹介した安
住自筆本の奥書にある「尾陽松
村」のことかもしれません。

「安住行状大略」は文政十年五月
朔日まで筆をおいています。安
住はその後文政十三年五月七日、
七十歳で亡くなりました。天保の
〔筆者は金春流シテ方宗家の長男〕

「一葉城・大和舞」シテ光洋。
面増・崇白赤・白摺箔（麗芝）・
白地綴箔（秋草）・麗巻・白練（立
湧地）麗折・女笠（雷線置）。雷
鼓樹を持ち、杖をつくの如何に
も雷の深き思わせる。難波する
道で、庵に案内されたワキ山伏
（雅介・元）の、楚樹が話の糸口と
なって、古歌に思いを寄せるシテ
が正中下層のまま、ハ折から雷も
と目付柱を僅かに見上げたところ
で、深深（しんしん）としたも
がある。素性を明かし、呪縛救済
を願う中入地（汎・安明）ら、ハ
神に五支の、とワキをひたしと見据
えてすつと立ち、ハ折り加勢して
と結め寄る気魄には、任道からの
解放の強い希求をみせた。

後は前シテのより厚い増に天
冠（紅葉付）・白地模様大口（波
頭二員）・紫地舞衣（唐草）麗
折。大口の模様は海のものも理解
し難いが、神性を秘める玲瓏とし
た面に、ハ見苦しき顔容の神姿は
恥かしく、と言われたのは、明り
を拒む強い羞恥心だろう。されば
気持を内へとして慎ましく、舞は
清楚な趣。キリでは、ハ明けぬ前
にと、ハ一松を袖を被って面を
隠し、小廻りするそのまま襟に
消え、ワキが追い越るように常座
に出て下層合掌してトメたのも納
得。（1時間20分）

「名取川」物語を、備忘のた
改元を知らなかったということに
なりませぬ。

歴史的に尾州家からの多大な後
援を受けた金春八左衛門家の血と
系を引く者として、また、最近
名古屋の皆藤お陰で名古屋金春
会、津島天王宮等も順調に定着
し、名古屋の能舞台完成が楽しみ
な今日、その名古屋と金春の歴史
的えにしを知るためにも、何とか
眼を作つて「安住行状大略」十九万
九千字を読破せねばならないと思
う昨今です。（こんはる やすあき）

「人馬」 芸のある新参ノ者
を抱えるに於ては、人を馬に変え
る芸、などというのは想像の埒外
で上演は稀である。これに、シテ
大名・耕介、アト太郎冠者・良介、
小アト史高の、万歳を祖父にもつ
三人が挑む。

目通りさせる前に、聞こえよが
しの大法螺を吹いて機先を制しよ
うという耕介の雅気に、手の内を
知った史高は大音声の呼び出しに
も恐懼のふりの狡猾。目通りすれ
ば、目配せにどう対処するかを試
験にリモンコマがいの動作で機敏
に反応して歎心を買。採用とな
るや良介を誑かして馬に仕立てる
が、その氣になつた好人物の良介
は、此処で、酷使されている主へ
の愚問晴らしをする氣配もみせ
る。奇想天外のテーマを、若さの
好アサンブルで爽やかな味を出
した。なお小道具の、容器の内側
を赤、外側を黒、の漆で塗
り、柄の先端には房を付けた立派
な馬柄柄（びしゃく）が珍しい。
（40分）

「雲霧曲」シテ太郎冠者・信
行、アト主・高義。主の気紛れな
慰みに、度々謡をせがまれば敵
わん、とばかり一計を案じた太郎
冠者も、主が酒も飲まず、膝枕も
貸す、ときてはお手上げ。しかし、
一盞乾すや間髪入れずの「さあ誂
え」の性急には抗つて、つい誂を
重ねるようになって前後を忘

る。氣力充実の信行は、謡に自信
溢れる美声を聞かせて好調だが、
所作は些かオバー・アクション
気味。しかしこれとても青年の客
氣、曲趣にも合うことで微笑まし
い。受ける高義も進境著しく、眼
に力がある。（22分）

「薩摩守」シテ旅僧・逸平、
アト茶屋・真吾、船頭・千五郎、
の三代で演ずる目度度である。
湯茶を無料と思ひ込んでいる逸
平、再々の代金の請求に「この笠
なりと珠数なりと取つておかし
め」と強く出れば、僧のことで
は真吾もかたに取るわけにゆかず、
あまつさえ先を案じて無事渡しに
乗れる知恵まで授ける。船賃を貰
えるものとはばかり、奥にうれし
うな顔で左手を差し出す逸平と、
密めながらもその無邪気をよくこ
ぶ真吾と、心の交流がほのほの
とした気分させる。船中、
「唐土天竺我朝に阻れぬない」、
と逸平が秀句上手を持ち上げれ
ば相好を崩し「うれしし事言ひ
だいたな」と受ける千五郎の呼
吸に聞然する所もなく、逸平を引
き立てて老練。キリで、ただのり
を思い出せず、苦しませる「あ
おのりの引き干」と言ひ放つ逸
平と、「とつとつとおゆきやれ」、
と突き放す千五郎。兩者の間には、
祖父と孫とが戯れ遊ぶ趣きも感
じられて面白かつた。シテが、世故
に長けて下心ある成人、の設定な
ら、その内容は単しくなるだろう
と思わせるどころ、狂言の深さが
ある。（28分）

「牛盗人」シテ兵衛三郎・又
三郎、アト奉行・信行、小アト太
郎冠者・健太郎、次郎冠者・隆行、
子方・琢史。願ひ通りの裏業を取
らせる、とて子は父と牛盗人と訴
えし、まんまと父を責め下げる人
情譚を又三郎が熱演。捕吏の冠冠
者を右左に投げ飛ばす所の鮮やか
さは、右肩から落ちて一回転する
健太郎と、舞台から勾欄を飛び越
して健勝へもんとりうって落ちる
隆行の荒技も見事。白洲に引き据
えられ、「ウオーツ」、訴人という
は彼奴でござるか、ハハハハハ
とこも迫真的。大腕の信行の剛
直ぶりもシテによく拮抗してドラ
マに厚味を加え、子方の琢史君の
一所懸命の健気が、親子の情愛を
忍び上げてはるりとさせた。（30
分・5月16日・やるまい会）

を振るのが、泣く以外にない虚
しさを視覚に訴える。クセ中では、
ハ身を焦す、と身も世もない態に
居立ち、ハ報いをも忘れける、と
がっくり安座して、悔しさに両シ
オリするところが痛恨。カケリ
（希世・孝一郎・繪一郎）は大小
前で笠を見込み、ハとうとう、と叫
ぶと、杖ついてスミ・正中に廻
りこむと両手に杖を持って投げ、
一ノ松に抜け膝を着き一打、勾欄
に寄り頭を取つてじつと笠を見込
む。内に入るとワキ正から再び笠
を見込み、右に廻つて常座から笠
に進むと二打、空を打つて地とな
った。派手さの微塵も無い気合の
入ったカケリだった。キリに、
ハ紅葉の備の、と大小前から投げ
た笠が、スミ近く奇麗に落ちたの
も氣持がよかつた。（1時間10分
・5月9日・金春会）

観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(3291) 2488-9 振替東京3-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231) 1990 振替京都1-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 0-3 6 3 9 3

購読料 1年 1000円
郵送の場合 1年 1500円
— 部 90円

能楽後継者育成事業 初の研修発表会

能楽協会名古屋支部は、将
来「能楽師」として活動をも
むすぶ後継者の育成事業を昨秋
から実施、その研修がつづけ
られていくが、きたる八月七
日、初の「能楽後継者育成研
修発表会」が熱田神宮能楽殿
で開催される。午前九時半始
め、研修生は、シテ方、ワキ方
狂言方、笛、小鼓、大鼓、太
鼓の各職子方などで、発表会
では、仕舞、連吟、狂言、囃
子など二十七番の上演、協会
の各流能楽師が助演する。研
修発表をする方々は次のみな
さん。(敬称略)
鬼頭尚久、辻本健志、戸田
健輔、山田大志、上野嘉宏、
内藤飛龍、山名遠郎、松浦一
徳、長田郷、丸山圭、助川幸
祐、松村有貴、後藤亜希、小
堀香里、鬼頭伸幸、福井聡介、
大島純子、奥井恵理子、菊川
和樹、石原真里、鈴木基文、
井上清浩、佐藤聡、藤本玲奈、
吉川ゆり、大形佳子、石原眞
一、西村信広、船戸昭弘。
(御来場歓迎)

第28回 名古屋薪能 8月7日 熱田神宮で

能楽協会名古屋支部主催の
名古屋薪能はことし第二十八
回をむかえ、きたる八月七日
(土) 熱田神宮能楽殿前・特
設舞台で開催される。午後四時
三十分開場、午後五時三十分
開演。
宝生流半能「小督」(シテ
佐藤耕司) 観世流能「羽衣」
(シテ武田邦弘) 観世流半能
「殺生石」(シテ古藤正邦)、
狂言「清水」(シテ野村又三
郎) はじめ観世、金剛、金春、
喜多各流の仕舞上演。
火入れ式は熱田神宮今井要
弥宜によって執り行われる。
入場料前売二千円(当日券
二千五百円) Ⅱ番組①面。
故西村欽也氏に
勲五等双光旭日章
三月逝去されたワキ方高安
流・西村(杉山)欽也氏は、
このほど勲五等双光旭日章に
叙せられた。また故人の七七
忌法要が営まれ、杉山家では
香典の一部を名古屋市民文化
振興積立基金に寄贈した。

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

- (7月)
 - 20日(火) 狂言と小舞の会 (有料)
 - 25日(日) 七 彩 会 (来場歓迎)
 - (8月)
 - 7日(土) 名古屋薪能(熱田神宮能楽殿前) (有料) (番組①面)
 - 8日(日) 青 陽 会 (有料) (番組④面)
 - 21日(土) 野村四郎名古屋公演 (有料) (番組④面)
 - 28日(土) 夜 斐 正 宣 後 援 会 (有料)
 - 29日(日) 能 と 狂 言 の 世 界 (有料)
 - (9月)
 - 5日(日) 大 衆 能 楽 会 (有料)
 - 12日(日) 世 定 式 能 楽 会 (有料)
 - 15日(祝) 長 生 会 (来場歓迎)
 - 18日(土) 九 宝 会 定 例 式 (有料)
 - 19日(日) 鳥 鳴 会 定 例 式 (有料)
 - 23日(祝) 鳳 鳴 会 大 会 (来場歓迎)
 - 25日(土) 中 日 文 化 セ ン タ ー 演 表 会 (来場歓迎)
 - 26日(日) 和 泉 会 (来場歓迎)
 - (10月)
 - 3日(日) 泉 会 大 会 (来場歓迎)
 - 9日(土) 久 田 二 能 楽 サ イ タ ル 会 (有料)
 - 10日(日) 武 邦 編 曲 会 (来場歓迎)
 - 11日(祝) 幽 詠 会 会 会 (来場歓迎)
 - 16日(土) 幽 詠 会 会 会 (来場歓迎)
 - 17日(日) 幽 詠 会 会 会 (来場歓迎)
 - 23日(土) 幽 詠 会 会 会 (来場歓迎)
 - 24日(日) 幽 詠 会 会 会 (来場歓迎)
 - 31日(日) 幽 詠 会 会 会 (来場歓迎)
- (演能変更の節はご了解下さい)

名古屋城夏まつり

8月3日～15日 連日 能公演

真夏の夜のファンタジーとして、例年の「名古屋城夏まつり」は、能楽協会名古屋支部の積極的な協力により、八月三日(火)から十五日(日)まで薪能が催される。能の上演は次のとおり。
三日「清経」(古橋正邦)
四日「鶴鶴」(清沢一政)
五日「葛城」(今沢美和)
六日「杜若」(瀬戸三津子)
七日「舞臺子と仕舞」(名古屋屋学生能楽連盟)
八日「吉野天人」(須藤市)
九日「芦刈」(高橋暎一)
十日「巴」(松山幸親)
十一日「百萬」(近藤幸江)
十二日「田村」(久田徹二)
十三日「安達原」(前野郁子)
十四日「玄象」(梅田邦久)
十五日「花月」(祖父江修二)

第28回 名古屋薪能

八月七日(土)午後五時半開演
熱田神宮能楽殿前・特設舞台

観世流仕舞

島 高橋 暎一 地謡
清山 幸親 地謡
祖父江 信一 地謡

金剛流仕舞

風 竹内 幸司 地謡
百々 忠 地謡
小林 康三 地謡

金春流仕舞

加藤 正嗣 地謡
近藤 尚三 地謡
伊藤 修三 地謡

喜多流仕舞

鼓 和谷 街市 地謡
長田 田吉 地謡
小出 甚吉 地謡

宝生流

待女 竹内 澄子
小督 戸田 和
仲国 佐藤 耕司

小督

寛 敏一 大野 誠
伊藤 温三 辰巳 正孝
竹腰 勝一 稲川 孝一

火入式

熱田神宮 今井 要
御挨拶 名古屋市長 西尾 武喜

観世流能

武田 邦弘
和合之舞
菅田 定男 助川 龍夫
菅井 良治 鹿取 希世

羽衣

杉江 元 菅田 定男 助川 龍夫
菅井 良治 鹿取 希世
黒田 勲博 稲生 雅芳
今村 嘉男 小川 雅芳
加藤 保彦 清沢 一英

観世流能

後見 泉 熊沢 美子 地謡
加藤 春枝 今村 嘉男 清沢 一英

清

水 野村又三郎 大野 弘之
後見 佐藤 友彦

観世流能

古橋 正邦
飯富 雅介 河村 真之介 鬼頭 好信
井上 祐一 後藤 嘉津幸 竹市 学信

殺生石

後見 武田 邦弘 地謡
今沢 美和 須部 甫 高橋 暎一

主催 能楽協会名古屋支部
後援 名古屋市・熱田神宮
(終了予定 八時五十分頃)
当日券 二千五百円(前売券二千円)
取扱い 市内各プレイガイド・ぴあ・能楽殿出演者宅
※火入れ式以後降雨の際は以後演能を打ち切り
※雨天順延のお問い合わせは熱田神宮能楽殿
(052-682-1751)



観世清和

昭門会

観世元昭

社団法人 鏡仙会

観世鏡之丞

観世栄夫

観世曉夫

幽詠会

片山九郎右衛門

財団法人 研能会
梅若万紀夫
梅若万佐晴

井上嘉久

梅若盛義
大阪国際フェスティバル能

大槻清韻会
大槻文蔵

名古屋観衛会
山本勝一

名古屋正花会
山本博通

鳳鳴会
武田志房

野村四郎

名古屋観世九皇会
観世喜之

加藤藤保彦
青木武弘

高木美智一
高橋瞭

志月雅日記

(142)

災難に逢うのがよく候

えと文 二井栄逸

日々是好日——毎日毎日が平和な良い日であるということ、碧嶽録のことは多くの人々は愛する。そして誰しもが好日を願うのであるが、人生というものは毎日毎日が平和な良い日ばかりではない。

良寛は、災難をのがれる妙法として、次のようなことを残して、

災難に逢う時節には災難に逢うがよい候
死ぬる時節には死ぬがよい候
是は、これ災難を逃るる妙法にて候

この良寛のことはよく候

「花伝の会」第一回例会能

8月15日 能「井筒」上演
芸創センター

現代に生きていく「能」の新しい見方と可能性を求めて、笛方藤田流宗家・藤田六郎兵衛氏が企画する「花伝の会」第一回例会能が八月十五日、名古屋芸術創造センターで催される。

演能は、能「井筒」はじり一調、一管など。この上演は、藤田六郎兵衛氏が演出企画、観世鏡之丞氏が監修、照明・音響・美術を若尾綜合舞台が担当、「現代に生きて

「能」のもつ素晴らしい「花」を私たちが再確認し、一人でも多くの人に知ってもらいたい。今一度、世阿弥の柔歌、かつ世に対する挑戦的な精神に立ち返りたい」と藤田六郎兵衛氏は語っている。

演能は、能「井筒」(シテ片山清司、ワキ宝生欣哉)一調「普昇」(観世鏡之丞、上田悟)さらに一管「盤沙之音取」「獅子」の上演で、字幕に英語と日本語の要約解説が添えられる。

平成5年7月・8月放送予定

- 〔7月〕NHK・FM能楽鑑賞 (午前8時~9時)
- 18日(日) 観世流「賀茂」「夕顔」山本 順之
 - 25日(日) 金剛流「唐船」「玉茗」種田 道雄
- (教育テレビ)「芸能花舞台」7月24日(金) 午後9時より
- 奈良興福寺の新御能「千手」観世鏡之丞
- 日本の伝統芸能・能狂言鑑賞入門(四)
- 教育テレビ午後10時 解説 増田 正造
- 7月23日(金) 宝生流「大江山」渡辺 三郎
 - 7月30日(金) 大蔵流狂言「千切木」茂山千五郎
- 〔8月〕NHK・FM能楽鑑賞 (午前8時~9時)
- 1日(日) 故人をしのぶ大坪十喜雄(宝生)「景清」
 - 8日(日) 木原 康次(観世) 一調「葛城」
 - 15日(日) 野村 蘭作(宝生)「鶴亀」
 - 23日(日) 観世流「松浦住用姫」大槻 文蔵
 - 30日(日) 金春流「鱈丸」金春 晃実

説が行われるなど実演的な企画も注目される。午後三時開演。

入場料会員四千円、一般五千円。

花伝の会事務局 名古屋市中区丸の内三―五―一五、ダイアパルス丸の内302号、☎052-1953-6264

古演出の「葵上」
岡崎城二の丸新能
董泉会主催で八月三日行われる岡崎城二の丸新能の「葵上」は、「古演出による葵上」の方法で上演される。(番組別掲)



岡崎城二の丸新能

八月三日(火) 午後六時半始

- 舞臺子安 宅 八神 孝充 河村総一郎 鹿取 希世
- 狂言棒 縛 野村又三郎 野村 信行
- ツレ 松山 幸親 河村総一郎 鹿取 希世
- ツレ 加藤 春枝 河村総一郎 鹿取 希世
- 泉 嘉夫 河村総一郎 鹿取 希世
- 能 葵 上 高安 勝久 河村総一郎 鹿取 希世
- 間 杉江 元 河村総一郎 鹿取 希世
- 後見 瀬戸三津子 服部 俊介 鶴岡 克彦
- 泉 雅一郎 黒田 博修 山本 正人
- 今村 嘉勇 祖父江 孝一

附 祝 言 主催 壺 泉 会

後援 岡崎市・教育委員会

入場料 三千五百円(全自由席)

取り扱い 岡崎市内各プレイガイド及び出演者宅

<p>幽花会 片山慶次郎 〒603 京都市北区小山下花ノ木町二一 電話 四九二一五三〇二番</p>	<p>観世芳宏門人会 観 世 芳 宏 観 世 芳 伸</p>	<p>大垣浦声会 穂古場 大垣市伝馬町大垣別院 住所 京都市左京区下鴨芝本町六</p> <p>浦 田 保 親 浦 田 保 浩 浦 田 保 利</p>	<p>邦 謡 会 梅 田 邦 久 須 部 一 甫 清 沢 美 和 今 田 美 和 本 田 和 典</p>	<p>梅 若 修 一 名古屋修 諷 会</p>	<p>松 音 会 泉 泰 孝 〒168 東京都杉並区宮前四一九一四 電話 ☎03-3333-2188 〇番</p>	<p>泉 雅 一 郎 〒181 東京都三鷹市幸社二一三一 電話 ☎04-2317-1240 〇四</p>	<p>竹翠会 若 松 宏 守 〒662 西宮市平松町四一九 電話 ☎0798-231060-1</p>	<p>武田詠楽会 武 田 欣 司 武 田 邦 弘</p>	<p>名古屋淡交会 橋 岡 慈 観 瀬戸 三津子 〒466 稲沢市稲島町二ノ宮六 瀬戸方 電話 ☎0587-3338八番</p>	<p>下 田 雄 三 豊中市曾根東町四一―二二</p>	<p>雄嵐会中部地区連合会 名古屋和 石 会 一 宮 竹 会 岐 早 花 会 下 呂 雄 会 萩 原 雄 会 高 山 雄 会 倭 文 屋 社 中</p>	<p>武田宗 和 初 陽 会</p>	<p>名古屋橋 岡 会 名古屋和区丸屋町五ノ三五 山田紀子方</p>	<p>誠交会 奥 善 助 東京都世田谷区三軒茶屋二一〇―三 電話 ☎03-3432-2637 七番</p>	<p>山 本 真 賀 山 本 章 弘 豊中市本町六丁目一〇一六</p>	<p>春 鶯 会 梅 若 善 高 〒555 豊中市新千里南町三丁目18-12 電話 ☎06-831-7854 〒120 東京都足立区綾瀬一-15-13-302 電話 ☎03-3604-1740 〇九</p>	<p>久田観正会 久 田 徹 二 大倉流小鼓 松 月 会 会 松 前 野 郁 子 都 議 会 松 山 幸 親 松 認 会 玉 馬 場 信 至 〒461 名古屋市中区東水切町四ノ四三 電話 ☎052-981-3643 三番</p>
---	--	--	--	-----------------------------	---	--	---	--------------------------------------	--	---------------------------------	--	------------------------	--	---	---	---	--

五日目の最後の狂言は、「節分」である。演者は茂七である。「節分」は、鬼物として分類され、番組順では、二・三番組目に置かれていたが、この勸進能では、止狂言として演じられている。「福は内、鬼は外」の節分を、狂言化したもので、鬼が小籠を誦して女を口説くところが、面白い見どころである。

六日目は、「泣尼」「八文字」「合柿」「山伏」の五番である。「泣尼」は、出家物狂言に分類され、番組順では、二番組狂言として演じられることが多い。脇狂言とはめずらしい。供養僧の法談を聞きながら居眠りする泣き役の尼と、その眠りを覚まして泣かせようとする僧との、やりとりの面白さが、やま場になっている。「古今著聞集」に基づいて作られた狂言と言われている。「狂言総覧」P208

「八文字」は、「八句連歌」のことではないかと思われる。「八句連歌」は、雑狂言に分類され、番組順では二番組に配られている。表八句の連歌を、借金の言い訳や、催促の意を含めて、付け句する面白さが、この狂言の特徴である。連歌が好まれた時代を反映している狂言である。勸進元の和泉元知が演じている。

「合柿(あわせがき)」は、三番組目に演じられているが、通常の演能順では、止狂言に入っていた。合せ柿というのは、柿を抜いた柿のことを言うようである。柿を、柿を売ろうとして、柿を、むりに漬かないような顔をして食べるところや、柿が甘いなら、口笛を吹いてみよと言われて、渋さのために音が出ないところなどが、わらいをさそうところである。

「鼻(ふくろ)山伏」は、山伏物に分類され、番組順では、三・四番組目に演じられる狂言である。鼻が山から帰ってきた弟に寄り添き、さらに、それを直そうと、貴い山伏に加持祈禱を頼んだ兄にも乗り移り、さらに、山伏にまでも移ってしまうという、効き目のない山伏の行力を笑いとばす狂言である。鼻が乗り移ったことを示す「ホホン」という叫びが、面白さをさそう。

六日間の勸進能の最後を閉めるのが、「松脂」である。「松脂(やに)」は、脇狂言の中の雑物と言っているようである。大果報の者が、正月のめでたきを祝って、松脂子をしていく。その雑子が浮かれて、松脂の精(シチ)が登場してくる。松脂のめでたいいわれを、唐国では松の口に含んで、子宝にめぐまれたこと、日本の国では、高砂・住吉の松が千年の齢を経ていること、弓の弦に松脂をひいて、賊を追い払い、平和をもたらしたことを語り、主(アド)のたつての要望によって、松脂を焼けてみせるといって、祝言の狂言である。最後を締め括るにふさわしい狂言と言えよう。

以上、長々と、能・狂言の曲目と、その内容についてふれてきたのは、享保二年頃の勸進能の曲の選択から、当時の観客の能・狂言に対する好みを知ることができると思ったからである。又、ウキ役者・狂言役者が、勸進元になって、能・狂言を選択する際には、どういふ傾向が出てくるかということも、興味あることである。

少くなくとも、黒川又三郎は、ワキ役の活躍する能を選んで、演じていたし、狂言役者、和泉元知は和泉流の宗家として、名譽の曲である「花子」を演じ、「野狐」から「釣狐」までをも演じている。狂言役者としての演技の見せどころのある曲は、きちんと演能の中に取り込んでいた。

能の選曲について、脇能物六曲「弓八幡」「加茂」「白鹿」「壘帝」「和布刈」「春日竜神」を見ると、その好み、大体推察される。

「弓八幡」は、神舞物であるが、「加茂」は、別雷の神で働物である。「白鹿」は、悪魔の面を付け、楽を舞い、さらに、竜神の舞物と、天女の舞があるはなやかな能である。「壘帝」は、本来は切能

尾張藩の能の歴史

辻 宏 一

物に分類される能で、後シテは、鍾馗の靈で、舞臺を演ずる。「和布刈」は、黒鹿の面を付けた魔神が豪快な舞臺を見せる。「春日竜神」は、「和布刈」と同じく、黒鹿の面を付けた魔神が、豪快で威風凛々な舞臺を見せる。本来は切能物として演じられる。このような点から、当時の脇能の好みは、神舞物ではなくて、豪快な舞臺を見せる、強さを強調する能が、好まれていたようである。

次に修羅物である。六日間の演能の間、一日目から三日間のみで、「八島」「頼政」「瓶」の三曲である。よほど、修羅能は、好まれていなかったようである。「八島」「瓶」は、俗に勝修羅と言われ、勇ましい壮年の平太の面を付けて、(今若を付けることもある。)

「頼政」は、「頼政」という老体の特長な面を付け、平等院で扇を敷いて自害すると言った、老体の傾向は、当然ながら、四番組・五番組の能の演目を、増やしている。

四番組は、「七騎落」「邯鄲」「播磨」「葵上」「三輪」「放下僧」「角田川」「梅枝」「景清」「卒都婆小町」「大仏供養」の十一番である。狂言物としては、「角田川」「梅枝」「卒都婆小町」の三番。神楽物としては、「三輪」の一番。遊楽物としては、「邯鄲」の一番。遊狂物としては、「放下僧」の一番。人情物としては、「景清」の一番。

現在物としては、「七騎落」「大仏供養」「播磨」の三番。執念物としては、「葵上」の一番である。それぞれ、多様な選曲になっているが、狂言物で、現在物が中心となっているようである。狂言物のシテは、すべて女性であり、中年又は老女である。三番組の能の少ないところを、女物狂いの能によって、さらに補っているであろう。

参考文獻、註解「謡曲全集」野上豊一郎、「能楽鑑賞事典」狂言総覧

大阪城薪能

7月28日、能3番

大阪城西の九庭園で開催される。演能は宝生流の祝言能「鶴亀」(シテ宝生)「井筒」(シテ宝生)「井筒」が、紀の有常の女、「定家」が、式子内親王、「遊行御」が、朽木の御の精と、それぞれ、変化に富んだ、變能を連曲しているが、もう少し、變能が多く演じられてもよいと思われるが、これも少ない。變能も、修羅能と同様、あまり好まれなかったのであろうか。六日間の演能で、五番のみで三十分開演。

宝生英雄
宝生英照
宝生英照
本田光洋
春敲会
金春晃実
金春穂高
廣瀬瑞弘

近藤乾之助
福王茂十郎
谷口正喜

廣田後援会
廣田幸稔
廣田幸稔

菊扇会
後援会
廣田泰三
廣田泰三

金春信高
金春安明
飯島佐之六

龍吟会
藤田六郎兵衛
幸清会
幸義太郎
幸正昭

龜井俊一
保忠雄
保雄

前川光隆
前川光長

岡次郎右衛門
大藏彌右衛門
大藏彌太郎
大藏吉次郎

飯島佐之六

龍吟会
藤田六郎兵衛
幸清会
幸義太郎
幸正昭

龜井俊一
保忠雄
保雄

前川光隆
前川光長

岡次郎右衛門
大藏彌右衛門
大藏彌太郎
大藏吉次郎

飯島佐之六

青陽会定式能 (第37期)

八月八日 (日) 十時半始
熱田 神宮能楽殿

能通 盛 高安 勝久 河村其之介 池田 誠茂
杉江 元 藤原富司忠 大野 誠茂

狂言 咲 大野 弘之 佐藤 友彦
大野 弘之 井上松次郎

能半 雨之 段 中川 雅章
飯富 雅介 鬼頭 英二 鹿取 希世

能小 鍛冶 杉江 元 筑 敏一 鬼頭 好信
飯富 雅介 後藤 嘉津幸 竹市 学

附 祝 言 主催 青 陽 会
〔有料〕 当日券三千円

第十回記念 野村四郎名古屋公演

八月二十一日 (土) 午後二時開演
熱田 神宮能楽殿

舞臺子 高 砂 大規 文蔵 河村総一郎 助川 龍夫
福井啓次郎 藤原 嘉津幸 藤原 嘉津幸

松 中クセ 藤井 徳三 山本 朝雄
大西 留久 地蔵 上野 朝雄

天 鼓 山中 義滋 祖父江 修一

子方 大江 広祐 同山 保浩 片山 清司 杉浦 豊彦 井上 裕久 山本 章弘 上野 朝雄 上野 朝雄 林 嘉一郎 同山 藤井 完治 野村 四郎

能安 宅 福王茂十郎 河村総一郎 藤原 嘉津幸
勳進 延年之舞 立 野村 三郎 野村 三郎

後見 大規 文蔵 加賀 敏彦 大西 貴弘
山中 義滋 祖父江 修一 大西 貴弘

〔終了予定 午後四時三十分頃〕

料金 A席(一階指定席) 一万二千円
B席(二階自由席) 一万円
C席(三階自由席) 六千円
学生券(二階自由席) 四千円
お求めは市内ブレイカイド・チケットぴあ
問い合わせ 中部日本放送文化事業部(☎052-241-1118)

新作能面展

日本能面巧芸会

日本能面巧芸会(林龍峯会長)
は、七月二十日から二十五日まで
中区・栄二の電気文化会館で「第
十二回新作能面展」を開催、会員の
力作約百五十点が展示されている。
会場は同館五階東ギャラリー。
後援愛知県教委、名古屋市教委。
日本能面研究会(名古屋市中区
泉一丁目15-23、チサンマンショ
ン栄リパーク801号、☎0
五二九五三一〇九二、理事長
は磯部繁雲氏。

紅梅記

絵画館のこと、邯鄲

六月の梅雨空、庭にそびえる藤
山木の白く大きな花が風にのせて
芳香をおくる。おぼろ夜もよい。
同月十二日夜皇太子さま、雅子
さまご結婚を祝して東京都がちよ
うちん行列を行う。新宿区神宮外
苑の絵画館前まで。
その絵画館のことである。古い
が私は新しい思い出を持つ。そ
れは五月十四日付の東京新聞(夕
刊、学芸欄)より始まる。詩人の
伊藤信吉氏が「国境標石と詩碑
(下)」を寄せた。この標石とは
かつての標太(からふと) 国境に
あったものではと察した。果してそ
うであった。それが絵画館にな
る。実は同館は明治天皇一代の
事業を画にして展覧に供してい

能面・能装束展

金剛家所蔵 能面・能装束展

金剛家所蔵「能面・能装束展」
は、七月二十四日、二十五日の二
日間、京都・金剛能楽堂で催され
る。午前九時より午後五時まで。
金剛能楽会主催。入場料千円。

水無月の舞台から

「大槻秀夫三回忌追善能」「観世会」「第九回能を楽しむ会」

竹尾 邦太郎

「朝長」シテ嘉夫。ワキ和哉
との問答・掛合の、抑制された持
情の淑やかさに青葱ノ長者の器量
を示し、委曲を尽くす語り人の叙
感、地(万紀夫・泰孝)が更
に深めて如何にも追善。後シテは
切腹の「隠」を覗み、輪十六で自
決した朝長らしく面は十六、その
ため、床几の姿も上品で武蔵の
感じはみせず、膝を射られる一連
の所作も流れるように鮮やかで、
むしろアクセントの無いのが物足
りない程。キリの、割腹の深い印
象も朝長らしいと思つた。(1時
間48分)
「卒都婆小町・一度ノ次第」十
一年前の同じ日、杉村竹翠追善別
会で秀夫が勤めた曲を、亡父秀夫

る。その中の一つがその標石設置
作業(洋)の面であると告げる。
そこは正しくは明治天皇聖徳記念
絵画館と呼ぶが、私は長らく外苑
(神宮)の絵画館と言ってきたな
つかしい処である。在学中(立教)
にものを考え、心を明るくする場
所の一つでよく訪ねた。いまはあ
の画のことは記憶にない。しかし
実物の標石は絵画館の傍で、しか
に歴史を物語っていた。それが終
戦後どこへ持ち運ばれたかわから
なかつたが、実は絵画館にあるこ
とを知った。これも伊藤氏による。
なぜか胸のせまる思いがした。昔
は若い私でも日本のことを感じ
た。今はカタチこそがへ、能や
狂言をみて日本の美やおかしみの
深いものを味う心と通する処があ
るようである。
絵画館の画の中には、明治天皇
が功労のあった頼朝の病床お見舞
と、皇后さまが秋の虫の声をお聴
きになる(明月に雁行か)二枚の
画が忘れられぬ。なつかし。
さて、ご結婚の方は、翌十三日
の名古屋観世会で幸祝の小唄「青
葉寿人あおばはき」が謡われた。
もちろん新曲。

「宗論」

我が宗旨尊し、の確

「宗論」 我が宗旨尊し、の確
執。しかし、競り合う程に混乱し
て挙句は妥協、という次第。「宗
旨」を「政教」に置き替へれば昨
今の政情そのもの、狂言の持つ、
古今東西に通じる普遍性である。
浄土僧・元秀の、相好を崩しなが
らもふてふてしく押しつけてくる執拗
な粘着質のキャラクターと渡り合

きて/クリカエシ/宮居に風
の薫(かお)らす云々」
で始まる。小西甚一(作詞・観世清
和作曲、松書店発行)「観世」誌
六月号に解説が載る。

「観世宗家・幽玄の華」と称す
る能楽展覧会(飯草・歴史博物館、
六・四一七・四)のことは次号に
とり上げたい。東京山崎有一郎氏
ご好意と故早稲田の二科会(Nさ
ん(会友、彫像、女性)の案内を
謝したい。楽しい半日行であった。

六月は、卒都婆小町(大槻文蔵)
・邯鄲(剛、宇高通成)・頼政(野
村四郎)・国酒(宝生英照)・楊
貴妃(倉本雅、女性)など好演多
し。邯鄲のこと。盤渉・月ノ飾の
小唄が付く。曲趣十分。さて舞台
をおり、働もすし、しばらくして
「ふしぎやな」で前向きなまま
舞台上に飛び入り、安座する。は
めてみるカタである。なお眠るシ
テを起す二回とも(ワキとア)
起し方が一呼吸丁寧であるように
思う。演出によるのか。次回を期
待したい。
八月も多彩である。(野村広二)

「融・十三段ノ舞」半能で、
ワキ・勝久は「思立ノ出」だった。
シテ喜之、面中將・黒垂・小立鳥
帽子・柿色無地髪斗巾・緋大口・
白直衣(露赤)・太刀、の鮮麗な
出立は、舞曲の無かつた先の二曲
を受けて存分に舞い、溜飲の下が
る思いだった。

白河の波の、と目付柱に投げ
た扇を、へ曲水の盃、と両手に拾
って捧持し、へ受けたたり受けた
り、と飲み干す態から舞になる気分
の高揚は、舞に弾みをつけて暢達。
舞上げて地との掛合にも勢いは衰
えず、キリは左袖軽く巻き上げ、
へ月の都に入り給ふ、と懽喜に入
り、へ名残惜しの面影、を残して
軽やかに幕入りすると、ワキは
常座に見送って脇留となった。
(34分・6月6日・大槻道善能)

「頼政」シテ四郎、ワキ雅之
助に呼び掛けて出ると、問答から
一ノ松に胸杖し、へ月こそ出ずれ

(24分)
「邯鄲・盤渉・月ノ飾」シテ
通成、ワキ茂十郎、ワキツレ重喜、
子方・竜成、アイ信行。盤渉とは
笛の調子、十二律(音の高さの規
定)の一つで、基準とする黄鐘調
より二律高く、大小太鼓も手を替
える、という。楽(がく)を盤渉
とするのは、常よりもシテの気分
の高揚を目指すためだろう。それ
からあゆむか、頻りに赤味を刷いた面
邯鄲男の、若学青年感生の客気は、
仕所の多いこの曲の随処に見ら
れ、その技の牙えは舞金剛の面目
羅如、目が離せなかつた。台上の
「楽」は大きく、唐團扇が再三柱
を撫でる手際の是非はともかく、
台を飛び出さんばかりの闊達さ。
空下りは、先ず柱を掴み、面遣を
して離れ、またハツと柱を掴むや、
背を向ける程にくるりと身体が回
って左足が着くと、さつと引き上
げた。台上の「楽」は夢中の夢。
得意の絶頂にあつて独りでに舞い
出す気分が、ふと民草に及び、高
楼から眺め下すところ危うく足を
踏み外し、暗闇に柱に掴まって我
に返ると、後ろ向きに腰を下して
クワログ裡に夢中の現実に戻る、
のだと私は思はれる。
勇躍舞台に出て来たシテは、更
に奔放に舞って唐團扇は子方の冠
を撫でんばかり、気分の高揚が目
覚し。月ノ飾は、へ有明の月、と
月ノ扇して舞台を一巡するだけ。
へ万木千草も一時に花咲けり、と
袖を巻き、へ面白や、と後ろ向き
にぱつと跳び退ると、既に舞台上に
安座、平坦と居るその放れ技には
驚いた。飛び込みは、懽喜から一
気走り込むと拍子二ツ、跳び上
りざま勢いよく横臥したのも鮮や
かなものだった。夢醒めた後、枕
を両手に捧持すると、へこの枕な
り、と拝礼し、へげに有難や邯鄲
の、の返しに唐團扇を静かにその
枕に立て掛けて台を下り、とい
う一寸勿体ぶつた挙措も哲学青年
の客気で、深刻さよりも街の喧
わせ、そこがまた現実的でもあつ
て面白かつた。地は清隆・道一ら、
主後見に永謙、雅子は希世・孝一
郎・総一郎・龍夫、各役共好演で、
就中子方竜成は頭張った。(1時
間29分・6月19日・第九回能を楽
しむ会)

観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話03(3291)2488-9 振替東京3-3552
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話075(231)1990 振替京都1-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (731) 7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年1000円

郵送の場合 1年1500円

一部 90円

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

(8月)

28日(土) 衣斐正宜後援会 (有料) (番組⑤面)

29日(日) 能と狂言の世界 (有料) (番組③面)

(9月)

5日(日) 大衆能 (有料) (番組⑤面)

12日(日) 観世会定式能 (有料) (番組⑤面)

15日(祝) 長生会 (来場歓迎) (番組④面)

18日(土) 九草会定例能 (有料) (番組④面)

19日(日) 宝生会定式能 (有料) (番組⑤面)

23日(祝) 鳳鳴会大 (来場歓迎) (番組⑤面)

25日(土) 中日文化センター発表会 (来場歓迎)

26日(日) 和泉会 (来場歓迎)

(10月)

3日(日) 泉楽会大会 (来場歓迎)

9日(土) 久田徹二能リサイタル (有料)

10日(日) 武田福栄会 (来場歓迎)

11日(休) 邦福福栄会 (来場歓迎)

16日(土) 幽花福栄会 (来場歓迎)

17日(日) 寺福福栄会 (来場歓迎)

23日(土) 福福福栄会 (来場歓迎)

24日(日) 福福福栄会 (来場歓迎)

31日(日) 福福福栄会 (来場歓迎)

(11月)

3日(祝) 涛吉華能楽鑑賞会 (有料)

6日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)

7日(日) 叶石福栄会 (来場歓迎)

13日(土) 青福福栄会 (有料)

14日(日) 世修会定式能 (有料)

20日(土) 観世会定式能 (来場歓迎)

21日(日) 宝生会定式能 (有料)

23日(祝) 狂言和泉会 (来場歓迎)

27日(土) 清久田親正会 (来場歓迎)

28日(日) 清久田親正会 (来場歓迎)

(演能変更の節はご了解下さい)



8月の長雨のなかで!! 第28回 名古屋新能

(本文②面)

大 衆 能

2部制で能4番上演

9月5日 熱田能楽殿

能楽協会名古屋支部主催の「大衆能」は本年度第三十五回を数え、熱田神宮能楽殿で、第一部十時開演、第二部午後二時開演の二部制で上演される。
【第一部】観世流能「養老」(シテ小島一英、ツレ山幸親) 狂言「子盗人」(シテ井上松次郎) 金剛流能「藤」(シテ牧野元子) ほか観世流・金春流仕舞。
【第二部】観世流能「花笠」(シテ泉新夫、ツレ八神孝充、子方・中川万里奈) 狂言「昆布売」(シテ松田高義) 宝生流能「船弁慶」(シテ玉井博結、子方・松浦ちひろ) ほか観世流・喜多流仕舞。(番組③面)

暑中御伺い申上げます

熱田神宮能楽殿運営委員会

委員長 熱田神宮権宮司 岡地幸雄

委員一同

名古屋城能楽堂(仮称)

見所は六百席の計画

名古屋市立能楽堂の建設計画は、能楽愛好者をはじめ市民各界の力強い期待にこたえて、市当局も積極的な計画をすすめており、建築場所は名古屋城正門入口前(清正公銅像の北)と決定、平成七年に着工、完成は平成九年四月と予定されている。
計画では、舞台は、柱の内内で大京間三間(十九尺五寸)の大きさ、見所は六百席を予定、楽屋は七室、展示ホールが設けられ、地下に駐車場が設けられる。舞台形式は宝生流水道橋舞台に準じている。
能楽協会名古屋支部(野村又三郎支部長)では、良い舞台を作ってもらおうと舞台、楽屋についての助言をよせており、さらに舞台の照明方法なども支部員の希望を汲み上げ、計画の推進に期待をよせている。

観世流 シテ方 観世元昭氏 逝去

7月29日 観世会葬で告別



観世流シテ方、観世元昭氏は七月二十七日午後六時三十分、肝臓病のため東京都渋谷区の病院で逝去された。享年五十六歳。

葬儀ならびに告別式は二十九日正午から社団法人観世会葬として東京都豊島区長崎一の九の観世会館で執り行われた。葬儀委員長は加藤精一・岡三証券社長、喪主は妻御美(きみみ)さん。
観世元昭氏は昭和十二年一月九日、観世流二十四世観世左近宗家の次男として東京に生まれる。観世華習、雅習に師事。戦後を代表するシテ方能楽師として幅広い演劇活動を行い、昭和四十五年大阪文化祭賞受賞、昭和六十三年「芭蕉」のシテで芸術選奨文部大臣賞受賞、昭和六十年から六十二年まで能楽協合理事長、観世会理事を歴任。平成二年から観世会理事。昭和五十八年フランス能楽特別公演の団長をつとめ海外公演。とくに中部地方では、中日新聞社の「中日五流能」さらに「中日名匠鑑賞能」の演出にも尽力、毎回出演。また中日文化センターの特別講師もつとめた。能楽界の重鎮としてその逝去が惜しまれる。

暑 中 御 伺

名古屋観世会 大阪能楽会館 西智久 〒590 大阪市北区中崎西2-3-17	山中能舞台 山中義滋 〒515 大阪市阿倍野区阪南町六-15-18 電話(06)692-1382	財団法人 鎌倉能舞台 中森晶三 中森貫太 〒248 鎌倉市長谷三-15-13 電話(0467)55557	笙月会 中川雅章 長浜市地福寺町八ノ二九 電話(0565)6303番	洗心会 奥村富久子 〒608 京都市左京区永観堂西町二〇 電話(075)777-0767番	賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会 加賀敏彦 〒466 名古屋市守山区藤幸二丁目七〇九 電話(052)777-8945番	観修会 祖父江修一 多治見市日ノ出町2丁目 電話(0572)3656番	鶴恵会 熊沢恵美子 名古屋市名東区平和ヶ丘3-76 日車マンション四〇四			
芳韻会 稻生芳雄 半田市船入町三十一 電話(0569)8115	幸福会 近藤幸江 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三 電話(0564)3529	中日文化センター 謡曲・仕舞教室(名古屋・栄) 岐阜・四日市 翠謡会 生駒里翠 名古屋市中東区社ガ丘3-1503 電話(052)703-1571番	重陽会 菊池重郷 大山市大山宇相生五九-16 電話(0568)4501番	清風会 今村嘉勇 岩倉市東新町下境52-101 電話(0567)7238	恵韻会 三村恵子 〒415 西尾市住吉町三-12 電話(054)2594番	梅鶴会 熊沢光俱 〒455 小牧市篠岡3-2-11 電話(0567)9587	佐野由於 〒168 東京都杉並区和泉2-45-33 〒911 金沢市泉野町四丁目12-14	恵美寿会 衣斐正宜 〒466 名古屋市昭和区御器所3-23-19 御器所パークマンション802号 電話(052)882-1560番	衣斐正直後援会 〒466 名古屋市中村区名駅三-26-26 電話(052)586-1120番	倉本雅 神戸市東灘区田中町一-13 本山アパルトメント四〇二号 電話(078)441-5465番

五月雅日記

(143)

一期一会

えと文 二井栄逸

一期(いちご)は人間の一生。一期(いちえ)はただ一度の出合いを意味する。

しかし、人生のうちには、出合いと別れは幾度も繰り返されるがその出合いは同じものでは決して無い。

生涯に一度まみえる、という気魄が、いかに貴重なことか、を多くの人は、それぞれに感動と喜ぶ。

青春の日々の出合い
全身全霊を打ち込む公演会やエキスポジション等の栄光の日の出合い
離れの人に会えた日の出合い
どれも忘れ得ぬこのような出合いを持った人は幸せであるし、行動力のある人は、前にも増した新鮮な出合いを重ねて前進するであろう。(平成五・八・八記)



第28回名古屋薪能

火入れ式後に演能打切り

能楽協会名古屋支部主催の第二十八回薪能は、八月七日午後五時半から熱田神宮神楽殿前会場で催された。台風七号の影響から時折り激しく降る雨のために会場は傘をさしての観能がつづけられ、観世流仕舞、金剛流、喜多流仕舞につづいて、宝生流半能「小督」を上



演能打ち切りに当たって、野村又三郎支部長から、多数の来会に感謝と演能中止のおわびが述べられた。

奉祝小謡
「青葉寿」

6月名古屋観世会で連吟
六月十三日熱田神宮能楽殿で催された名古屋観世会定式能では、演能のはじめに当たって、皇太子殿下ご成婚を祝し、奉祝小謡「青葉寿」(アオハホキ) 小西甚一謹作、二十六世観世清和神曲IIが名古屋観世会一同により詠われ慶祝の気があふれた。II写真(田中正夫氏撮影)

「道成寺」古式

10月24日 今井後援会創立10周年記念公演

金剛流今井清隆師の今井後援会は今年十月二十四日、京都・金剛能楽堂で第二十回後援会能を開演、今回は後援会創立十周年記念公演として、金剛流の秘曲「道成寺・古式」が上演される。午後一時始。番組は次のとおり。

舞臺子「橋弁慶」(今井克典、子方宇高寛成)

狂言「堀桐」(茂山千之丞)

狂言「井筒」(金剛能)

能「道成寺」古式(シテ今井清隆、ワキ植田隆之亮、ワキツレ広)

狂言鳳の会公演

8月28日いりなかスクエア
狂言「風の会」第四回公演は、八月二十八日(土)いりなかスクエア熱田神宮能楽殿で催される。

なお、期内名古屋市収入役は、あいさつの中で名古屋市立能楽堂の建設について、「名古屋城前に建設が予定される能楽堂は平成七年着工をめぐり準備がすすまれている」と述べている。

エア四階舞台上演される。
「瓜盗人」(井上祐一、井上靖浩)「千鳥」(佐藤友彦、佐藤隆、井上礼之助)。午後三時開演。
入場料前売二千円(当日券二千五百円)問い合わせは名古屋女子大学、林研究室(〇五二二八五二一一)・ギャラリーA・C・S(〇五二二八三三三三三七八)。
なお今回は十二月十一日(土)熱田神宮能楽殿で催される。

宝生流 嘉宝宝会 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一	竹腰勝一	司宝会 名古屋市天白区島田二丁目三〇一 島田橋住宅三三〇電話(八三)七三七二	豊嶋の会 豊嶋三春	金剛流 松野恭憲 松野洋樹 〒606 京都市右京区鳴滝泉殿町一八三 TEL(五五)四六二二二四八番 FAX(五五)四六二二六〇九八番	金剛流 景雲会 国際能楽研究会(I・N・I) インターナショナル能楽インスティテュート (日本・カナダ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・フランス・台湾)	宇高通成面乃会 宇高通成後援会 〒606 京都市左京区高野泉町四〇 TEL(五五)七〇一〇七九三 名古屋事務所 前組英安方 TEL(五五)八五二二二三三四	金剛流 名古屋周星会 岐阜周星会 吉川周子 名古屋千種区西崎町三二一六 電話(五五)七六一二二二五七	伊勢金春会 村富次 伊勢市宮町一四一四一七 電話(五五)二四五六番				
名古屋金春会 林鉄郎 近藤修彦 渡部道三	大阪喜多会 和島富太郎 〒605 宝塚市武庫川町5-45-203 電話(〇七九七)八八〇八	二井栄逸 松阪市殿町1412の3 電(〇五九八)三三〇三二六	喜多流山本才 愛知県高浜市青木町三丁目七の五 電話(〇五六)五三一六一八二番	長田驍後援会 〒514 津市高野尾町三三五一四六 電話(五五)〇六九七番	喜多流 和楽会 和谷衡市 〒516 伊勢市中島二丁目26-12 電話(五五)〇一五九番	宝生欣閑 〒116 東京都練馬区小竹町一五〇一五 電話(〇三)三九九七二七三三〇 (〇三)三九五五(四七)四七九五	桂後藤孝一郎会	森常好 東京都世田谷区世田谷一丁目47-12 電話(〇三)三四二六(四)四五三	豊嶋十郎 〒211 松戸市下矢切五五-15 電話(〇四七三)一九八二	谷田宗二朗 〒603 京都市北区安室街道31-7 電話(五五)八五(五三)八三	高安流岡同門会 清水利宜 高坂康弘 森崎蔵 北野三郎 塩田耕三 村山弘 中川湖舟 伊藤久蔵 谷口雅信	幸友会 幸華能 福井啓次郎 福井良久 福井良治 柳原富司忠

第9回 衣斐正宜後援会能

八月二十八日(土)午後一時始
熱田 神宮 能楽殿
講演 能祇王と平家物語
名古屋大学文学部教授 山下宏明

能祇

衣斐 正宜
水上 輝和
王 中村弥三郎
松本 薫
飯島佐之六
柳原富司忠
一噌 幸政

狂言

燒 茂山千五郎
後見 松本 薫
度 近藤乾之助
飯島佐之六
一噌 幸政

能黒

武田 孝史
塚 飯富 雅介
杉江 元
河村真之介
助川 龍夫
後見 宝生 英雄
東川 光夫
山内 崇生
地謡 久野 正三
浦野 幸三
辰巳 満次郎
辰巳 満次郎
辰巳 満次郎

附祝言

主催 衣斐正宜後援会
一般入場料 五千円
学生 二千円
名古屋市中村区名駅3-26-126
電話(052)586-1110

能と狂言の世界 —普及公演—(三)

八月二十九日(日)午前十一時開演
熱田 神宮 能楽殿

解説 「俊寛」について

和泉流狂言 梅田 邦久
親世流能楽師 梅田 邦久
牛山 伏 佐藤 友彦
主 人 井上 礼之助
太郎冠者 佐藤 融
後見 井上 松次郎

能と狂言の世界 —普及公演—(四)

八月二十九日(日)午後二時開演
熱田 神宮 能楽殿

解説 「葵上」について

喜多流能楽師 長田 曉

和泉流狂言 伯母ケ酒 大野 弘之
井上 祐一
後見 佐藤 友彦
喜多流 長田 曉
能楽 上 飯富 雅介
河村真之介 助川 龍夫
杉江 元 福井啓次郎 大野 誠夫
井上 松次郎

主催 能楽協会 名古屋支部
後援 愛知県・愛知県教育委員会
名古屋市中村区教育委員会

第35回

大衆 能と狂言公演

九月五日(日)
一部 開場九時半・開演十時
二部 開場一時半・開演二時
熱田 神宮 能楽殿

能養

松山 幸親
小島 一英
飯富 雅介
河村真之介
後藤 嘉津幸
大野 好信
間 井上 祐一
後見 瀬戸 三津子
地謡 八神 孝元
今村 嘉男
加藤 保彦

親世仕舞

正 生駒 里翠
地謡 高橋 雅章
今沢 美和
三村 恵子
前野 美和
堤 雅夫
渡辺 雅夫
杉浦 道三

狂言子盗人

井上 松次郎
井上 礼之助
佐藤 友彦
後見 井上 祐一

能藤

飯富 雅介
河村真之介
後藤 嘉津幸
竹市 孝
間 松田 高義
大管 義信
百々 康治
岩切 直次
竹市 幸司
後見 豊嶋 訓三
吉川 周子
地謡 岩切 直次
竹市 幸司

附祝言 [第一部] 午後二時開演

中川 万里奈
八神 孝元
泉 嘉夫
西村 信広
高安 勝久
辻本 正樹
寛 敏一
柳原富司忠
藤田 六郎兵衛
(番組①面につづく)

大倉 源次郎
千538 大阪市淀川区宮原五-15-18
ロースコーポニール大阪七〇五
電話(06)3397-2323

富耀会
千466 名古屋市昭和区滝川町47-117
サザンヒル八事2-103117
電話(833)2-0322番

柳原富司忠
千466 名古屋市昭和区滝川町47-117
サザンヒル八事2-103117
電話(833)2-0322番

瀨尾 乃武
千171 東京都豊島区西池袋1-30-10-305

呉竹会
鉦 一

河村真之介
千466 名古屋市昭和区前山町二丁目二三
電話(052)761-1488二

河村
千602 京都市上京区仁和寺街道千本西入
コスモトウデイ四〇二番
電話(075)462-1411五

吉田 定男

長生会
鬼頭喜太郎
好信

大数方 鬼頭英二
愛知県中島郡平和町城西
電話(0565)1960番

助川 龍夫

助川 龍夫

助川 龍夫

千433 名古屋市中村区下米野町3-27
電話(052)451-1961一

金春流太鼓
青耀会
上田 悟
千500-02 和泉市光明台三丁目15-25
電話(0725)852-11
名古屋市中区丸の内二丁目三
名古屋 一七 那古野神社
電話(052)201-4035

名古屋和泉会
大垣狂言の会
和泉 元秀

茂山千五郎
茂山正義
茂山真吾
茂山千三郎
京都市上京区中筋通り石薬師上ル

茂山 忠三郎
千608 京都市左京区北白川東小倉町28
電話(075)701-2011番

野村 万藏

名古屋和泉会
千500 東京都豊島区南長崎六-15-13
電話(03)3395-0528八番

狂言共同社

狂言 やるまい会
野村又三郎
野村 信行
千460 名古屋市中区正木二丁目16-25
電話(052)331-7553番

能楽講座
能と狂言に親しむ会
梅田 邦久
藤田 六郎兵衛

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

ビデオ撮影
西川 企画
千451 名古屋事務所 名古屋市中区名駅
2-20-13輪の内荘 小坂方
電話(052)571-1581一六
千500 岐阜市北野町20-12
電話(058)986-99番

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五-1-14
電話(052)262-1183番

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル(旭市役所南)
電話(056)561-502三番
電話(056)561-502三番
電話(056)561-502三番

彰 諷 閣
名古屋市中区植田西二-18-01二
電話(052)805-1301一
連絡先 名古屋市中区鳴海町有松長40-9
電話(052)621-142三番

⑥面大衆舞組のつづき

Table listing names and roles for the '面大衆舞組' (Menzō Maigumi) performance, including names like 後見 今沢 美和 and 地謡 黒田 幸博.

附祝言 主催 能楽協会名古屋支部

紅梅記

観世元昭氏逝去、狂言会二つ、観世文庫記念展

七月中旬、近所の知人から「月下美人」の鉢をいただく。蕾が一つ。珍重。二十一日の夜に開花。浪漫的な夜であった。短かくも美しく寂しい花の一生である。

七月二十七日観世元昭氏逝去。五十六歳。一昨年の観世会(名、初同)で鶴亀を舞い、位高く大きな能をみせられた。その後しばらくしてご養生と承ったが、昨年の春仕舞で悪重荷を立派につとめ、ひそかにその回復を喜んだ。しばらく楽屋で同座、きれいな眼で明るなお顔に安んじた。そして、今年二月の同会で「翁」を。天下泰平を祈る翁の姿はまさに絶品。正先の平伏、オモチをつける直前の神妙、天地人の折りのカタチは筆舌に尽くせず。最上の翁であった。終つてしようしやな洋服姿をみたのが最後となる。かなしいかな。

父上左近元滋氏の訓育、賢夫人でやさしかつた母上の愛育。兄・左近元正氏と共にきびしく明るく稽古に終始した。△熱田Vのはじめ頃、兄弟二人の仕舞。小袖留めに始まつて最晩年まで大きな竹を

名古屋観世会定式能(四回)

九月十二日(日)十二時半開演

Table listing names and roles for the '名古屋観世会定式能' performance, including names like 片山九郎右衛門 and 熱田 神宮 能楽殿.

能野 片山九郎右衛門 熱田 神宮 能楽殿

四郎が切りの正先で「ハツチ」「ハツチ」(鉢のこと)と三方に呼びかけるカタチ見事。三十日狂言協議会記念公演。狂言の「会談」で開かれ、その後待狂言二番、小舞十五番に大蔵弥右門氏の語(秀逸)。大蔵・和泉共演の二番はみもの。末広は果報者が井上松次郎(和)、太郎冠者が山本東次郎、傘売りに茂山千五郎。松次郎だけみても、松一代の出来。心の能と言言葉がある。心の狂言なることが許されたら、正にそれに当る。七九歳。二人のやりとりは「雲形本」によるととき、かつて井上新三郎氏(礼之助父上)が茂山弥五郎氏(のち善竹姓、共に故人)と素懐落を共演したことを思い出す(昭和二八中日五流能)。なお松次郎氏は鳥帽子をつけた。まことによい狂言であった。

千切木(シテ茂山三郎)も二流儀で、みもの。忠三郎佳。小舞十五番もこれまたみもの。狂言の幅の広さを示す。中でも京童(茂山千之丞、地同千五郎)は傑作。亡父千作氏の得意の曲である。

七月十一日朝日狂言会。三五回を迎える。永い将来を祈りたい。また東西より来名の大蔵・和泉の二流儀、時々はがらり役者をかえっていた。本日の愚坊・番竹幸四郎。熱田の愚坊の着替えをさせる手順よし(安東伸元)。幸

八月一日津島の天王新能。水上舞台の道成寺(春、本田光洋)は成功(鐘釣り、鐘入りはか)であったと報ずる(中日、二日朝刊)。(立秋の日、野村広二)

鬼頭八郎七回忌追善能

九月十五日(水)午前十時始

Table listing names and roles for the '鬼頭八郎七回忌追善能' performance, including names like 後見 武田 邦弘 and 地謡 今村 嘉彦.

附祝言 主催 名古屋観世会

能面、翁装束をはじめけんらん豪華、落ち着いた感じのものが並ぶ。扇・カヅラ帯など色々。一番感銘をうけたのは文書類。世阿弥直筆の花習の一端。達筆。これだけでもよいのに、卒都婆小町の古い謡本。「白黒のくわい」の処が開かれ、その横に関寺小町の冒頭がみえる。所要二時間。

平日は三百人位の由。六月十四日には此の文庫のため中心になつて終始努力をされた表章博士の記念講演があった。実はこの日名古屋観世会があった。観世流同好の方々は折角の機会を逃がしたことになる。聞けばこの日は月例講演会の開催日とのこと。それにしては臨時の会が開けなかったのだから。立派な目録「観世宗家・幽玄の華」(二千三百円)受贈。

八月一日津島の天王新能。水上舞台の道成寺(春、本田光洋)は成功(鐘釣り、鐘入りはか)であったと報ずる(中日、二日朝刊)。(立秋の日、野村広二)

八月一日津島の天王新能。水上舞台の道成寺(春、本田光洋)は成功(鐘釣り、鐘入りはか)であったと報ずる(中日、二日朝刊)。(立秋の日、野村広二)

名古屋観世九阜会定例能(納会)

九月十八日(土)午後一時始

Table listing names and roles for the '名古屋観世九阜会定例能' performance, including names like 後見 佐々木 勝郎 and 地謡 高橋 謙一.

附祝言 主催 事務所 名古屋観世九阜会

能殺生石 観世 喜之 白頭 高安 勝久 御原 昌忠 鬼頭 喜太郎 藤田 六郎兵衛

能百 万 杉江 元 福井 啓次郎 鬼頭 好信 佐藤 友彦

能三 西行 瀬戸 綾子 吉田 定男 藤本 利三郎 後藤 嘉津幸 橋本 勝子 後藤 嘉津幸 富士道 周明

要会員券 当日臨時会員券 四千元

切能物としては、「羅生門」「張良」「大会」「皇帝」「檀風」「うかひ」「松山鏡」「土蜘蛛」「乱」「春日龍神」「藍染川」「融」の十二曲である。このうち「羅生門」が四番目に演じられ、「張良」も同じである。「大会」「皇帝」も同じである。「檀風」は、切能として演じられているが、「皇帝」は、切能、「檀風」は三番目である。次ぎの「うかひ」は、切能になつてゐるが、「松山鏡」は、二番目に演じられ、「土蜘蛛」は、四番目である。

「乱」は、切能として演じられているが、「春日龍神」は、切能として演じられ、「融」は五番目である。

享保の頃の能の上演順序は、かなり流動的であつたことが、知られる。

切能物は、働物が、その中心である。小見物物としては、「皇帝」「鶴岡」「松山鏡」「檀風」の四曲が上げられる。翌(しかみ)物は、「土蜘蛛」「羅生門」の二曲である。大飛出物としては、「藍染川」の一曲である。異舞物としては、「春日龍神」の一曲である。大見物物としては、「大会」「張良」の二曲である。

早舞物としては、「融」の一曲のみである。その他、「乱」として、特殊な舞踊物が二曲上げられる。

狂言については、「三本柱」「狂言」として、「三本柱」「狂言」の四曲。

大名物狂言としては、「栗田口」「入間川」「うづは猿」の三曲。舞物狂言としては、「包丁舞」一曲。太郎冠者物としては、「棒しばり」「千鳥」「文蔵」「葉落」の四曲。

出家物としては、「愚坊」「通門」「花折」「釣狐」「泣尼」の五曲。女物としては、「どん太郎」「花子」「千切木」「石神」の四曲。

鬼物としては、「朝比奈」「節分」の二曲。「山伏物」としては、「泉山伏」の一曲。雑狂言としては、「米市」「ぶあく」「才宝」「八文字」「合柿」の五曲。不明「三人不仁」一曲。以上、三十曲の内訳である。

概して、出家物、雑狂言物が多く、狂言、太郎冠者物、女物が続いている。それに比して、山伏物、舞物が少なく、それぞれ一曲のみで、鬼物が二曲となつてゐる。当時の好みも、狂言の曲目選定にも影響を与えてゐるであろう。

享保の頃の能組を、藤田家所蔵の「御能御舞子留」によつて、少しくわしく見てゆくことにした。

享保十二年(五月十九日) 御城泉光院様御入御能組

加茂 シテ寺田門治 ワキ井川市十郎 大鼓石井弥市 小鼓福井四郎兵衛 太鼓諸井源兵衛 笛藤田六郎兵衛

兼平 シテ横川与兵衛 ワキ小野半四郎 大鼓木村三郎兵衛 小鼓橋本与右衛門 笛治上善左衛門

松風 シテ田中源之丞 ワキ西村庄兵衛 大鼓弥市 小鼓四郎兵衛 笛藤田清兵衛

芦刈 シテ安田又次郎 ワキ市十郎 大鼓三郎兵衛 小鼓与右衛門 笛神垣六右衛門

藤戸 シテ源之丞 ワキ庄兵衛 大鼓弥三郎 小鼓四郎兵衛 笛平岩加兵衛

熊坂 シテ門治 ワキ河村三之丞

尾張藩の能の歴史 三三七

辻 宏一

助 大鼓三郎兵衛 小鼓与右衛門 太鼓近藤長右衛門 笛六右衛門 中入より

儀禮 シテ与兵衛 ワキ市十郎 大鼓源三郎 小鼓四郎兵衛 笛六郎兵衛

狂言 山脇源助 さつまの守 早川千次郎 孫野村又三郎 神なり 山脇和泉

同五月廿一日 瑞祥院様御招請 御能

翁 シテ源之丞 千歳 又次郎 三番叟 源助 面箱 嘉六

礼 竹生嶋 シテ又次郎 ワキ庄兵衛 大鼓弥三郎 小鼓与右衛門 太鼓武左衛門 笛六右衛門

実盛 シテ源之丞 ワキ三之助 大鼓三郎兵衛 小鼓三上又次郎 太鼓諸井吉右衛門 笛加兵衛

湯谷 シテ門治 ワキ庄兵衛 大鼓弥市 小鼓四郎兵衛 笛六郎兵衛

羅生門 シテ与兵衛 ワキ庄兵衛 大鼓三郎兵衛 小

観世流謡曲本 ちくさ正文館

ちくさ駅前 電話01137

鼓与右衛門 太鼓長右衛門 笛吉左衛門

国恒 シテ源之丞 ワキ市十郎 大鼓孫三郎 小鼓四郎兵衛 笛清兵衛

天鼓 シテ門治 ワキ三之助 大鼓三郎兵衛 小鼓与右衛門 太鼓武左衛門 笛六右衛門

感謝宮 シテ源之丞 ワキ市十郎 大鼓孫三郎 小鼓四郎兵衛 太鼓武左衛門 笛清兵衛

鶴鶴小町 シテ源之丞 ワキ市十郎 大鼓孫三郎 小鼓四郎兵衛 笛清兵衛

俄ニ中入より 付 放下僧 シテ門治 ワキ庄兵衛 大鼓弥市 小鼓与右衛門 笛加兵衛

春日竜神 シテ又次郎 ワキ三之助 大鼓三郎兵衛 小鼓与右衛門 太鼓長右衛門 笛六右衛門

名古屋宝生会定式能 (第37期)

九月十九日(日) 午後一時始

熱田 神宮 能楽殿

能田 竹内 澄子 村 杉江 元 鬼頭 英二 福井 良治 鹿取 希世

後見 玉井 博祐 地謡 鈴木久仁七 杉浦 唯雄 馬場 富四夫 辰巳 満次郎 稲川 満次郎

仕舞 班 耶 戸田 和 地謡 辰巳 孝 鬼頭 嘉男 馬場 富四夫 竹腰 勝一

仕舞 竹生 島 佐藤 耕司 地謡 鬼頭 嘉男 馬場 富四夫 竹腰 勝一

能蟬 丸 飯富 雅介 吉田 定男 藤田 六郎兵衛 杉江 元 福井 啓次郎

能藤 全 柴田 勲 立家 佐々木 輝雄 鳴尾 福川 寿一 子方 松浦 一徳 辰巳 満次郎

能藤 榮 高安 勝久 筑 敏一 大野 龍夫 後見 高橋 正章 地謡 堀 弘司 堀 哲也 辰巳 満次郎 馬場 富四夫 佐藤 耕司

鳳鳴会大会 九月二十三日(秋分の日) 十時始 熱田 神宮 能楽殿

〔御来聴歓迎〕 主催 武 鳳 田 鳴 志 房 会

盛 松木 千俊 矢野 義章 山森 幸男

弱法師 山下 惠英子 村上 郁子

俊 成経 木下 義國 康頼 伊藤 義郎 村上 清

家 大坪 重遠 武田 志房

安 勸進帳 木本 仁之 松井 弘

嬢 捨 浅井 一元 武田 志房

能百 萬 村瀬 堤 山崎 哲生 柳原 富司 助川 竜夫 藤田 六郎兵衛

雲 院 石井 鏡子 安福 光雄 助川 竜夫 藤田 六郎兵衛

花 院 吉田 明 柳原 富司 藤田 六郎兵衛

天 鼓 長谷川 京子 河村 総一郎 助川 竜夫 藤田 六郎兵衛

〔御来聴歓迎〕 主催 武 鳳 田 鳴 志 房 会

平成5年8月・9月放送予定

〔8月〕NHK・FM能楽鑑賞 (午前8時～9時)
22日(日) 観世流「松浦佐用姫」大槻 文蔵
29日(日) 金春流「蟬丸」金春 晃実
〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞 (午前8時～9時)
5日(日) 観世流「隠」関根 祥六
12日(日) 宝生流「梅枝」近藤 乾之助
19日(日) 喜多流「鳥退船」喜多 節世
26日(日) 観世流「清経」杉浦元三郎

テレビ祝日能・狂言

NHK・教育テレビ (午前9時～10時)
9月15日 興福寺新能から
①狂言「酒臺」～大 蔵 流～
茂山千五郎・茂山忠三郎
②能「鶴 詞」～金 春 流～
金春 信高
9月23日 狂言「唐人相撲」～和 泉 流～
野村万蔵・野村耕介

「宝生会」「能と狂言の世界」と
「九阜会」「幸謡会」「朝日狂言会」
「菅刈」 妻との偶然の再会に
驚ろき、落胆の身を恥じて憐愍に
逃げるシテ・耕司。連れ戻すと

「菅刈」 妻との偶然の再会に
驚ろき、落胆の身を恥じて憐愍に
逃げるシテ・耕司。連れ戻すと
言うワキ従者・元を押し留め、ワキ
正に追うツレと、勾欄越しに立っ
て畏まるシテと、勾欄越しに立っ
たままのツレとの掛合が、観世の
ようにツレも権懸へ行って下居の
それと比べ、頭ごなしと見えるの
が、女権の強い(?)現代風で面
白かった。尚、笠ノ段で笠を受け
る際、後見から何かあったらしく、
以後慎重になり過ぎて伸びやかさ
が失せたのは残念。更に、ツレと
同道するワキの、道行の省略は不
審。(1時間14分)

「三井寺」 シテ一。何事も
なく面始終曇りがちに運び、正中
下居して観音に祈る前場、傷心
の雰囲気。後場は、アイ能力
「高義」の月見の座敷の小舞「風
車」が別荘。これが引き金で、後
シテ女権を誘うことになり、
カケリ以後、月と鐘に絡まれる
情趣は、子方の存在が気になると、
子方以上に落ちて着けなかった。

「三井寺」 シテ一。何事も
なく面始終曇りがちに運び、正中
下居して観音に祈る前場、傷心
の雰囲気。後場は、アイ能力
「高義」の月見の座敷の小舞「風
車」が別荘。これが引き金で、後
シテ女権を誘うことになり、
カケリ以後、月と鐘に絡まれる
情趣は、子方の存在が気になると、
子方以上に落ちて着けなかった。

「天王新能」(8月1日、
津島市天王川公園)での演能は
「道成寺」であった。第十回記念
能であり、シテは第一回からこの
新能にかかわってこられていた金
春流の本田光洋師である。
天王川公園内の大きな丸池に、
作業用台船を浮かべて水上舞台を
つくられたことであるが、屋
根形に組まれた金属の骨組には鐘
を吊るための滑車を取りつけら
れた。上にはテントの屋根がのっ
ていた。

「天王新能」(8月1日、
津島市天王川公園)での演能は
「道成寺」であった。第十回記念
能であり、シテは第一回からこの
新能にかかわってこられていた金
春流の本田光洋師である。
天王川公園内の大きな丸池に、
作業用台船を浮かべて水上舞台を
つくられたことであるが、屋
根形に組まれた金属の骨組には鐘
を吊るための滑車を取りつけら
れた。上にはテントの屋根がのっ
ていた。

「観能随想」
「天王新能」
を楽しむ

「観能随想」
「天王新能」
を楽しむ

割烹・小料理 城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路(中区栄3-10)
電話 241-0248

株式会社 セントラルパーク
本社 名古屋市東区泉1丁目23-36(NBN泉ビル)
PHONE 052-961-6111
F A X 052-953-2910

平成5年9月・10月放送予定

[9月] NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
26日(日) 観世流「清経」杉浦元三郎
[10月] NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
3日(日) 観世流「三輪」木原康夫
10日(日) 宝生流「碓」武田喜永
17日(日) 金春流「松虫」金春安明
24日(日) 観世流「船井慶」藤井徳三
31日(日) 喜多流「花鏡」ほか友枝喜久夫

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 0-36393
購読料 1年1000円
郵送の場合 1年1500円
一 部 90円

第5回一宮薪能

11月18日能「井筒」「殺生石」

一宮薪能は、一宮薪能実行委員会主催で今秋十一月十八日(木)一宮市民会館大ホールで開催される。今回は全園生進習フューステイバル「まなびピア」99イン愛知の前後祭として企画、一宮市、一宮市教委、一宮文化団体協議会などが後援。午後五時開演。
演能は、能「井筒」(シテ下田雄三)

大曲「望月」上演

10月9日久田徹二
「能」リサイタル
観世流シテ方・久田徹二師主催による「能」リサイタルがきたる十月九日、熱田神宮能楽殿で公演される。

広田後援会能

金剛流・広田後援会主催「第八十一回後援会能」は、十月三日金剛能楽堂で開演。午後一時半開演。

大阪

能の変遷

大槻能楽堂公演
大槻能楽堂では、このし能楽堂築十周年記念公演として多彩な演者による能・狂言の上演を企

忠三郎狂言会

10月26日 大槻能楽堂
大槻流狂言方・茂山忠三郎氏は今春紫綬褒章を受章、その記念別会をさきに京都で開催、さらに忠三郎狂言会を東京・国立能楽堂(九月十三日)につづき、福岡・大瀧公園能楽堂(十月二十日)、大阪・大槻能楽堂(十月二十六日)で開催する。大阪・大槻能楽堂の演目は次のとおり。

画、能の魅力を探るシリーズの十月以降番組は次の通り。
能の魅力を探るシリーズ
■能の変遷(六百年の流れの中で)
10月30日(土) 2時
「シテ一人主義への変遷」
講師 羽田 潤
能 鶴 若松 健史
11月27日(土) 2時
「書き直された能」
講師 西野 春雄
能 雲 林 院 浅見 真州
12月18日(土) 2時
「現代に訴える演出」
講師 堂本 正樹
能 昭 君 観世 徳夫
問い合わせ先 大槻能楽堂事務所
電話 〇六七一八〇五五

和泉流狂言大会

九月二十六日(日) 十一時始
熱田神宮能楽殿

狂言組

昆布売 大名加藤 弘 昆布売 能登香奈恵
竹生嶋 太郎冠者 安原 美枝 主 人村上 鏡子
瘦 山 賊 増田 昭典 女 長谷川寿美子
歌 争 何 某 佐藤 祐子 何 某 林 朝子
不見不聞 太郎冠者 石黒 生子 主 人金子 路江
水掛 舞 男 吉井 秀彦 女 佐藤 融
宇治の晒 横山英利子
小舞 員 尽し 恒吉 幸子
福之神 福の神 中北字多子 参詣人 金子 祐子

先代喜之十七回忌追善 名古屋泉楽会秋季大会

十月三日(日) 午前十時始
熱田神宮能楽殿

番組

俊 寛 高安 勘久 吉田 定男
後見 観世 喜正 地謡 高橋 謙一
中野 直也 加藤 保彦 五木田 三郎
後見 観世 喜正 地謡 高橋 謙一
中野 直也 加藤 保彦 五木田 三郎
俊 寛 高安 勘久 吉田 定男
後見 観世 喜正 地謡 高橋 謙一
中野 直也 加藤 保彦 五木田 三郎

能楽

上 杉江 元樹 寛 敏一
梓ノ出 辻本 正樹 福井啓次郎
後見 観世 喜正 地謡 高橋 謙一
中野 直也 加藤 保彦 五木田 三郎
後見 観世 喜正 地謡 高橋 謙一
中野 直也 加藤 保彦 五木田 三郎

能楽

追 加 番外仕舞 船 井 慶
後見 観世 喜正 地謡 高橋 謙一
中野 直也 加藤 保彦 五木田 三郎
後見 観世 喜正 地謡 高橋 謙一
中野 直也 加藤 保彦 五木田 三郎

千切木 太郎 二村 敏勝
主権狂言 共同社
(終演予定 四時三十分頃)

追 加 番外仕舞 船 井 慶
後見 観世 喜正 地謡 高橋 謙一
中野 直也 加藤 保彦 五木田 三郎
後見 観世 喜正 地謡 高橋 謙一
中野 直也 加藤 保彦 五木田 三郎

猶惠会秋の大会

十月二十三日(土)午前十時半始

熱田神宮能楽殿

班田村 大河戸こと 岡田晃一
班田村 並木明子 池内光之助
班田村 井戸和男
班田村 梅若善久
班田村 熊沢恵美子

藤戸 宮崎勝二 梅若修一
藤戸 梅若善久
藤戸 熊沢恵美子

舞子 富士太鼓 水野孝美 河村総一郎 藤田六郎兵衛
葛城 杉浦一枝 河村総一郎 藤田六郎兵衛
弱法師 日下すず子 後藤孝一郎 藤取希世

舞子 波 安藤美恵子 河村総一郎 藤田六郎兵衛
雲林 萩野ちとせ 河村総一郎 藤田六郎兵衛
熊野 鈴木ふく 福井啓次郎 藤取希世

郁風会大会

十月二十四日(日)午前十時始

熱田神宮能楽殿

小鍛冶 名倉恵子 足立由起
小鍛冶 佐古由香子

花月 大島修 前田宝秀

仕舞 鶴 志津明子
仕舞 正 石本純子
仕舞 藤 名倉恵子
仕舞 野 天野到

舞子 野 高砂 前野郁子
舞子 高砂 前野郁子
舞子 高砂 前野郁子

「通鼓」シテ徹二。ワキ僧。
勝久に問われ、平氏一門が果てた
浦の悲話を、ツレ一政との掛合。

「青陽会」「花伝の会」「薪狂言」「野村
四郎の会」「衣斐正宜後援会」
竹尾邦太郎



復誦してスツバに定対する弘之の
愚直がよい味。(33分)
「半部」シテ祖父江修一。襟
白赤・白摺箱(金ノ菊菱文様)。

「小鍛冶」シテ徹二。ワキ僧。
勝久に問われ、平氏一門が果てた
浦の悲話を、ツレ一政との掛合。

「通鼓」シテ徹二。ワキ僧。
勝久に問われ、平氏一門が果てた
浦の悲話を、ツレ一政との掛合。

「半部」シテ祖父江修一。襟
白赤・白摺箱(金ノ菊菱文様)。

「小鍛冶」シテ徹二。ワキ僧。
勝久に問われ、平氏一門が果てた
浦の悲話を、ツレ一政との掛合。

発行 能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18

(郵便番号 464)

電話 (052) 731-7984

振替口座 名古屋 0-36393

購読料 1年 1000円

送料 1年 1500円

購読部 90円

能楽の友

眼とメガネを
考える

2F 眼科
クリニック

1F
メガネ

スギウラ
岡崎・康生通東
☎(0564)21-1072

演能カレンダー (熱田神宮能楽殿)

10月	23日(土)	猶都	恵風	会	(来場歓迎)
	24日(日)	豊	星	会	(来場歓迎)
	31日(日)	豊	星	会	(来場歓迎)
11月	3日(祝)	幸友	秋の	会	(来場歓迎)
	6日(土)	万作	石	会	(有料) (番組①面)
	7日(日)	叶青	石	会	(有料) (番組①面)
	13日(土)	世定	式	会	(有料) (番組②面)
	14日(日)	修会	大	会	(有料) (番組②面)
	20日(土)	生会	定	会	(来場歓迎)
	21日(日)	宝生	会	定	(有料) (番組②面)
	23日(祝)	名古	屋	和	(有料) (番組③面)
	27日(土)	清田	親	正	(来場歓迎)
	28日(日)	久田	親	正	(来場歓迎)
12月	4日(土)	名古	屋	能	(有料)
	5日(日)	末助	け	の	(有料)
	11日(土)	鳳泉	の	会	(有料)
	12日(日)	登泉	の	会	(有料)
	26日(日)	乱	の	会	(有料)

(演能変更の節はご了解下さい)

熱田能楽殿 改修募金 勸進能

12月26日 4年ぶりの「乱能」

能楽協会名古屋支部(野村又三郎支部長)主催により、きたる十二月二十六日(日)熱田神宮能楽殿で「熱田神宮能楽改修募金勸進能」と銘うって「乱能」が開催される。

支部主催の「乱能」は、平成元年の年末に、名古屋市制百年を記念しての公演、その前は昭和六十年に「熱田神宮能楽創立三十周年記念」の乱能が催された。今回は、熱田神宮能楽改修募金に充てられ、三十八年を経過し、修理、補修等の改修が求められ、この入場手形は三千円。

改修迫られる 熱田能楽殿

中部能楽界の拠点として、熱田神宮能楽殿が能楽界の強い願望と熱田神宮の戦災復興の遺構の一環である文化施設として昭和三十年に竣工して以来、運営委員会は建造物の増築、修理、施設の拡充、周辺の整備に努力を重ねてきているが、建築四十年に近く、その維持のために改修が避けられず、熱田神宮能楽殿運営委員会(委員長 岡地幸雄熱田神宮権宮司)では、

「狂言共同社の百年」

編者・井上松次郎氏
上下2巻 千六百ページの資料篇

平成三年に百年を迎え、代表者の井上松次郎氏代々の人々が保管していた百年間の狂言の次第書を中心とした資料を編さんした題名「狂言共同社の百年」(上下二巻)がこのたび刊行された。

能楽殿改修のお知らせ

当熱田神宮能楽殿は昭和三十年に建設され、爾来三十八年を経過し、客席の施設の改修拡充をはじめ各所の修理を必要とするに至りました。このままでは将来にむけて維持管理が出来ない状態であり、先般本運営委員会ではこれを憂慮し、これ等の対策について会議を重ね、近年中には全面的な改修が必要であるとの結論となりました。

先ずはこの現状を関係各位にお知らせ申し上げ、近々に募金活動を開始いたしたく存じます。何卒右事情をご察の上、改修募金の節には諸費多端の折柄と存じますが、何分のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成五年八月
熱田神宮能楽殿運営委員会

平成三年に百年を迎え、代表者の井上松次郎氏代々の人々が保管していた百年間の狂言の次第書を中心とした資料を編さんした題名「狂言共同社の百年」(上下二巻)がこのたび刊行された。

編者は井上松次郎氏、発行所名古屋狂言共同社。

内容は総頁千六百六十三頁(上巻八百七十二頁、下巻七百九十一頁)A4判の厚厚な資料篇。

狂言共同社のあゆみ、能楽協会名古屋支部、名古屋能楽倶楽部主催能はもろん共同社関係出演の総覧はじめ各所各会館の能能など、どう大なる演能番組が収録されている。

編者の井上松次郎氏の発起と熱意、FM愛知本多静雄氏の積極的な協力援助、関係者の資料提供などにより完成した力作で能楽界にとりて貴重な資料の集大成である。

幸友会秋の会

十一月三日(文化の日)午前十時始
熱田神宮能楽殿
泉 嘉夫 松久 素子

一調成陽宮
ほか難子、連調など十六番
福 幸 井 啓 次 郎 会

〔御来場歓迎〕

名古屋市民芸術祭'93協賛
第五回 濤 華 能

十一月三日(文化の日)午後二時半始
熱田神宮能楽殿

講演 金剛 能楽評論家 山崎有一郎
講演 舞 能 組
舞 能 乱 広蓋之式 金剛 永 鏡 鏡一 鬼頭喜太郎 柳原富司 鹿取 希世

狂言 素袍落 野村又三郎 井上祐一 後見 井上松次郎
一調花 笹 宇高 通成 後藤孝一郎
植田 恭三 豊嶋三千春 飯沼 雅介 河村総一郎 藤川 竜夫
能 内外 高安 勝久 杉江 元 福井啓次郎 藤田 六郎兵衛
後見 金剛 永 鏡 地謡 上村 正美 中尾 六三郎
松野 洋樹 竹市 幸司 塚本 嘉樹

附祝言 主催 福 井 啓 次 郎
入場券 指定席八千円、自由席五千円
取扱いチケットぴあ、市内プレイガイド
熱田神宮能楽殿 出演楽師宅
名古屋市中区大須三丁目二四〇 福井啓次郎
TEL(052)241-1314
FAX(052)241-1357

野村万作「釣狐」公演
十一月六日(土)午後二時開演
熱田神宮能楽殿

解説 武蔵野女子大学教授 小林 責
舞 能 子 天 鼓 友枝 昭世 河村総一郎 一唱 幸弘
舞 能 子 狐 野村 万作 野村 武司
後見 野村又三郎
入場料 指定 席八千円 主催 万 作 の 会
自由席七千円、学生席三千五百円 協力 名古屋能楽鑑賞会
取扱いチケットぴあ、市内各プレイガイド
熱田神宮能楽殿、名古屋能楽鑑賞会事務局
お問い合せ 名古屋能楽鑑賞会
事務局 名古屋市中区大須四一九一六
岩田方(Tel052-722-4000)

叶石会・一謡会大会

十一月七日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

葉井 筒 近藤 重治 高野瀬三
藤 戸 長戸 花子 内田 睦子

葉子 鶴 前野美津子 助川 龍夫
後藤嘉津幸 竹市 学
後藤嘉津幸 大野 誠
油ヶ谷 豊 竹市 学
後藤孝一郎

葉子 松 運吟千 手 井上 房枝
中野 房枝

葉子 野 合學留 柳原富司 鹿取 希世
吉田 明 鹿取 希世
中村多恵子 鹿取 希世
後藤孝一郎

葉子 東 北 鹿取 希世
後藤孝一郎

葉子 運吟夕 顔 吉田 康子 角田 富美 伊藤 康子 吉田 明 吉田 明

葉子 山 姥 三宅川公香 河村総一郎 竹市 学
後藤孝一郎 高木 和子 大野 誠
柳原富司 助川 龍夫
川瀬 和子 鹿取 希世
後藤孝一郎 鹿取 希世
林 喜久子 藤田 六郎兵衛
後藤孝一郎

葉子 阿 漕 助川 龍夫
大野 誠
鹿取 希世

葉子 砧 前 鹿取 希世
藤田 六郎兵衛

葉子 三 輪 白式神々楽 河村真之介
福井啓次郎 藤田 六郎兵衛
福井啓次郎 鹿取 希世
林 博敬 大野 誠
柳原富司 鹿取 希世
村木 寛茂 鹿取 希世
福井啓次郎

葉子 三 井 寺 山本 真義 河村総一郎
吉田 真美子 鬼頭喜太郎
福井啓次郎 藤田 六郎兵衛
海田トシ子 鬼頭喜太郎
柳原富司 藤田 六郎兵衛
井上 苑枝 鬼頭喜太郎
福井啓次郎 大野 誠

葉子 天 鼓 盤 渉 河村真之介 竹市 学
後藤嘉津幸

葉子 融 五段 河村真之介 竹市 学
後藤嘉津幸

葉子 小袖曾我 武田 邦弘
後藤嘉津幸

葉子 附祝言 主 葉 石 会
主 葉 石 会

〔御来場歓迎〕

吉岡雅日記

(145)

菊採東離下

えと文 二井栄逸

「菊を採る東離のもと」これ
は、菊去来の辞(ききよらいの
じ)で有名な、陶淵明(とうえん
めい)の詩の一部で、私もよく書
く一行書である。

陶淵明は六朝時代の東晋の詩人
で名は潜と言った。自ら五柳先生
(ごりゅうせんせい)と称した事は、
自分の庵に五本の柳を植えた為で
ある。

彭沢(ほうたく)の令に補せら
れた淵明は、官吏になつたものの、
彼の豊かな見識と気高い信念は周
りの人々に理解されず、幻滅を味
つて、ついに在官八〇余日をもち
て官界を辞し、故郷にかえつた。
其の時四十一才の若さであった。
山に囲まれた風光明媚な土地の
風景を愛し、そこで悠々自適の生
活を全うするのである。

地位や、名譽から遠ざかり、酒
と菊を愛した人生であった。
唯の東端に植えた菊を手折り、
美しい南山を悠然と眺めて幸せに
歎んでいる。

金剛流「内外詣」上演

伊勢神宮 遷宮記念 11月3日 湊華能

幸清流小鼓・福井啓次郎師主催
の「海華能」は今回第五回を迎
え、きたる十一月三日、伊勢神宮
のご遷宮にちなみ金剛流のみにあ
る参宮の能「内外詣」(シテ豊嶋
三千春)が熱田神宮能楽殿で上演
される。名古屋で初めての公演。
演能は名古屋市民芸術祭一九九
三年度協賛、番組は「内外詣」の
ほか狂言「系袍落」舞囃子「乱」
一編「花筐」など。(番組①面掲
載)

「能面型紙集」

玉川大学出版部 刊行

玉川大学出版部は、能面打ちの
技法書として「能面型紙集」(能
楽資料館館長・中西通氏編)の刊
行を企画(本紙平成五年三月号既
報)。このほど上梓され現在販売
中である。

収録作品は、世阿弥の時代から
江戸時代の作品まで代表作二十五
種六一一、電話〇四二七一一三
九八九三五番。



浸れるのは、世俗から離れたから
こそ、たとえ、庵が人里にあろう
と心静かに暮らすことが出来、あた
かも山奥深く住んでいるようだと
歎んでいる。

四番目能として上演される、虎
深三笑は、シテを思遠神師、ツレ
を陶淵明と陸修静として演出され
る。(平成五年十月十一日記)

観世栄夫)
なお梅若盛義後援会では、明年
三月二十七日(日)東京・渋谷区
松海の観世能楽堂で「梅若盛義二
十三回忌追善能」を開催する。
能「清経」(観世鏡之丞)能
「鶴崎小町」(梅若盛義)狂言「千
切木」(大藏弥右衛門)能「鶴崎」
(梅若六郎)の上演。

朝日ギャラリー(名古屋・中区栄
丸栄スカイル10階)で開催、約
三十五点を展示する。
とくに同教室で八十歳から能面
打ちを学び、ことし卒寿を迎えた
水谷定吉氏の作品も展示される。

平成5年10月・11月放送予定

- 〔10月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
 - 24日(日)観世流「船井慶」藤井徳三
 - 31日(日)喜多流「花筐」ほか友枝喜久夫
 - 〔11月〕NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
 - 7日(日)観世流「安達原」梅若盛義
 - 14日(日)宝生流「熊坂」三笑朝倉象太郎
 - 21日(日)観世流「七騎落」泉泰孝
 - 28日(日)金剛流「小督」金剛巖
- テレビ祝日能
- NHK教育テレビ(午前9時)
- 11月3日(祝)観世流能「道成寺」観世鏡之丞ほか
 - 11月23日(祝)和泉流狂言「釣狐」野村万作ほか

青陽会定式能(第47期)

十一月十三日(土)十二時半始

熱田神宮能楽殿

仕舞 柏崎 道行 生駒 里翠 地謡 三村 今沢 美和 惠子

能下 僧 高安 勝久 吉田 定男 鹿取 希世

間 井上礼之助

仕舞 実盛 盛キリ 梅田 邦久 加藤 保彦

松 風 今村 嘉勇 地謡 加藤 保彦

玉 雙 玉木 孝男 地謡 加藤 保彦

船 弁慶 清沢 一政 高橋 一英

今沢 美和 河村真之介 大野 誠

能井 筒 杉江 元 柳原富司忠

間 佐藤 友彦

仕舞 生駒 里翠 馬場 信子 加藤 保彦

後見 久田 徹二 地謡 須部 嘉勇 梅田 邦久 加藤 保彦

狂言 栗焼 佐藤 友彦 井上礼之助 後見 大野 弘之

加賀 敏彦 鬼頭 英二 後藤 嘉津幸 竹市 好信

能野 守 飯富 雅介 後藤 嘉津幸 鬼頭 好信

間 大野 弘之 生駒 里翠 清沢 一政

後見 近藤 幸江 地謡 今村 嘉勇 高橋 一英

後見 武田 邦弘 今村 嘉勇 高橋 一英

名古屋観世会定式能(五回)

十一月十四日(日)十二時半始

熱田神宮能楽殿

景 清 高安 勝久 河村真之介 藤田 大長兵衛

後見 武田 邦弘 古橋 正邦 観世鏡之丞

入間川 狂言 佐藤 友彦 井上松次郎 後見 大野 弘之

観修会秋の会

十一月二十日(土)

熱田神宮能楽殿

笠之段 武田 宗和 地謡 本川 雅章

笹之段 観世 曉夫 地謡 梅田 邦久

鶴之段 武田 志房 地謡 正邦 久章

関根 祥六

城 宝生 欣哉 久田 舜一 鹿取 希世

間 井上 祐一

後見 久田 徹二 地謡 加藤 保彦

後見 梅田 邦久 地謡 高橋 一英 正邦 久章 小島 一英

附祝言 主催 名古屋 観世会

〔要員券〕 当日券 八千円(自由席)

名古屋宝生会定式能(第47期)

十一月二十一日(日)午後一時始

熱田神宮能楽殿

能五 葛 杉江 元 鬼頭 英二 鹿取 希世

間 井上礼之助

狂言 文山 井上松次郎 後見 井上礼之助

能雲 林院 飯富 雅介 鬼頭 好信

間 井上 祐一

後見 辰巳 満次郎 地謡 大森 尚人 松尾 通夫 純道 幸三 鬼頭 嘉男

後見 辰巳 満次郎 地謡 久野 幸三 鬼頭 嘉男

仕舞 小笠 辰巳 孝 戸内 澄子 竹内 澄子

驚 辰巳 正宜 辰巳 孝 戸内 澄子 竹内 澄子

衣 辰巳 正宜 辰巳 孝 戸内 澄子 竹内 澄子

能錦 木 飯富 雅介 河村真之介 藤田 大長兵衛

間 佐藤 友彦

後見 辰巳 満次郎 喜男 地謡 三橋 茂三 寺部 一威 稲美 辰巳 満次郎 竹腰 勝一

附祝言 主催 名古屋宝生会

〔要員券〕 五千元

臨時要員券

事務所 名古屋昭和区川名本町二ノ五一 鬼頭嘉男方 電話七六一四九三五

同正月廿五日 泉光院御入御 能 弓八幡 シテ門治 ワキ(礼) 庄兵衛 大鼓六之助 小鼓橋本与右二門 太鼓近藤長右二門 笛神垣六右二門

尾張藩の能の歴史(二七) 辻 宏 一 狂言 室のつち 千次郎 花盗人 源助 悪坊 忠三郎 千鳥 源助 泉山伏 同人

東北 シテ田中百一郎 大鼓辻 忽左二門 小鼓高田伊右 二門 笛三村初八 此間小謡数々 祝言 養老 シテ源之丞 大鼓大倉七左二門 小鼓与右二門 太鼓速水猪左二門 笛庄兵衛

八嶋 シテ又三郎 ワキ市十郎 大鼓兵助 小鼓平左二門 笛加兵衛 井筒 シテ門治 ワキ庄兵衛 大鼓弥市 小鼓与右二門 笛六右二門

名古屋和泉会別会 十一月二十三日(祝)午後二時始 熱田 神宮 能楽殿 和泉 淳子 三宅藤九郎 (和泉祥子) 和泉 元弥 井上礼之助 井上松次郎 三宅藤九郎

秋の清謡会(十六) 十一月二十七日(日)午前十時始 熱田 神宮 能楽殿 須磨源氏 山岡 米子 加藤 茂代 須磨源氏 山岡 米子 加藤 茂代 須磨源氏 山岡 米子 加藤 茂代

観能隨想 寄稿 「花筐」発見 大衆館(9月5日)の「花筐」(泉嘉夫)をみて、「花筐」とはこういう能であったかという発見をした思いである。いかにも華やかで運びのある物狂能であった。演者によるシテ照りの前の造形は次のようであった。

狂女物の典型的な構成であるが、クルイでワキ官人を強く非難する点、自分の思いを間接的に訴えている強吟のクセなど、このシテは矜持のある気丈な性格の女性なのである。そういう気性の強さとも、皇子のロマンスの相手でもあるシテは、豊かな感性を持った若く美しい女性である。このシテの造形が、泉嘉夫師によって見事になされたと思う。

葉月(その二)と長月(その二)の舞台から
「能と狂言の会」「大衆能」
「観世会」「九皇会」

竹尾 邦太郎

「要上」シテ観、本幕で小袖を出す。病臥の装束である。小袖を掛一登台上的の「土蜘蛛」を...

紅梅記

「狂言共同社」百年の歴史

「狂言共同社百年の歴史」(上) 下) 井上松次郎編。狂言共同社発行。

を始める通り、飾りしているが、浅黄大口・白長袖(鉄線文様)・藤ノ天冠を着けた後場は、序ノ舞の運びが何かとぼとぼとして、流れるような藤の花房、の流麗なイメージは薄かった。なお藤付松立木は丸台。(1時間22分)

て器用な奴じや」と言わせる程にシテ高義の芸も上り、師弟の息はびたり。(24分)
「船弁慶」ワキのサシ以下を省略して着せり。宿を借るワキのアイとの問答も抜き、「正しく静は御供と見え申し候」の無い。...

舞台からの名演技を名筆で描く……
二井栄逸師画抄集
94 能画カレンダー
ご好評を頂いております能画カレンダー1994年版。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の美麗カレンダーです。



株式会社 セントラルパーク

本社 名古屋市東区泉1丁目23-36(NBN泉ビル)

PHONE 052-961-6111 FAX 052-953-2910

流・金剛流 世宗本行元 観家流 榎書店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1 電話03(3291)2488-9 振替東京3-3552 〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入 電話075(231)1990 振替京都1-113

能楽の友

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目16-18 (郵便番号 464) 電話(052)731-7984 振替口座名古屋0-36393

購読料 1年1000円 輸送の場合 1年1500円 一 部 90円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

(11月)

- 21日(日)宝生会定式能 (有料)
23日(祝)名古屋和泉会別会 (有料)
27日(土)清願会大会 (来場歓迎)
28日(日)久田親正会大会 (来場歓迎) (番組①面)

(12月)

- 4日(土)名古屋能楽鑑賞会 (有料) (番組②面)
5日(日)歳末助け合い協賛能 (有料) (番組②面)
11日(土)鳳の会 (有料) (番組②面)
12日(日)豊泉会能 (有料) (番組③面)
26日(日)乱能 (有料) (番組③面)

(平成6年1月)

- 3日(月)能楽協会名古屋支部開初式 (能楽協会関係者)
8日(土)名古屋学生能楽連盟 (来場歓迎)
15日(祝)名古屋清願会大会 (来場歓迎)
30日(日)青陽会定式能 (有料)

(2月)

- 5日(土)朝日カルチャーセンター能楽会記念能 (来場歓迎)
6日(日)宝生会定式能 (有料)
11日(祝)恵福会大会能 (来場歓迎)
13日(日)観世会定式能 (有料)
20日(日)九草会定式能 (有料)
26日(土)恵美寿会 (来場歓迎)
27日(日)恵美寿会 (来場歓迎)

(演能変更の際はご了解下さい)

高安流十四世・高安勝久師 宗家継承披露能 明春3月21日、熱田能楽殿

宗家継承披露能

高安流十四世・高安勝久師

能賛協 協賛能

能楽協会名古屋支部主催

12月5日 能3番上演

能楽協会名古屋支部(野村又三郎支部長)主催による平成五年度の歳末助け合い運動協賛能は、きたる十二月五日(日)熱田神宮能楽殿で、観世流、宝生流による能三番、観世、金巻、金剛、喜多各流による仕舞、和泉流狂言など協会支部能楽師の出演で開演される。

仕舞・観世流「浮舟」(高木実智子)、「扇」(今沢美和)金巻流「八鳥」(前田茂穂)金剛流「籠」(百々康治)喜多流「殺生石」(和谷衛市)

平成5年11月・12月放送予定

- (11月)NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
28日(日)金剛流「小督」金剛巖
(12月)NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)
5日(日)観世流「野宮」藤波重和
12日(日)宝生流「絃上」高橋章
19日(日)喜多流「玉葛」香川靖嗣
26日(日)観世流「恋置」山本真義

テレビ祝日能

- NHK教育テレビ(午前9時)
12月23日(祝)喜多流能「白田村」喜多節世

平成六年度名古屋観世会定式能は、二月十三日(日)を初回として年五回催される。予定番組は次のとおり。
第一回 二月十三日(日)十二時半始 観世 芳伸
第二回 四月十日(日)十二時半始 片山 清司
第三回 六月十二日(日)十二時半始 阿班 山本 勝一

観世会定式能

平成六年度

能に親しむ会 舞臺子を上演 12月4日 瀬戸市で開催 能楽の普及をめざして平成二年瀬戸市に誕生した「能に親しむ会」(事務局瀬戸市川西町二九三、水野芳)は、日本に出合う能・狂言のタイトルで、毎年演能を公演しているが、本年は、きたる十二月四日、瀬戸信用金庫エントゼルホールで舞臺子を上演する。

久田親正会秋季大会

十一月二十八日(日)午前九時半始 熱田神宮能楽殿

久田親正会秋季大会出演者リスト: 高砂、西沢悦子、河村真之介、大野誠、山内ふさ、船橋里美、高橋啓子、杉東俊子、高橋啓久子、金井美晴、小沢保、坪井美記、佐野安男、中村秋枝、村松綾

主月雅日記

(146)

椎の木酒場

えと文 二井栄逸

私の畏友、丹羽征夫さんの自著「風の森から」というエッセイ集(三重タイムズ社発行)の中に椎の木酒場という一篇がある。私は椎の木が好きなので、時々そのエッセイを読んでいる。椎の木の香りを愛しながらか、静かにオンザロックを飲んでいる気分になるからである。丹羽さんはしばしば、椎の木酒場の場所を人に明かさないうそである。一寸エッセイの一部をお借りして見よう。

「フト、立ち寄った「椎の木」酒場は、椎の林の木陰にあつて、白い小じんまりした瀟洒な建物である。街はずれの林の中にあるが、こんな処に?といふかるぐらいの静かなたずまいである。「今日は」とドアを押すと、酒場のなかの空気が入れかわるよう、椎の花の香りが侵入してくる。廊下(ろうた)けた人が顔をあげて「いらっしゃいませ」とこやかに笑顔をみせる。カウターのなかのその人は静かな物腰の、泥太の着物を着て青い帯を結んでいる。影の深い顔立ちの眼元に青い髷が透んでいる。家の中は意外に明るく、五月の風が透明な色で開け放った窓の外を透つてくる。誰も他の客のいない午前の時間帯のなかで、ここだけの空間が静かな時間の推移を感ずる。



喫茶店によく音楽をききにいったことを思い出す。何となく椎の木酒場と似ているのである。椎類は、日本の照葉樹林を代表するブナ科のひとつで、五月、六月の花の季節になると山全体が黄色っぽく見える。芭蕉は「旅人の心にも似し椎の花」の句を残している。(平成五年十一月十日)

豪華コレクション

「池田家伝来 能面」

学習研究社が11月発売

学習研究社では、好評を博した「三井家旧蔵・能面」につづき出版として、このたび、林原美術館の全面的な協力により、豪華コレクション「池田家伝来 能面」を刊行、十一月発売する。

西国の名家である岡山藩池田家は、代々能楽の発展に力を入れ、その能装束のコレクションは、質、量ともに第一級のもので有名であり、昨年来、はじめて、能面に学術調査の光が当てられ、総計百七十面という数にもとより、質的にも、室町の古面から江戸前期・中期の一桁能面師による作品がそろっていることが明らかにされた。「池田家伝来・能面」は、この

なから、室町時代の古面をはじめ、最優品五十二面をカラー写真で初公開、また狂言面の逸品十四面もあわせて掲載、大名家最高といわれる能面コレクションの全貌を紹介している。

とくに能面の持つ神秘的な趣きとその魅力が堪能できるよう、また能面打ちの手法として活用できるように、さまざまな角度から立体的、多面的に新規撮影を行い、さらに能面を実際につけて舞う演能写真も収録。

コレクションは、女面十三面、男面十五面、附面六面、鬼神面十八面、狂言面十四面、伝来作、増女、御前舞の能面型紙二点がつけられている。

なお東京国立能楽堂では開館十周年の記念行事として、十月三十一日から十二月一日まで「池田家の能面コレクション」の一部が展示された。

監修・田辺三郎助武蔵野美術大

名古屋能楽鑑賞会公演(第八回)

十二月四日(土)午後二時始

熱田神宮能楽殿

解説 館楽評論家 西哲生

狂言 絢 茂山千之丞

丸石やすし 茂山真吾 後見 茂山あきら

能松 片山清司 山本順之

風 宝生 閑 柿原崇志 藤田大五郎

見留 茂山あきら

間 茂山あきら

後見 清水寛二 地謡 馬野正基 西村高夫

浅見 真州 岡田 歴史 浅井文彦

主権 名古屋能楽鑑賞会

事務局 名古屋市中区大幸4-19-26

TEL 052-722-4000

〔要員券〕 臨時会員八千円(自由席)

子チケット取扱いはチケットぴあ

(052-320-9999)

市内各プレイガイド、事務局、熱田神宮能楽殿

歳末助け合い運動

協賛 能(第二十五回)

十二月五日(日)午前十時半始

熱田神宮能楽殿

能組 熱田神宮能楽殿

能(親世流)

本田 熱田

酒戸三津子

間 杉江元 吉田定男 鬼頭喜太郎

後見 加藤 春枝 地謡 黒山 幸親 稲生 芳雄

泉 嘉夫 加藤 保彦 清久 田川 雅雄

仕 舞(親世流)

浮舟 高木美智子

融 今沢 美和

仕 舞(金春流)

八島 前田 茂徳

仕 舞(金剛流)

飯 百々 康治

地謡 小林 幸三 小川 幸三

地謡 竹川 幸三

地謡 菊川 幸三

仕 舞(喜多流)

殺生石 和谷 衡市 地謡 小出 甚吉

能(宝生流)

葛城 飯富 雅介 河村真之介 助川 龍夫

間 井上礼之助 福井 良治 大野 誠

後見 玉井 博祐 地謡 加賀山 徳治 鬼頭 嘉男

狂言(和泉流)

箕被 野村又三郎 井上 祐一

能(親世流)

安達原 高安 勝久 筑 鮎一 鬼頭 好信

間 杉江元 後藤 嘉津幸 竹市 学

後見 生駒 里翠 八神 孝元 高橋 暎一

梅田 邦久 地謡 今村 嘉男 小島 正邦

加賀 敏彦 祖父江 修一

附祝言 (終了予定 四時頃)

主権 能楽協会名古屋支部

入場料 二千円(全館自由席)当日券 二千五百円

前席券 各出演者 演者 師宅

お問合せ 熱田神宮能楽殿 電話 六八二一七五

鳳の会・第5回記念公演

十二月十一日(土)午後二時開演

熱田神宮能楽殿

内沙汰 井上 祐一 井上 靖浩

無布施経 佐藤 友彦 佐藤 融

素襖落 井上松次郎 大野 弘之助

文 井上 祐一 佐藤 友彦

主権 鳳の会

入場料 前席指定席三、五〇〇円、自由席二、五〇〇円

当日自由席三、〇〇〇円

チケット取扱いはチケットぴあ、市内各プレイガイド

問い合わせ 電話 052-852-1111 名古屋女子大学

林研究室 電話 052-835-3780 キャラリ

A.C.S 電話 05613-86430 井上 方

※当日会場ロビーにて狂言装束の展示が行われる。

土柳 シテ又次郎 ワキ清七
大鼓兵助 小鼓久次郎
太鼓長右衛門 笛善左
シテ門治 ワキ庄兵衛
大鼓弥市 小鼓半右
門 太鼓猪左 門 笛
六郎兵衛

狂言 今參 仙次郎 花子 源助 鶏
猫 又三郎 ぶくべの神 源助
米市 又三郎
右両日御能之節翁 仰候儀、
京都正不申来用無之候付、翁付
素袍二番目より長上下着用、三村
惣八、宮城六兵衛、翁下候得ども
病卒ニ付代役藤田六郎兵衛、宮城
勤兵衛、飛下て

同閏九月十九日奥御舞台御能
小鍛冶 シテ与兵衛 ワキ清七
大鼓彦次郎 小鼓久次
郎 太鼓長右 門 笛
善右 門

経政 シテ横川幸之助 ワキ
庄兵衛 大鼓彦次郎
小鼓与右 門 笛九郎
兵衛

三笑 シテ又次郎 大鼓管助
小鼓与右 門 太鼓長
右 門 笛六右 門
シテ与兵衛 ワキ庄兵
衛 大鼓彦次郎 小鼓
平左 門 太鼓長右 門
門 笛六右 門

竹雪 シテ与兵衛 ワキ清七
大鼓管助 小鼓与右 門
門 笛善左 門

烏帽子折 シテ又次郎 ワキ庄
兵衛 大鼓彦次郎
小鼓久次郎 太鼓長
右 門 笛六右 門
シテ又次郎 ワキ庄
兵衛 大鼓彦次郎
小鼓与右 門 太鼓
長右 門 笛九郎兵
衛

現在 七 大鼓兵助 小鼓平
左 門 太鼓長右 門
笛善左 門
俄御所置中入より
鐘道 シテ元十郎 ワキ三之助
大鼓彦次郎 小鼓平左 門
門 太鼓長右 門 笛九
郎兵衛

狂言 長光 惣吉 つり針 源助 ぬ
し平六 文次郎 俄ニ腹つゝ
正助 鬼の継子 又三郎
金津地蔵 志三郎
十一月廿二日 泉光院御能
右近 シテ又次郎 ワキ礼清七
大鼓管助 小鼓与右 門
太鼓長右 門 笛六郎兵
衛

清経 シテ幸之助 ワキ市十郎
大鼓彦次郎 小鼓平左 門
門 笛六右 門

誓願寺 シテ与兵衛 ワキ清七
大鼓兵助 小鼓与右 門
門 笛六右 門

道成寺 シテ門治 ワキ庄兵衛
大鼓孫三郎 小鼓四郎
兵衛 太鼓猪左 門

羽衣 六右 門
シテ門治 大鼓孫三郎
小鼓四郎兵衛 太鼓長右
門 笛六右 門
源氏供養 シテ与兵衛 大鼓惣
左 門 小鼓四郎兵
衛 門 笛六右 門

花月 シテ幸之助 大鼓孫三郎
小鼓四郎兵衛 笛六右 門
門

歌占 シテ門治 大鼓惣左 門
小鼓四郎兵衛 笛六右 門
門

葵上 シテ又次郎 ワキ清七
大鼓孫三郎 小鼓四郎兵
衛 太鼓長右 門 笛六
右 門

熊坂 シテ幸之助 ワキ庄兵衛
大鼓惣左 門 小鼓四郎
兵衛 太鼓長右 門 笛
池内信清著

東北 シテ門治 大鼓惣左 門
小鼓四郎兵衛 笛八
高砂 シテ門治 ワキ庄兵衛
清七 大鼓孫三郎 小鼓
四郎兵衛 太鼓猪左 門
笛八

弓矢立合 シテ門治 大鼓惣左
門 小鼓与右 門
門 笛六右 門

小謡 五口口
正月の謡初は、室町時代には正
月四日に行われ、豊臣秀吉の時代
には二日となり、江戸幕府の時代
は、始めは二日であったが、家福
の母室樹院の忌日二日と、家光の
忌日二十日の二日を思いで、
正月三日に、承応三年(一六五四)
から変わったようである。(一演劇
百科大事典)「能楽盛衰記」上巻
池内信清著

幕府の謡初は、四海波の小
謡で始まって、「老松」「東北」
「高砂」「弓矢立合」の順序で終
る。尾張藩もその順序に従って演
じているようである。

【筆者は岐阜市立女子短大教授】

尾張藩の能の歴史(三)

辻 宏一

壺 泉 能
十二月十二日(日)午後一時開演
熱田神宮能楽殿
講演 シェイクスピアの宇宙
「リア王」の舞台と人間
名古屋大学名誉教授
岩崎宗治

実 盛 泉 泰孝 地謡 鶴久利之
鳥追舟 大槻 文蔵 山本 正人
茂山千五郎 松本 薫
後見 茂山 茂

加藤 春枝 八神 孝亮 泉 雅一郎
飯富 雅介 寛 敏一 鬼頭喜太郎
高安 勝久 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
杉江 元 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
茂山千五郎

近藤 幸江 地謡 黒田 博 三島 憲
後見 泉 泰孝 地謡 今村 克彦 山本 正人
祖父江 修一 鶴久利之

飯富 雅介 寛 敏一 鬼頭喜太郎
高安 勝久 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
杉江 元 福井啓次郎 藤田六郎兵衛
茂山千五郎

能力 鬼頭 耕司
太刀持 佐藤 耕司
後見 河村真之介 地謡 杉江 元
助川 龍夫 高安 勝久 福井啓次郎
よし の 葉 牧野 元子 地謡 鈴木 幸夫
掛 川 近藤 修彦 小島 芳樹 加藤富貴子
狂言口 真似 太田冠者 熊沢忠美子 客 今沢 美和
舞臺子 東方 朔 吉田 定男 近藤 幸江 前野 都子
舞臺子 柳原富司忠 吉川 周子 加藤 春枝
池田 茂
池田 茂
池田 茂

福井啓次郎 恋之舞 清沢 一政 邦 邦
後見 井上松次郎 武田 邦
後見 井上松次郎 武田 邦
後見 井上松次郎 武田 邦

子 太郎冠者 前田 茂徳 次郎冠者 加藤 正嗣
後見 三村 恵子 竹市 幸司

舞臺子 万 後藤孝一郎 長田 博 戸内 澄子
地謡 松田 弘之 河村真之介
地謡 大野 弘之 河村真之介

山伏 高安 勝久 河村真之介
河村真之介
河村真之介

胡蝶 飯富 雅介
トモ 福井 良治
頼光 藤田六郎兵衛
河村真之介

鬼頭 英二 古橋 正邦 衣斐 正直
入道之伝 助川 龍夫 久田 徹二 中川 雅章
松山 幸親 須部 勲 井上 靖 佐藤 敏
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介

神 戸 新春能
1月15日神戸文化ホール
神戸新春能は、平成六
年一月十五日(祝)神戸
文化ホールで開催される。
今回は開館二十周年記念
の公演。主催神戸市、神戸文化ホ
ール。後援能楽協会神戸支部、神
戸親世会。
能「高砂」(藤井徳三)
能「羽衣」(吉井順一)
能「福の神」(茂山千五郎)
能「鞍馬天狗」(藤井完治)
一階席は売切れ、二階席三千九
十円。神戸文化ホール078・
351・3535

善竹忠一郎を襲名
狂言 大流流善竹孝夫氏
大流流狂言の善竹孝夫氏は、平
成六年より父君の名、善竹忠一郎
を襲名する。

野口伝之輔を襲名
森田流笛方・野口浩和氏
森田流笛方・野口浩和氏は父君
の名、野口伝之輔を継承、襲名被
襲の「能と能子の会」を十二月九
日、大阪能楽会館で開催する。

能 土 蜘蛛
入道之伝 助川 龍夫 古橋 正邦 衣斐 正直
松山 幸親 須部 勲 井上 靖 佐藤 敏
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介

能 杜 若
福井啓次郎 恋之舞 清沢 一政 邦 邦
後見 井上松次郎 武田 邦
後見 井上松次郎 武田 邦
後見 井上松次郎 武田 邦

子 太郎冠者 前田 茂徳 次郎冠者 加藤 正嗣
後見 三村 恵子 竹市 幸司

舞臺子 万 後藤孝一郎 長田 博 戸内 澄子
地謡 松田 弘之 河村真之介
地謡 大野 弘之 河村真之介

山伏 高安 勝久 河村真之介
河村真之介
河村真之介

胡蝶 飯富 雅介
トモ 福井 良治
頼光 藤田六郎兵衛
河村真之介

鬼頭 英二 古橋 正邦 衣斐 正直
入道之伝 助川 龍夫 久田 徹二 中川 雅章
松山 幸親 須部 勲 井上 靖 佐藤 敏
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介

能 安 宅
勸進 乱 能
十二月二十六日(日)午前十時始
於 蓬萊宮春殿門西南
申 樂 所
(熱田神宮能楽殿)

子方 野村 信行
野村 友彦
佐藤 友彦
井上 靖浩
竹市 学
佐藤 誠
大野 誠
松田 高義
大野 弘之
後藤 嘉津幸
井上 祐一
野村又三郎

能 組
祖父江修一 泉 嘉夫 長田 聡
勸進 乱 能
勸進 乱 能

能 土 蜘蛛
入道之伝 助川 龍夫 古橋 正邦 衣斐 正直
松山 幸親 須部 勲 井上 靖 佐藤 敏
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介

能 杜 若
福井啓次郎 恋之舞 清沢 一政 邦 邦
後見 井上松次郎 武田 邦
後見 井上松次郎 武田 邦
後見 井上松次郎 武田 邦

子 太郎冠者 前田 茂徳 次郎冠者 加藤 正嗣
後見 三村 恵子 竹市 幸司

舞臺子 万 後藤孝一郎 長田 博 戸内 澄子
地謡 松田 弘之 河村真之介
地謡 大野 弘之 河村真之介

山伏 高安 勝久 河村真之介
河村真之介
河村真之介

胡蝶 飯富 雅介
トモ 福井 良治
頼光 藤田六郎兵衛
河村真之介

鬼頭 英二 古橋 正邦 衣斐 正直
入道之伝 助川 龍夫 久田 徹二 中川 雅章
松山 幸親 須部 勲 井上 靖 佐藤 敏
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介
後見 野村又三郎 地謡 井上 靖 佐藤 敏
井上 祐一 松田 高義 河村真之介

錦繡の秋の舞台から

「宝生会」第七回久田徹二能
リサイタル「涛華能」

竹尾 邦太郎

「田村」シテ澄子、燈色の様
箱と濃緑の水彩のコントラストも
鮮やかな花守の童子の可憐。自慢
の桜を愛でる風情にしては、少々
謡が温かいのは詠嘆か。名所教
えに南の方、へ歌の中山清閑寺、
と舞を見込むところ、遠く今熊野
まで見渡す視線がよい。後シテは、
へ(瀬多の長橋)踏み鳴らし、と
弾みをつけるかに引き上げた左足
を、すつと下ろすと、右足強く踏
み、へ(駒も足並や、と右ウケたと
ころ、印象的だった。(1時間16
分)

「蟬丸」シテ章、ツレ正直。
皇子を捨てざるを得ないワキ(雅
介)の心痛と、都に名残の感懐の
道行を省略し、直ぐ弘明の雨の中
着セリフとなれば、「蟬丸」冒頭
の哀憐の情緒の幾許は消えしま
うのではなからうか。物着は、流
是で単狩衣の下に水衣を着込ませ
角帽子を着せるだけ、慌しく捨て
置かれるという趣はあるが、御衣
を受取って着る着る、という詞
章には割れない。初同、へこれ見
よや、と杖を投げ出してシオリ、
上下の街道を行く人馬を、心眼で

74号を教える
能謡誌「尚謡」

能謡誌「尚謡」(発行所神戸市
兵庫区下沢通二丁目二六四〇
七)は、発行以来すでに七十四号
を教える内容の濃い能謡の趣味誌と
して親しまれており、また「能謡
集」の刊行などで愛好者に知られ
ている。

主宰の坂本英夫氏は、できるだ
け多くの方々に「尚謡」の購読を
頂きたいとよびかけている。問い
合わせは、尚謡発行所(前記住
所)、電話〇七八一五七八一〇五
三五番。

今年限りでやめる
能楽殿喫茶部「城」

熱田神宮能楽殿の喫茶・食堂部
「城」(代表者西野彰彦さん)は、
ことし一杯で辞めることになっ
た。

「城」(本店三丁目住吉町)
は昭和四十五年から能楽殿に出
店、二十数年にわたって営業、代
表者の西野さんは井上松次郎師に
就いて狂言を修業するなど能楽愛
好の人の輪をひろげて親しまれて
きた。能楽殿運営委員会では、明
春からの喫茶部運営にはすでに決
定して支障を来さないようにし

「藤栄」シテ声屋藤栄・満次
郎の専横を、世情視察のワキ最明
寺時頼・勝久が戒める。卑しい魂
胆も成就して徳になれば汚さも忘
れること、昨今のゼネコン汚職の
お供方も同断。しかし、どこか引
つかかるところがあるか、眉間に
皺を寄せ、満次郎の男舞は少々神
経質で、羯鼓も図太くという訳に
はいかないようだった。藤栄の、
良心といふものだろうか。キリで、
ワキに恭順を示すのも、だから納
得出来るというもの。ワキ勝久、
品格をみせて上。(60分・9月
19日・宝生会)

「望月」シテ徹二、誠実気
の小沢利郎友房である。前場、
「此方(御入り候へ)」と、ツレ(歌
一)と子方(和児)に宿をする
ところ、早くも旧主の妻と子と察し
て二人を見返る目差が、心持充分
なら、名乗り終え、へ父に逢ひた
る心地して、とシテに寄る子方の、
シテの目を見詰める視線は真摯。
千方河村和男君の好演が大いに舞
台を盛り上げる。就中、敵ワキ望
月秋長(勝久)の泊り合わせる暗
合に気色ばむところ、またクセ後
の「いざ討たう」のタイミングと
迫力、盲目を装うツレの袖を引き
て羯鼓も堂に入って恰好よい。
後シテは茶地に宝輪ト鶴菱文様
厚板を被せ、一ノ松からワキを見
込むと構態の幅一杯に大きく回り
流シで正先へ出てくる。その呼吸
もよく、獅子舞は大きく鮮やか。
膝行してワキの眼を窺うスリル

西野さんは「二十数年営業致し
てきました能楽殿の店を私どもの
事情により今年一杯で辞めること
にしました。とても淋しいことで
すが致し方ないと思っております。
今後ともご厚情を賜りますよう
お願いいたします」とあいさつし
ている。

観世流謡曲本
ちくさ正文館

ちくさ駅前
電話01137

は子方ならずとも胸が高鳴った。
アイ祐一、実直。地は嘉夫・秘。
藤高・修一ら(クセ前、へ稚かり
し心にも、の辺りだけ少し怪しか
ったが、シテをよく支える)。唯
子を六郎兵衛・富司忠・敏一・悟
(好演)。主役見は貴弘。(1
時間33分・10月9日・第七回能
リサイタル)

「舞獅子」乱・広蓋ノ式」シテ
永謙、切戸から出る。襟白・濃緑
色紋服・濃色長袴・小サ刀。座着
くと地頭・連成がワキ謡を独吟し、
後見は下り端の囃子(希世・富司
忠・敏一・喜太郎)で広蓋を捧げ
本幕で出る。スミから正中へ対角
線に運び、シテの前に広蓋を置く
と、シテは懐紙を取り出して右横
に置き、小サ刀をそこへ外す。坐
ったまま物着となり、袴の上を脱
ぐと、広蓋から唐轡を出して重折
(打掛け様)に着、脱いだ物は広
蓋に入れられて後ろに下げられ、
地謡左端に送られる。全ては手際
よく坦々と進み、シテは立って舞
い出す。この間の経緯は、所謂
「古式」と異同があり、金剛右京
談・三宅裏聞書に「能楽芸話」
(昭和46年増刊)に詳しい。

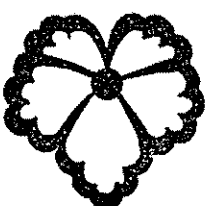
さて、「乱」へ月星は隈もな
き、と正中で長袴の裾を大きく前
に捻ねて月ノ扇をしたときの、流
れるようなS字形の曲線の美し
さ。へ声の葉の、と片足立ちで笛
を吹く型の浮き立つ気分。舞の中、
前に振る長袴の裾も巧妙なか
らに揺れる。熱田神宮の舞台上に
乱し足、纏れるのはと不安も過
る流し足の至難の技の冴え。左足
引き上げて頭(かぶり)を振れば

汗が散り、水から上った狸々の頭
現。大きく鮮やかに舞上げて舞金
剛の真骨頂、永謙の見事な舞台だ
った。なおこの曲、宗家の一子相
伝であり、紅地小菊文様唐轡は極
まり、海軍能初回「墨染按」前
シテに流用されたのも記憶に新し
い。(37分)

「素袍落」シテ又三郎、黒渦
雲に稲妻と雷太鼓文様肩衣が何や
ら前途の波瀾を暗示するか。一旦
は断るが、門出の酒、と言われて
頬を弛め、盃を重ねる度に怪しく
なっていくのへ、諷刺はするが一
方では酔って酔態観察を楽しむか
の伯父・礼之助の風情。あるとき
飲(や)らずに戻っていたら、と
思う酒客は多からう。(25分)

「内外詣」シテ三春。参宮
のワキ勲使・勝久に祝詞を上げ、
ツレ神子・恭三は神楽、シテは菊
子舞を奏し、更にツレの破ノ舞の
間にシテは再び物着してキリを舞
上げる賑々しさである。本年の式
年参宮の時宜に違い、当地では大
正九年(一九二〇)にシテ先代殿
ワキ西村弘敬(勝久祖父)の上演
がある。金剛流の専有曲で稀曲、
獅子を舞うところから重習の一で
雅子方(六郎兵衛・啓次郎・総一
郎・龍夫)、後見(永謙・幸徳・
洋樹)、地頭(通成)は長袴。翁
鳥帽子・白大口・源氏香文様を金
で描った白地単狩衣(露熊茶)の
直面のシテの、祝詞で幣を振る姿
が堂に入り、熱田神宮の舞台上に
何にも相応しい。紅白黒唐轡厚
板(毘沙門亀甲地に飛雲と龍ノ丸
文様)を被いて走り出した獅子が、

城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路(中区栄3-10)
電話 241-0248



料理
あつた
菜
軒

- 本 店 熱田区神戸町五〇三 電話(078) 868618
- 神宮東門店 熱田区神宮一丁目 電話(078) 559869
- 中 店 松坂屋本店10階 電話(078) 338251
- 売 店 松坂屋本店地下1階 電話(078) 376611

正しいメガネでしあわせを……
メガネの日進堂
●駐車場完備 名古屋市中区那古野2-20-23(円頓寺本町)
▽451 TEL (571) 6181-3

株式会社 セントラルパーク
本社 名古屋市東区泉1丁目23-36(NBN泉ビル)
PHONE 052-961-6111
F A X 052-953-2910

流 剛 流 宗 家 本 元 檀 書 店

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電 話 03(3291)2488-9 振替東京3-3852
〒604 京都市中京区二条通鉄屋町東入
電 話075(231)1990 振替京都1-113

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464)
電 話 (052) 731-7 9 8 4
振替口座 名古屋 0-36393
購 読 料 1年 1000円
輸送の場合 1年 1500円
一 部 90円

演能カレンダー

(熱田神宮能楽殿)

- 〔12月〕
- 26日(日) 熱田神宮能楽殿改修資金勸進乱能 (有料)
 - (平成6年1月)
 - 3日(月) 能楽協会名古屋支部初式 (能楽協会関係者) (来場歓迎)
 - 8日(土) 名古屋学生能楽連盟 (来場歓迎)
 - 15日(祝) 名古屋清韻会大会 (来場歓迎) (番組②面)
 - 30日(日) 青陽会定式能 (有料) (番組③面)
- 〔2月〕
- 5日(土) 朝日カルチャーセンター能楽会記念能 (来場歓迎)
 - 6日(日) 宝生会定式能 (有料)
 - 11日(祝) 恵福会大会 (来場歓迎) (番組④面)
 - 13日(日) 観世会定式能 (有料)
 - 20日(日) 九阜会定例能 (有料)
 - 26日(土) 恵美寿会 (来場歓迎)
 - 27日(日) 恵美寿会 (来場歓迎)
- 〔3月〕
- 6日(日) 大隈狂言会 (来場歓迎)
 - 13日(日) 三交会大会 (来場歓迎)
 - 20日(日) 梅嶺会能 (有料)
 - 21日(祝) 高安流久観名記念能 (有料)
 - 26日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)
 - 27日(日) 登泉会大会 (来場歓迎)
- (演能変更の節はご了承下さい)

法政大学では、昭和五十四年に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設立し、すでに十四回の授賞が行われているが、本年も、各方面の

大鼓方 安 福 建 雄 氏
大鼓方 柿 原 崇 志 氏
大鼓方 亀 井 忠 雄 氏

観世寿夫記念法政大学能楽賞

法政大学では、昭和五十四年に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設立し、すでに十四回の授賞が行われているが、本年も、各方面の推薦により推薦された候補者について選考委員(川上忠雄(法政大 学理事)・観世栄夫・馬場あき子・西哲生・表章の五氏)により慎重に選考された結果に基づき、第十四回の受賞者として次の三氏を決定した。

・高安流大鼓方 安福建雄氏
・高安流大鼓方 柿原崇志氏
・葛野流大鼓方 亀井忠雄氏

〔授賞理由〕三氏ともに、能楽大鼓方として優れた力量を示し、曲趣を正確に把握した堅実かつ安定した技法によって現代の能楽を支えている。かつて能楽の嚆子方で最も後継者難が心配されていた大鼓方は、三氏の成長によって盤石の安定を得たと見える。年齢・芸歴、芸力ともに拮抗するので、

ドラマフェスティバル'93/'94

喜多流 能「景清」上演

1月12日 愛知県芸術劇場

愛知県文化振興事業団第十回公演 1994年の「ドラマフェスティバル'93/'94」のイベントとして、新春一月十二日(水)、愛知県芸術劇場小ホールで、喜多流「景清」が昼の部、夜の部の二回にわたり上演される。

主催 能「景清」を観る会、愛知県文化振興事業団、愛知県芸術文化センター

昼の部 シテ 栗谷菊生、夜の部 シテ 友枝昭世の両師。なお「那須与一語」を野村又三郎師が上演。

出演者(夜) (昼の部)
シテ、栗谷菊生、ツレ 栗谷明生、ワキ宝生、ワキツレ 殿田謙吉、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・福井啓次郎、大鼓・安福建雄氏、後見・長田隆、井上雄人、地謡・友枝昭世、香川靖嗣、栗

京都市文化功労者

金剛流 廣田隆一氏 受 彰

京都市は十一月十九日、一九九三年度(平成五年)の市文化功労者五人を発表、能楽界からは、金剛流シテ方として活躍する廣田隆一氏(六九)が受彰した。

京都市文化功労者制度は一九六八年に発足、今回で二十五回目、長年にわたって京都市の学術、芸術など文化の向上に功労のあった人々を顕彰している。

廣田隆一氏(ひろた・のりかず)

受賞者の略歴

安福建雄氏 (やすふく・たつお)

大鼓方高安流宗家。日本能楽会会員。

昭和十三年十一月十四日生れ。東京都出身。故安福春雄(高安流宗家)の長男。父に師事。初舞台は昭和二十二年の「経正」。昭和二十九年九月に発足の能楽三役養成会第一期生。立教大学文学部日本文学科卒業。

昭和三十三年「道成寺」を抜く。四十一年十一月、一噌幸政・住駒明弘・鶴木寿男・山本則寿氏と能楽春秋会を結成して約十年間活動(第一回が観世寿夫「那須」)。五十七年「検校」を抜く。五十八年に父が没して宗家預りとなり、同年「関守小町」、翌五十九年「娘抽」を抜く。

おほかた、かつ曲の位的的確にとらえた演奏に定評があり東京芸大邦楽科、国立能楽堂研究主任講師として後進を指導している。

柿原崇志氏 (かきはら・たかし)

大鼓方高安流。日本能楽会会員。昭和十五年十一月三十日生れ。

能面型紙集

中西 通編集 (能楽資料館館長)

能面打ちの最高技法書

世阿弥の時代から江戸時代の作品まで代表作25面を厳選。各面は原寸・原色に忠実に、造形彫刻の特徴、彩色の特色を工芸技術の視点から解説する。また、作品の表情・雰囲気も模倣するための観察眼取得のテクニックを公開。日4判・豪華桐箱入り・限定700部

金剛流宗家 金剛 巖 推薦
観世流能楽師 観世 栄夫

- (1) 正面カラー写真
- (2) 左右両側面モノクロ写真
- (3) 面裏モノクロ写真
- (4) 型紙図面 各35葉
- (5) 型紙の制作
- (6) 型紙の使用例

能面

中西 通著 / 今駒清則写真
買の高さと充実した内容を誇る丹波篠山の能楽資料館に蒐集された能面を中心に、舞台効果の優れているもの、歴史的・美術工芸的に最高水準にある能面百面の迫力ある姿を、質感あふれる写真で公開する。各面は様々な角度から撮影され、その中から最も特徴のある表情を抽出。表面の造形、面裏の彫りや焼印、漆書きの記録を細部にわたって収録する。数百年を経て今なお現役の舞台を飾る能面。その歴史と造形美を探る。

日4判/解説付/定価25750円

鎌倉新能

中西 通著 鎌倉新能生みの親であり、パレイティに富んだ演能の場と、そのすべてを理の尽す観客を創り得た著者が語る能談。

日6判/定価979円

能の見どころ

中西 通著 能は非常に合理的に深く考えられた演劇。とされるが、見どころの聞きどころを解説する。また「秘事目録」を公開。

日6判/定価1236円

能の知恵

中西 通著 観阿弥・世阿弥の厳しい芸道「化伝書」原文を現代語訳を上下段に分けて並べ、七編から成る伝書の内容を解説する。

日6判/定価979円

狂言のすすめ

山本東次郎著 室町時代から今日まで狂言を支えてきたもの、狂言の歴史、文部大臣賞に輝く大蔵流狂言師が狂言の心を見せる。

日6判/定価1654円



図書目録 運送

玉川大学出版部 〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL: 0427-39-8935

'94大槻能楽堂演能 自主公演、シリーズ

大槻能楽堂はことし改築十周年記念行事を多形に終了したが、明年の一九九四大槻能楽堂自主公演能の大要が次のように決定した。

Table listing performance dates, titles, and performers for the series. Includes dates from 1/3 to 7/15 and various plays like '狂言 二人袴' and '能 山崎天狗'.

紅梅記

一昨年卒都婆小町(室町)以来、上達を喜ぶ。一編花雀(小波後藤孝一郎)の謡は宇高通成受持。同氏の金剛流らしい謡にかつての青年達、今の同流の充実を支える面々の精進に感激ひとしお。能のことは別に。

狂言、新作

この春、親世清和氏のごことで、後日お知らせすることがあると申し上げた。実は八月に男子誕生。母子共に健全の由、名は清善君。多幸を祈る。めでたし。

この秋吉川英史氏(日本音楽史)が文化功労者になられた。わが恩師谷川徹三先生に次いでこれまためでたし。これからは錦秋のご研鑽を重ねられませう。

吉野・大和にくりひろげられた古代人のロマン

7月15日(金) 6時30分 狂言 月見座頭 茂山忠三郎 能 大原御幸 片山九郎右衛門

梅道会定期能

平成六年度大阪・梅道会定期能は、大阪能楽会館で四回開催される。

大阪

平成六年度大阪・梅道会定期能は、大阪能楽会館で四回開催される。

第38回学生能の会

平成六年一月八日(土)午前九時半始 熱田 神宮 能楽殿

名古屋清韻会大会

平成六年一月十五日(祝)午前九時半始 熱田 神宮 能楽殿

Table listing names and roles for the student festival and other events.

Large table listing names and roles for various events, including '御来聴歓迎'.

同正月廿五日 泉光院様持入 奥御舞台にて御能	難波 シテ与兵衛 ワキ清七 大鼓惣左二門 小鼓与右二門 太鼓長右二門 笛六右二門	頼政 シテ門治 ワキ庄兵衛 大鼓孫三郎 小鼓四郎兵衛 笛善左二門	杜若 シテ又次郎 ワキ市十郎 大鼓管助 小鼓与右二門 太鼓平北郎 笛六右二門	望月 シテ門治 ワキ庄兵衛 大鼓孫三郎 小鼓四郎兵衛 太鼓猪左二門 笛惣八	羅生門 シテ又次郎 ワキ清七 大鼓惣左二門 小鼓平左二門 太鼓長右二門 笛善左二門	熊坂 シテ幸之助 ワキ市十郎 大鼓兵助 小鼓与右二門 太鼓長右二門 笛六右二門	安宅 シテ門治 ワキ清七 大鼓孫三郎 小鼓四郎兵衛 笛惣八	俄御所望	雷電 シテ又次郎 ワキ庄兵衛 大鼓管助 小鼓与右二門 太鼓長右二門 笛六右二門	祝言 シテ与兵衛 ワキ市十郎 大鼓兵助 小鼓平左二門 太鼓長右二門 笛善左二門	狂言 鶴八ッ鉢 又三郎 ずおふ落 □吉 不閉座 頭 正助 朝比奈 千次郎 若菜 和泉 殿 やぐら 源助 俄御所望 太子手ばこ 正吉
---------------------------	---	-------------------------------------	---	--	--	--	----------------------------------	------	--	--	---

しば、泉光院主催の演能が行われている。能好きの方のようである。能が九番、狂言が七番である。二月廿七日 瑞祥院様持入御能	嵐山 シテ又次郎 ワキ庄兵衛 大鼓管助 小鼓与右二門 太鼓長右二門 笛六右二門	実盛 シテ門治 ワキ清七 大鼓孫次郎 小鼓平左二門 太鼓長右二門 笛六右二門	吉野節 シテ与兵衛 ワキ市十郎 大鼓兵助 小鼓久次郎 笛善左二門	大江山 シテ又次郎 ワキ清七 大鼓孫次郎 小鼓平左二門 太鼓長右二門 笛六右二門	花笠 シテ幸之助 ワキ市十郎 大鼓管助 小鼓与右二門 笛六右二門	夜討魚我 シテ門治 大鼓孫次郎 小鼓平左二門 笛六右二門	御所望 シテ又次郎 ワキ庄兵衛 大鼓孫次郎 小鼓平左二門 笛善左二門	桜川 シテ又次郎 ワキ庄兵衛 大鼓孫次郎 小鼓平左二門 笛善左二門	同	歌占 シテ門治 ワキ清七 大鼓管助 小鼓与右二門 笛六右二門	大会 シテ清左二門 ワキ市十郎 大鼓兵助 小鼓与右二門 太鼓長右二門 笛六右二門	祝言 シテ与兵衛 ワキ庄兵衛 大鼓孫次郎 小鼓久次郎 太鼓長右二門
---	--	---	-------------------------------------	---	-------------------------------------	---------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	---	-----------------------------------	---	--------------------------------------

尾張藩の能の歴史(三)

辻 宏一

狂言 せんじ物 又三郎 不須山三郎 不閉座頭 源助 くじ罪人 同人 さつくわ 同人 花折千次郎 嵐山閣猿蓑 敬告	瑞祥院は、四代藩主吉通の夫人輔姫である。この方も、能好きであったようで、「御能御囃子留」では、しばしば、瑞祥院主催の能が催されている。能十番、狂言七番である。	同三月四日 泉光院様持入鳥之間にて御囃子小鼓	鶴亀 シテ又次郎 大鼓管助 小鼓与右二門 太鼓長右二門 笛六右二門	経政 シテ幸之助 ワキ庄兵衛 大鼓孫二郎 小鼓	平左二門 笛九郎兵衛	采女 シテ与兵衛 大鼓管助 小鼓与右二門 笛六右二門	百萬 シテ又次郎 ワキ清七 大鼓孫次郎 小鼓平左二門 笛九郎兵衛	竜田 シテ与兵衛 大鼓兵助 小鼓与右二門 太鼓長右二門 笛六右二門	泉郎 シテ又次郎 大鼓管助 小鼓与右二門 太鼓長右二門 笛六右二門	是より御所望 放下僧 シテ又次郎 大鼓孫二郎 小鼓与右二門 笛九郎兵衛	山姥 シテ与兵衛 大鼓兵助 小鼓平左二門 太鼓長
---	---	------------------------	--------------------------------------	----------------------------	------------	-------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--	-----------------------------

平成5年12月・平成6年1月放送

[12月] NHK・FM能楽鑑賞(午前8時~9時)

26日(日) 観世流「恋重荷」山本真義
[平成6年1月] NHK・FM能楽鑑賞

2日(日) 新年番組のため中止

9日(日) 喜多流「安宅」栗谷菊生
16日(日) 狂言「木六駄」茂山千五郎・野村万蔵
23日(日) 観世流「定家」片山九郎右衛門
30日(日) 宝生流「待」今井素男

是界 シテ又二郎 ワキ清七 大鼓孫次郎 小鼓平左二門 太鼓長右二門 笛九郎兵衛	和布刈 庄兵衛 春永 清七	羽々 シテ与兵衛 大鼓孫二郎 小鼓平左二門 太鼓長右二門 笛九郎兵衛	狂言 太刀ばひ 千次郎 狐塚 源助 どんらん草 仙次郎 歌あらそひ 和泉 伯陽 源助 鶴なひ 又三郎 芥川源助	鳥の間が、簡便な能舞台として用いられたようである。能もできるように作られていたのである。能の曲目で「泉郎」、狂言の曲目で「どんらん草」と言った、今日では耳にしない番外曲が、演じられている。シテの又次郎を、又二郎と書いたり、大鼓の孫次郎を孫二郎と書いたりしているようである、同一人であろうと思われる。
--	------------------	---------------------------------------	---	---

青陽会定式能(第138期)

平成六年一月三十日(日)十時半始

熱田 神宮 能楽殿

高橋 一政	飯田 雅介	河村 大	鬼頭 好信
清沢 一政	橋本 幸	柳原 司忠	竹市 学
高橋 一政	飯田 雅介	河村 大	鬼頭 好信
清沢 一政	橋本 幸	柳原 司忠	竹市 学

霜月の舞台から

「万作の会」「観世会」「宝生会」と「和泉会別会」

「釣狐」シテ万作。一九五六の有り様をあらわすにせよ、少々の大段で、喧伝されてきた納めの「釣狐」も打ち上げである。狐を演じてその舞台数は空前絶後、先ず当代の狐役者であろう。されば万作は、この狐を肩の力を抜いて見て貰いたい、と言う。そしてその思いは、充分に報われた。豊かな経験に裏付けられた、役づくりの工夫の究極にある平明な狐だった。

竹尾 邦太郎

この秘曲の技術修得の過程、工夫の有り様をあらわすにせよ、少々の大段で、喧伝されてきた納めの「釣狐」も打ち上げである。狐を演じてその舞台数は空前絶後、先ず当代の狐役者であろう。されば万作は、この狐を肩の力を抜いて見て貰いたい、と言う。そしてその思いは、充分に報われた。豊かな経験に裏付けられた、役づくりの工夫の究極にある平明な狐だった。

梅 須部 浦	山 須部 浦	狂言 宝の笠 佐藤 友彦	能 融 前野 郁子
後見 今沢 美和	後見 久田 敬二	後見 三村 恵子	後見 梅田 邦久
三村 恵子	加藤 信男	地謡 高橋 幸親	地謡 高橋 幸親
加藤 信男	武田 邦弘	地謡 高橋 幸親	地謡 高橋 幸親

算され尽した演技プランの、稽古の果てに身に付いた自然体の素晴らしさだったが、浮かれた小歌の帰途、捨て置の、狐への執着と迷いは、少々どく思えた。

後場、独り言に翼を仕掛ける狐師の、手慣れた印象は、土を被せて細を隠すこともなく平静。後シテは幕内で二声、揚幕上げた後から頭を出して一声、哭くと走り出た。一ノ松勾欄に両手を掛けて辺りを見渡す狐の面は切切。異近く、床に背を擦りつけ、餌を見ては身縮み、手を出しては退却して踊る。もんどり打って翼の細を跳び越え、右膝着いて天を仰ぐや、尾を引く長い啼き声の哀調、と万作は、如実の生感である。

餌に這い寄り、後退りし、身体を押えたとみるや旨い匂いに忘我立ち上り飛び跳ねるに似せるところから、翼を外すと、一ノ松で餌師を見送り、鋭く嘲笑を浴びせて四足に走り込む姿も見事だった。なお、先代万作著「狂言の道」に「たけし、たけし」とアドの本名を呼ぶ聞きは聞かれなかった。蛇足ながら、揚幕の楽屋後見の手際で、前シテが忽然と出現する

